

「八幡史学館」資料 第1シリーズ 平成18年

番号	表題	内容	実施日	講師	備考
	平成18年度	八幡公民館主催事業			
		八幡史学館募集案内			
1	◎	第1回講座＝「八幡の歴史①神話から江戸開府まで 天正18年家康差上げ八幡宮境内図裏面補足付、足利義満(若宮)神輿写真(立ち姿) ①はじめに海と神話あり(八幡の始り) ②平安中期、菅原孝標のれん車がゆく ③謎多い飯香岡八幡宮の創建伝承(白鳳創建と移転説) ④源頼朝が鎌倉をめざし、足利義満は八幡宮にみこしを寄進 ⑤八幡公方足利義明と千葉宗家の内乱	平成18年9月12日	山岸弘明	
2	◎	第2回講座＝八幡の歴史 ②江戸時代の八幡 ①八幡史学館へようこそ ②謎多い2つの八幡藩とその城地 堀八幡藩、大久保八幡藩 ③じんや鈴木家と南町みお蔵屋敷 ④八幡藩主の変遷と村高 ⑤厳しい年貢取立てに泣いた領民たち ⑥宿場町、継立て寄場として発達 ⑦年貢津出し港、五大力船が江戸へ向かう ⑧江戸時代の八幡絵図と人口 ⑨明治維新の戦いから廃藩置県へ ⑩八幡はかつて市原の中心地で「豊かな歴史の町」	平成18年10月17日	山岸弘明	
3	◎	第3回講座 飯香岡八幡宮探検隊 ①はじめに飯香岡八幡宮ありき＝公民館でコース概要説明 ②昇殿参拝からスタート＝社殿内部を見学 ③足利義満のみこしと徳川家康の大太刀＝宝蔵庫見学 ④江戸後期の石橋跡＝往還側烏居周辺の文化財 ⑤上総、安房6藩の大名行列が通過＝房総往還	平成18年11月14日	山岸弘明	

	⑥別当寺は廃仏毀釈で廃寺に＝八幡宿駅		
	⑦石仏と不動明王＝満徳寺 (中略＝⑩八幡公民館昼食)		
	午後⑧拓本教室＝八幡の石造物研究会 (板倉満、鷲津寛子)		
	⑭江戸後期の商家造りを現存＝市川本店、東屋房総知県事本陣		
	⑮本多正信、正純らが年貢積出し港として築く＝南町みおと蔵屋敷跡		
	⑯戦後は潮干狩でにぎわう＝運動公園岸壁		
4	八幡公民館主催事業「こども史学館」 八幡という地名は？ 八幡宿という駅名は？ 講座原稿 講座資料	平成18年11月14日	山岸弘明
	八幡公民館主催事業「女性セミナー」		
5	「江戸時代にタイムスリップ」皇居東御苑と皇居	平成17年11月16日	山岸弘明
6	第3回「時代と庭園」庭園の歴史と江戸大名庭園の魅力	平成18年7月14日	山岸弘明
7	第5回「バス研修」江戸城北の丸と小石川後楽園	平成18年10月19日	山岸弘明
	八幡公民館主催事業「いきいき講座」バス研修		
8	情報発信基地朝日新聞社と築地界限散策	平成17年6月18日	山岸弘明

八幡史学(楽)館

八幡公民館主催事業資料集

もくじ

- 1) 平成18年度「八幡史学(楽)館」八幡の歴史①神話から江戸開府まで
- 2) " 八幡の歴史②江戸時代の八幡
- 3) " ③飯香岡八幡宮探検隊
- 4) 平成18年度「こども八幡史学(楽)館」八幡の歴史
- 5) 平成18年度「女性セミナー」③時代と庭園=大名庭園のみかた
- 6) " ⑤「小石川後楽園」バス研修会
- 7) 平成17年度「女性セミナー」「江戸城東御苑」バス研修会
- 8) 平成17年度「いきいき講座」「浜離宮庭園」バス研修会
- 9) 参考資料*初恋(文芸昭和39年10月号)立野信之ほか
- 10) 平成18年「城史跡OB会」案内資料ほか

担当講師 山岸弘明

平成18年8月18日

平成18年度

八幡史学館

1. 講座の目的

.....
ここ八幡宿は、どんな変遷を経て現在があるのでしょうか。八幡の歴史を「飯香岡八幡宮文書」をもとにひもといてみましょう。
.....

2. 日程

第1回	9月12日(火)	午前9時30分~11時30分
第2回	10月17日(火)	午前9時30分~11時30分
第3回	11月14日(火)	現地巡検

- 現地巡検は、午前から午後までの日程で行います。昼食・飲み物の用意が必要
 - が必要です。
- 詳しくは、第1回講義のあとにお知らせします。

3. 講師 山岸 弘明 先生

4. 参加費 150円 第2回目に 集金します。
(現地巡検時に必要になります。)

5. 募 集 定員40名。 全日程に参加できる人。
申し込みは、窓口または電話で先着順とします。

《お願い》

やむを得ず欠席する場合は、当公民館（TEL 41-1984）へ必ずご連絡下さい。

欠席された場合には、資料を取りにおいでくださいますようお願いいたします。

市原市立八幡公民館

平成18年度

八幡公民館主催事業② 出会いふれあい学び広める

18.4.1

	講座・教室名	受付	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1	房総見て歩き 1回 一般成人 40名 8:40~16:30	18		12(水) 15(土) 15(土)										
2	八幡史学館 3回 一般成人 40名 9:30~11:30	18						12(水) 山手弘明	17(火)	14(火)				
3	子育て教室 7回 一般成人 20名 9:30~11:30	18			15(木) 純銀クロッシェ 田中友子	13(木) バックアップ子育て 子ども福祉課		21(木) 糖分を調べよう 県消費者センター	26(木) 街の安全 市原吾察	30(木) パンづくり 二階堂ゆうみ	17(日) 自分との向き合い方 西村妙子			8(木)? 人権★ 板垣美知子
4	パソコン教室 4回 一般成人 20名 9:30~11:30	18		18・25(木) 青少年会館 NPO	1・8(木) 青少年会館 NPO									
5	更級日記の世界 3回 一般成人 45名 13:30~15:30	18			29(木) 田所 真	27(木)	31(木)							
6	染め物教室 5回 一般成人24名 13:30~15:30	18									7(木) 成登やえ	18(木)	1・15(木)	1(木)
7	自然観察 3回 一般成人40名 10:00~15:30	18	28(金) 青葉の森 田辺盛光	26(金)				22(金)						
8	いきいき八幡塾 7回 一般成人 40名 13:30~15:30	18	27(木) 健康体操 武道館職員		24(土) 裁判員制度★ 島村マヨ		10(木) 市原の文化財 田中清美	14(木) 笑いは宝★ 帝京平成大学		16(土) 田中 操	14(木) 正月飾り 若菜金蔵		8(木) 中央博物館職員	
9	歴史民俗ゼミ 3回 一般成人45名 13:30~15:30	18										20(土)		
10	陶芸 8回 一般成人 20名 13:30~16:00	13	18(火) 根本正男	2・16(火)	20(火)	4・25(火)	22(火)	5(火)						
11	ストレッチ&パワー 5回 一般成人 35名 13:30~15:30	13	19・26(水) 根本寿美子	17・24(水)	14(水)									
12	健康パン工房 3回 一般成人 20名 9:30~12:00	18						27(水) 南郷萬子	25(水)	22(水)				
13	料理の基本 3回 一般成人(男性)20名 13:30~16:00	18						15(金) 徳政牧佐子	20(金)	17(金)				
14	ソーセージ作り 1回 一般成人 20名 13:30~16:00	19							13(金) ソーセージ 西野浩一					
15	正月料理 2回 一般成人 20名 13:30~16:00	18								1(水) 南郷萬子	8(金)			
16	太巻き寿司 2回 一般成人 20名 13:00~15:30	19										24(水) 上田悦子	28(水)	
17	健康味噌作り 1回 一般成人 24名 9:00~12:30	18											21(水) 大綱和子	

都合により変更することもあります。
募集は広報いちほら15日号に掲載

受付は毎月18日 (月曜休館の場合は19日)

★ 一般募集なし ☆ 特別募集あり

お問い合わせは八幡公民館(☎41-1984)へ

5

	講座・教室名	受付	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1	ニューススポーツ A 1回 小学生 60名 9:30~11:30	9/18				29(土) 体育指導委員								
2	おはなしひろば 22回 幼児・小学生(保可) 10:00~10:40	当日	1・15(土) 読み聞かせボラ	6・20(土)	3・17(土)	1・15(土)		2・16(土)	7・21(土)※	4・18(土)	2・16(土)※	13・20(土)	3・17(土)	3・17(土)
3	小学生大正琴教室 6回 小学4~6年生 16名 9:30~11:30	6/18				15(土) 前田房恵・公サ		12・26(土)	9・30(土)	14(土)				
4	子ども夢工作 A B 各1回 小学3~6年生 各20名 9:30~11:30	7/18						A-17(木) B-24(木) 究明協会						
5	ゆかたを着よう 2回 小学5年生~高校生 20名 13:30~15:30	5/18			17(土) 芳口千恵・公サ	1(土)								
6	子ども琴教室 6回 小学生~中学生20名保可 9:30~11:30	3/13	22(土) 林 美有記・公サ	13・27(土)	10・24(土)	8(土)								
7	気象キャスターの地球環境教室 小学5年生~中学生1回40名 9:30~11:30	7/18					8月上旬(未定) 気象キャスター							
8	子ども史学館 1回 小学5年生~中学生30名 9:30~11:30	7/18					8(火) 山岸弘明							
9	落語教室小1回 中1回 小学生~中学生 10:00~15:30	*							27(金) 若宮小 八幡東 古今亭菊之丞					
10	ケーキを作ろう 1回 小学4年生~中学生20名 9:30~12:00	11/18									10(日) 南郷真子			
11	茶道教室 2回 小学生~中学生10名 13:30~15:30	9/19							1・8(日) 齋藤早苗					
12	親子クッキング 1回 小学生親子10組 9:30~12:00	10/18								11(土) 二階堂ゆりみ				
13	親子ふれあい教室 6回 小学生親子40名 9:30~11:30	5/18			3(土) 高齢者健体体験 ボランティアセンター職員	22(土) 竹工作 寺尾泰文	夏休み2回 土器作り 県職員		28(土)★ ネイチャーゲーム 寺尾泰文			10(土) 環境学習(石鏡) 環境財団		
14	人形劇 1回 幼児・小学生(保可) 10:00~11:30	当日				28(金) 人形劇団「Z」								
15	たこ作り 1回 小学生20名(保可) 9:30~11:30	10/18									2(土) 高橋忠友			
16	女性セミナー 8回 一般女性35名 9:30~11:30	4/18		17(水) 環境 環境財団	21(水) 石鏡工場見学 ライオン石鏡	19(水) 時代と商團 山岸弘明		14(木) 笑いは宝☆ 帝京平成大学	19(木) バス研		27(水) 生花 齋藤真子	17(水) 氣功 大野桂子		7(水) 柳穂ボランティア講座 田邊昭雄 ☆
17	手芸(パッチワーク) 一般女性20名 9:30~11:30	9/19							13・20(金) 上平法子	10・17(金) 上平法子				
18	福寿大学 7回 市原地区シニアクラブ 13:30~15:30	*		10(水) 健康体操 武道館職員		12(水) 生活の知恵袋 消費者センター		13(水) 菓の使い方 帝京平成大学	11(水) カラスの秘密 唐沢幸一	8(水) ふれあい演奏		27(土) 新春楽しみ会		14(水) バス研
19	ニューススポーツ B 1回 小学生・高齢者80名 9:30~11:30	7/18					6(日) 体育指導委員							

都合により変更することもあります。

★一般募集なし ☆特別募集あり

募集は広報いちからは15日号に掲載 受付は毎月18日(月曜休館の場合は19日)

お問い合わせは八幡公民館(TEL41-1984)へ

八幡公民館「八幡史学(楽)館」 八幡の歴史①神話から江戸開府まで
平成18-9-12(火曜日)

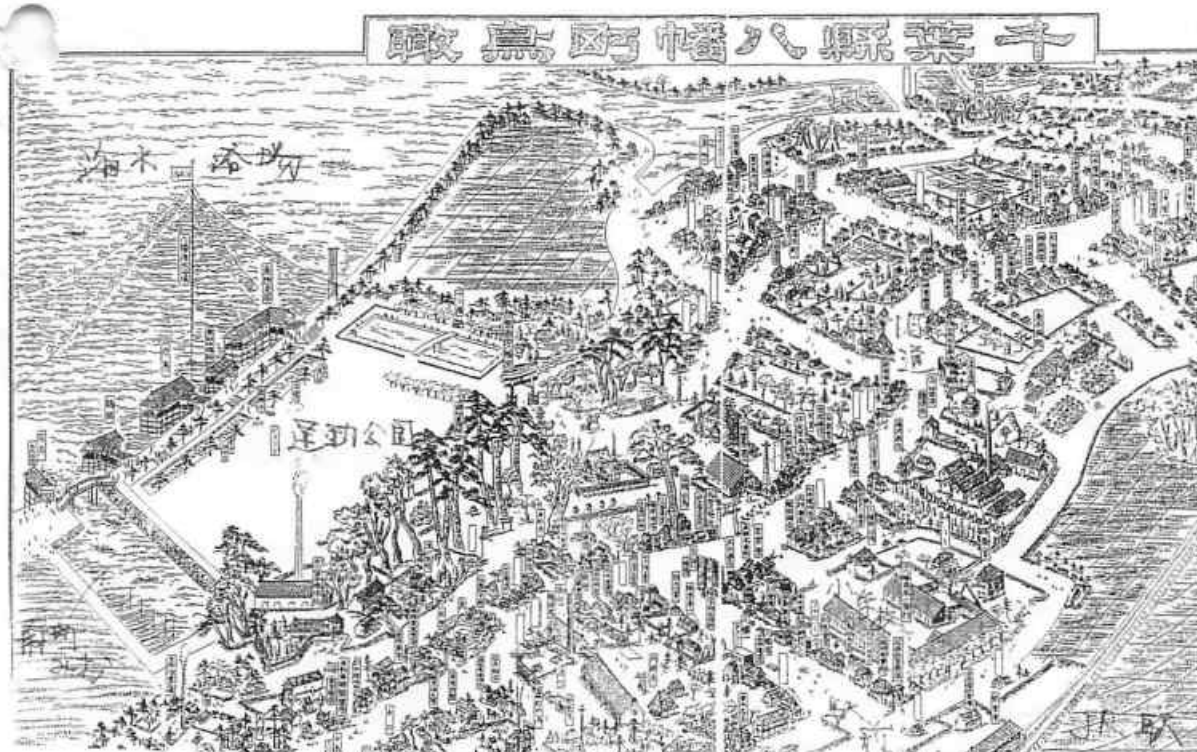
山岸 弘明

八幡宿(市原市八幡)の江戸時代は海と陸の交通要衝として発展した宿場町でした。市原の内陸部や外房海岸から運ばれてくる年貢米の中継基地で、八幡海岸から「五大力船」と呼ばれた中型帆船が海路9里(およそ36km)、年貢米を江戸(東京)へ津出ししました。かつて浜本(はもと)地区は五大力船の船問屋の拠点で年貢米を納める蔵が立ち並びました。南北に走る旧「房総往還」は参勤交代路で、休泊のための本陣や問屋場が置かれ、久留里黒田藩など7大名家が供揃いを整えて通行しました。幕府の街道保護政策で八幡から海路による直接の江戸入りが認められなかった一般の旅人たちも徒歩で江戸をめざしました。明治維新後は、船持ちや船乗りたちを除く一般の人たちはわずかばかりのたんぼで農業のかたわら、のりや貝を拾って生活のたしにしました。昭和戦前から戦後30年代にかけての八幡は観光地で、遠浅の海岸は海水浴場、潮干狩り、立客で賑わいました。

*

そして昭和32年八幡は一大転機を迎えます。千葉県が進める「京葉工業地帯造成計画」に協力、八幡海岸は埋め立てられて進出企業の大型プラントが次々と建設されました。八幡の町はこうして近代工業都市に生まれ代わったのです。つい40年前まで東京湾に接した小さな港町に、いまはもう潮の香りすら漂うことはありません。しかし注意深く旧「房総往還」や廻りの横丁を観察すると昔からの商家造りや蔵、赤レンガがそのまま残り賑わったかつての港町をほうふつさせます。

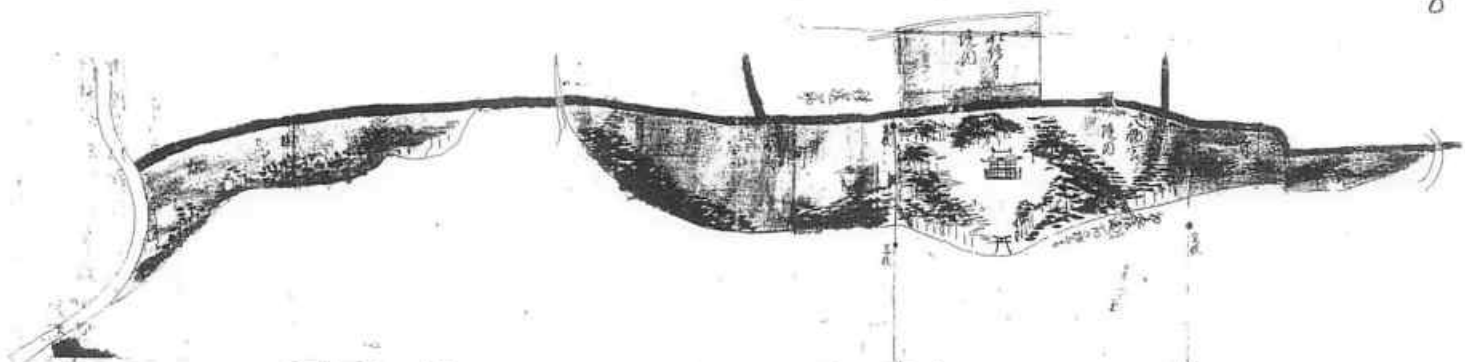
八幡の語源となった飯香岡八幡宮はいまでも八幡の人たちの心のよりどころです。うっそうとした樹木に囲まれた境内に一步足を踏み入ると、室町中期建造、東国武士団や庶民の崇敬を集めた重要文化財の社殿が歴史の重みを感じさせます。「八幡史楽館」では、豊富に現存する「飯香岡八幡宮文書」を中心にみなさんの町・八幡の歴史を楽しむことにします。



← 戦前の八幡町

↓ 潮干狩り





この絵図面、先般のとおり六尺五寸間、海内
成の方見通しがい立て御除地相違ござなく、このたび
御尋ねにつき絵図面をもって申し上げ奉り候ところ
くだんのごとし。

上総国市原庄八幡郷
天正十八寅年三月十三日
八幡宮社僧 円蔵坊印
同社神主 誉田齊宮判

御用掛 青山藤藏様

此繪舟の先般通り通ふ舟は
成の方見通し相違相違ござなく
御尋ねにつき絵図面をもって申し上げ奉り候ところ
くだんのごとし

天正十八年三月十三日

八幡宮社僧
同社神主

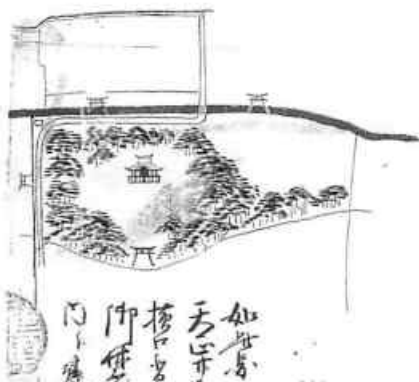
誉田齊宮判

舟角掛

青山藤藏様

以地場内屋上陸地
天正十八年正月

徳川家康御用掛
青山藤藏様



如世
天正十八年正月御用掛
青山藤藏様
御用掛 青山藤藏様

表書のとおり差し出し候ところ、同年五月
徳川様御上意につき小田原御陣所へ
召し出され御目見えの上、当社御祈願所
仰せ付けられ、すなわち非分の儀これなきよう御禁制
御証文頂戴仕り候こと
天正十八年寅五月

この図のごとく
天正二十年辰二月御境内構え堀
横口二間、土上げ場一間、これより
御禁制高札場構え堀外の
内へ立て置くものなり

面

- ① 「八幡史楽館」へようこそ
- ② はじめに海と神話ありき
- ③ 平安中期、菅原孝標の娘のれん車が行く
- ④ 謎多い飯香岡八幡宮の創建伝承
- ⑤ 源頼朝が鎌倉をめざし、足利義満がみこしを寄進
- ⑥ 八幡公方足利義明と千葉宗家の内乱
- ⑦ 八幡宮天正新市と寺々に残る中世墓碑
- ⑧ 豊臣秀吉の小田原攻略と上総進攻
- ⑨ 徳川家康の江戸打ち入りと「太閤検地」
- ⑩ 家康入府当時の八幡の所領配置



1) 「八幡史学(楽)館」へようこそ

- ① 趣旨=八幡の歴史を楽しみながら学ぶ
- ② 第2回(10月17日)=八幡の歴史②江戸時代の八幡
第3回(11月14日*16時まで)=飯香岡八幡宮探検隊(現地見学=八幡宮大研究)
- ③(1)市原の古文書研究会(講師=秋葉平先生)=飯香岡八幡宮文書の解説と研究
「市原の古文書研究第3集」(八幡宮文書①、鈴木家絵図ほか)=中央、八幡図書館で
「〃第4集」編纂作業中(八幡宮文書②、万徳寺文書ほか)、順次刊行予定
- (2)八幡の石造物研究会=飯香岡八幡宮を中心とした石造物の調査と研究
「八幡の石造物」=編纂作業中
ホームページ「私の美しい房総」市原市八幡地区の石造物=順次整備中
- (3)協力=飯香岡八幡宮、市川本店、本陣鈴木家、万徳寺
- ④ おすすめする八幡の歴史書
(1)平成16年度歴史散歩資料「市原市八幡地区の遺跡と文化財」(地方史研究連絡協議会)
(2)市原市八幡あれこれ(佐倉東雄)=ともに中央、八幡図書館で

2) はじめに海と神話ありき(八幡の始まり)

- ① 地名の起こりから
(1)市原=いちいの木の茂る野原、また広い一面の原っぱとも。
(2)八幡=飯香岡八幡宮の「はちまん」から。「八幡さま」の門前町として発展した。
- ② 日本武尊(やまとたけるのみこと)神話(伝説)
(1)日本武尊は大和(奈良)国家創設期(4世紀ころ)の皇子で英雄。父である景行天皇の命令を受けて大和政権にさからう各地の豪族たちを征服、死後白鳥となる。
(2)みことは関東や東北地方の反乱を静めるため東海道を下る。相模から舟で上総に渡るとき嵐にあう。妻の弟橘媛(おとたちばなひめ)が「わが身に代えてみことを守りたまえ」と荒波に身を投じ海神の怒りを静めた。姫の袖が流れついた所が袖ヶ浦で、富津から船橋あたりまでの内房一帯をいう。袖ヶ浦市は有名だが八幡海岸も袖ヶ浦といい、観音町に袖ヶ浦幼稚園が現存している。
(3)みことが八幡に宿陣した時、歓迎のご飯をたくよい香りがしたので「ご飯の香りの岡」となった。
- ③ 古墳時代は菊間国造(くにのみやっこ)が支配、八幡に集落はまだない
(1)大和朝廷時代、市原の南半分を支配したのは菊間国造で、菊間に巨大古墳や古代廃寺が残っている。
(2)当時の八幡は海岸の砂地で、古代の集落を示す古墳や住居跡、貝塚はみつからない。

3) 平安中期、菅原孝標の娘のれん車が行く(更級日記と古代駅路)

- ① 上総国府の誕生
(1)大化の改新(646年)後、天皇による新しい政治がはじまり国別に国府が置かれる。上総国府の位置は市原、郡本、惣社、能満説などがあるが特定されていない。
- ② 孝標(たかすえ)の女(娘)と「更級日記」
(1)国府の現地知事・上総介(国司)は都から派遣されほぼ4年の任期を勤めて京都に戻る。
(2)菅原孝標=学問の神様・藤原道真の子孫、代々文章博士、大学頭だが孝標は上総介に終わる。
(3)孝標の娘=寛弘5年(1008)孝標2女に生まれ、10才の時父の任地・上総国府に下り市原で3年間



おすすめる八幡の歴史書

を暮らした。歌人が多い血筋を受け文学に熱中、夫の死後、50才を過ぎてからその人生を回想した「更級日記」を書く。

(4)「あづま路の道のはてよりもなお奥つかた」ではじまる書き出しは上総国府かられん車で京都をめざす帰り旅。「境を出でて下総の国のいかだという所に泊まりぬ。俺なども浮きぬばかりに雨降りなどすれば、恐ろしくていもねられず」八幡から村田川をこえた池田(千葉市)に泊まったとする、どしゃ降りの第1夜の不安を表現している。

③ 五所小学校の「四反目遺跡」と「古代駅路」

(1)五所小の発掘調査で1000年以上前に作られた幅6mの古道が出てきた。国府と国府を結ぶ当時の駅路とみられる。また、すき、くわなどの稲作農具も発掘された。JR線から市原の高台までの平地は「条里制」といわれる古代に区画整理されたたんぼであった。

(2)古代駅路は市役所周辺から大馬屋に抜けたとされるが、阿須波神社から五所小をへて海岸通りを結ぶ道が確認されたことで、房総往還も早い時点から主要往還として利用されたことがわかる。

4) 謎多い飯香岡八幡宮の創建伝承(白鳳創建と移転説)

① 飯香岡八幡宮の由来(社伝)

(1)社伝は白鳳4年創建。天武天皇の命を受けた桜町中納言鎮座とする。白鳳は「日本書紀」に登場するが年号表にない。7世紀「大化の改新」から「奈良遷都」までの50年間の文化をいう。

(2)白鳳はあいまいの代名詞といわれる。史実で解明できなくとも社伝として後世に伝えたい。

② 上総総社の謎

(1)「上総総社」「1国総社」を名乗る。総社は平安時代、数社の祭神を1か所にまとめた神社のこと。14世紀後期の資料に祭祀や建築資金を上総国レベルで集めているが「式内社」ではなく「総社」としての根拠は明確でない。

③ 市原八幡宮と移転伝承

(1)「国分寺付近に鎮守され国守の崇敬もあつかったが、のち現在地に移転」。しかし、時期や前身地などの詳細は不詳、現在地の上限は中世鎌倉時代だが室町中期が有力。

(2)飯香岡を付けた文書はすべて江戸時代以降で、以前は市原八幡宮などになっている。

(3)昭和43年の解体修理にともなう調査で本殿は中世後期・長祿3年(1459)または文明元年(1469)建造と特定されたが、それ以前の遺跡は認められなかった。

(4)地元で石塚、元八幡移転伝承がある。

5) 源頼朝が鎌倉をめざし、足利義満は八幡宮にみこしを寄進(中世前期の八幡)

① 貴族から武士の時代へ

(1)中世は華やかな貴族政治から武家政権へ。戦いの時代を迎えた房総往還は軍用道路として兵士たちを戦場に送る。源頼朝が、足利義明が、北条氏康が、豊臣秀吉が全国統一への軍を進めた。

(2)このころ八幡に飯香岡八幡宮が移転、武の神様として関東の武将たちの崇敬を受ける。八幡の町並みは八幡宮の門前町としてうぶ声を上げる。

(3)八幡は上総広常から鎌倉源氏、北条氏、足利氏領となり、やがて上総武田氏に代わる。



飯香岡八幡宮

→ 旧本殿600年?壁紙



由緒本記



↓ 四反目遺跡



五所小と古代駅路



阿須波神社

② 逆さいちょうと社殿寄進、八幡宮の頼朝伝説

- (1) 治承4年(1180)、伊豆で挙兵した頼朝は石橋山の合戦に敗れわずかの兵と安房に逃がれるが、その1か月後には房総武将たちの援助を得て鎌倉をめざす。
- (2) 当時、上総は千葉常胤(千葉氏)、下総は千葉常胤(千葉氏)が勢力を握る。頼朝は房総往還の八幡を通して(海上ルートなど諸説)常胤の本拠千葉城(市川国府台とも)をめざす。
- (3) 逆さいちょう=頼朝が逆さに植え「もし活着くことがあれば源氏勝利疑いなし」と祈願。八幡宮社殿左側のいちょうをいう。
- (4) 上総広常と千葉常胤は2万の兵を率いて頼朝軍に加わる。勢いを得た頼朝は鎌倉に入り、平家を滅ぼして鎌倉幕府を興す。
- (5) 関係資料=飯香岡八幡宮文書(特記ないかぎり以下も)
治承4年9月、右兵衛佐源頼朝公当社御信仰厚くあらせられ御祈願、早速御冥助神明測り知れず、靈驗によりて御供田として八庄十一郡の内百五十町石御寄付あらせられ候。
建久3年(1193)8月、源頼朝公当社厚く御信仰あらせられ冥助報賽として宮殿嚴重の御造立あらせられ(以下省略)。注意=当時の遺構は確認できていない

③ 重要文化財クラスの足利義満寄進みこしが現存

- (1) 元弘3年(1333)、鎌倉幕府倒幕をはたした足利尊氏が室町幕府を興すが、八幡宮は足利幕府からも手厚い保護を受ける。社伝は3代將軍義満が至徳元年(1384)、みこし4基と2の鳥居(海中)を寄進、8代將軍義政も社殿を建立したとする。
- (2) みこしはほこりまみれで現存。専門家調査は作風、墨書銘から当時の秀作で、うち1基はその後の改修も少なく重要文化財レベルと鑑定。しかし修復に5千万円必要。
- (3) 関係資料=至徳元子年九月、將軍源義満公当社御祈願によりてみこし四社寄進奉り(以下省略)
" みこし墨書=鎌倉法華堂下中小路において新造おわる。時に至徳元年甲子九月六板敷。鎌倉、大工藤原清久書判有り、奉行執行善国右同断、宝曆九己卯年八月十五日修復によりこれを写す。


6) 八幡公方足利義明と千葉宗家の内乱(戦国時代の八幡)

① 村田川の戦いと千葉康胤の胴埋塚(どうまんづか)

- (1) 鎌倉幕府創設の功臣として重用された千葉氏も室町時代になるとかけりが出る。鎌倉府の内紛から一族が2派に別れて争う。康正元年(1455)16代胤直の時、おじの馬加(幕張)康胤が千葉城を攻め滅ぼし、自ら宗家17代を名のる。
- (2) 一族の東常縁が追討の兵を起こす。馬加城を落とし、追走して村田川が最後の決戦場となる。もはやこれまでと康胤ははなばなく討ち死に、最後の地を雁田川とする説もある。
- (3) 首級は村田川の川原にさらされ、胴体を埋めた胴埋塚が八幡北町に、千葉氏ゆかりの八幡無量寺に伝康胤一族の墓がある。

② 関東覇権かけた八幡(小弓)公方の戦い

- (1) 室町幕府は尊氏の長男の家系が將軍を継ぎ、2男の子孫が鎌倉府を勤め、はじめうまくゆくがまもなく冷戦となる。4代氏持が幕府軍と戦って敗れ、その子成氏は古河に逃れて古河公方(將軍)を名乗る。ここに全国に先駆けて関東の戦国時代が始まる。



頼朝



康胤



千葉氏系図



頼朝の鎌倉ルート



当時の原型も伝へる若宮



← 19宮



↓ 足利義満



二宮

上総国市原郡領内十町石上奉
永く有相違者武運長久孫傳
地母城可令祈禱一狀仍此件
安元二丙辛辛七月二十日奉承常胤

- (2) 6代政氏の2男義明は父兄と不仲、永正7年(1510)ころ真理谷武田氏に誘われて八幡宮の別当寺 霊応寺に入り八幡公方を名乗る。武田氏は千葉氏と争い足利家の血を引く義明を利用する。
- (3) 伝八幡御所跡=五所ジョイフル本田の一部。発掘調査を行なったが中世の遺物はなかった。しかし五所は御所とも書き、義明が居館を構えた可能性は捨て切れない。
- (4) 永正14年(1517)、義明は小弓城の原氏を攻め落として移り、小弓公方と改名する。武名は日を追って高まり、里見氏など安房、上総の戦国大名たちがその旗本に加わる。
- (5) このころ兄高基は戦国大名として力をつけた小田原北条氏と結び、千葉氏も北条配下に。北条+古河公方+千葉連合軍と足利義明+安房里見連合軍の対決軸が生まれた。
- (6) 天文7年(1538)、関東の覇権をかけて市川の国府台で激突、小弓義明軍は1万、小田原軍は2万、江戸川を挟んで対陣、多勢を頼む小田原軍が川を押しわたって攻めたてると小弓軍は総崩れとなり、義明も壮絶な討ち死にを遂げた。
- (7) 関係資料=満徳寺御墓堂、教育委員会碑文
御墓堂の五輪塔、本塔は室町時代造立の供養塔です。小弓公方義明夫妻の墓石といわれており市原の中世文化を伝える貴重な文化財です。
- (8) 小田原軍は勝ちに乗じて下総、上総に兵をすすめ、以後八幡は北条氏の支配下に置かれる。

7) 八幡宮天正新市と寺々に残る中世墓碑 (町並みの起こり)

① 八幡宮門前で新市が始まる

(1) 関係史料=北条氏新市免許状

八幡郷守護不入、相定め、新市のこと立たせ候、押し買い、ろうぜき堅く停止(ちょうじ)、ことに近郷において取り候役のこと、前々のごとくそのところにてこれを改めべく近郷にて未進役、八幡郷中において策謀致すこと叶うべからず、郷中商人諸役免許の儀、相違あるべからずものなり。よってくだんのごとし。 天正九辛巳年七月 刑部少輔・谷沢丹後守これを奉る

(2) 当時、織田信長の安土城をはじめ有力な城や寺社は城下や町場集落形成のための誘致策として、税などを優遇する楽市が発達した。新市は八幡の町並み形成に大きな影響を与えたとみられる。

② 八幡の寺の伝承はまちまちだが、室町中期ころに集まったのではないか

- (1) 若宮寺(霊応寺)=真言宗。八幡宮を統括、管理する別当寺。創建不詳、明治維新の時廃寺
満徳寺(無住)と御墓堂=真言宗。若宮寺と交代で八幡宮の別当寺を勤める。創建不詳、満徳寺の中世墓は近年散逸、御墓堂墓地に義明の墓など
- (2) 無量寺=浄土宗。伝白鳳元年創建。伝天文2年(1533)現在地に移転、中世の墓多数
- (3) 称念寺=浄土宗。伝天正3年(1575)創建。中世の墓多数
妙長寺=日蓮宗。伝正長2年(1429)創建。中世の墓なし
円頓寺=日蓮宗。伝文明元年(1469)創建。中世の墓なし
満蔵寺=真言宗。創建不詳。中世の墓少しあり
- (4) 胴埋塚、らん塔婆=中世後期ころからの共同墓地。中世の墓なし
- (5) 多数の中世墓碑は主に室町中期から後期のもの。大型墓の多くは住職、小型は富裕庶民の墓か、八幡集落の起源を考える重要な状況証拠といえる。



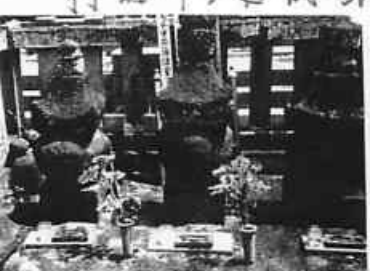
村田川、右戦場跡



義明の墓



国府台、戦い討ち死した足利義明(中)



四本一族の墓



胴埋塚



ジョイフル本田と石大

八幡新市... 相定新市... 建立御墓堂... 現存... 如前... 於八幡中... 前... 天正九辛巳年... 刑部少輔... 奉る

8) 豊臣秀吉の小田原攻略と上総進攻

① 豊臣秀吉の小田原攻略

- (1) 戦国乱世に終止符を打った織田信長を後継した豊臣秀吉は、天正18年(1590)最後まに抵抗する北条氏政、氏直を攻める。秀吉軍20万が包囲、籠城3か月、北条軍は戦意を失って投降。
- (2) 当時八幡は北条氏の勢力下で千葉一族の原氏が治めていた。氏政は決戦のため全軍を小田原に結集したので各地の守りは弱い。「神君(家康)の威光に1日の中に50の城が落ちた」という。
- (3) 下総、上総攻略軍=木村重高、浅野長政を大将に、家康軍の本多忠勝、鳥居元忠、平岩親吉ら2万。4月26日(徳川軍は5月)小田原出陣、江戸、佐倉、土気、疋南を下し、岩槻へ転戦、上総は残留部隊が進攻したとみられるが明確でない。『房総軍記』は「世の人これをいろは城といふとかや、実に手習いの初心に同じくして、さしたる勇力もなく、敵の大軍に恐れただ一命の助からんことのみ思い、親を捨て子を忘れわれ先にと落ち散る有り様あさましともいわん方なし」とする。
- (4) 「そのほか小城などかれこれ6、70、あるいは捨て逃げ、あるいは明け渡し、命ばかり詫びをいう」(榊原康政書状)など評価は散々。しかし、全軍を小田原籠城にとられ、城には老人と女こども、しかも城主と連絡も途切れて抵抗のしようがなかった?このとき椎津城と池和田城も落城した。

② 八幡宮の豊臣秀吉制札(軍おきて)

- (1) 関係資料=禁制 八幡郷、そうじゃ、きくま、やまき、村上、ごい、府中、ごしょ
一、軍勢甲乙人等乱暴、ろうぜきのこと 一、放火のこと
一、地下人(じげにん) 百姓に対し非分の儀申しかくること

右の条々堅く停止せしむ。もし違反の輩においてはたちまち厳科に処さるべきものなり。
天正十八年五月日 (豊臣秀吉朱印)

- (2) 制札は小田原から持参、5月3日に100枚追加、秀吉禁制、掟書、木村浅野禁制、添書の4種、同文の禁制書が長南長福寿寺、松戸万徳寺、野田市立図書館など、長福寿寺高札は県文化財指定に。

9) 徳川家康の江戸打ち入りと「太閤検地」

① 家康の江戸入府当時の八幡

- (1) 天正18年(1590)、秀吉の小田原攻略戦功行賞で家康に関東8か国250万石が与えられる。
- (2) 関係資料=八幡宮が提出した八幡村絵図(参照)。八幡宮中心に若干の村落、港はまだない。天正十八年庚寅年三月、東照神君当社御信仰厚くあらせられ、御用所青山藤蔵殿厳命をこうむり、当社由緒、神領除地等委細御尋ねあらせられ、これにより先規ありきたりのとおりに書き上げならびに略絵図相添え差し上げ奉り候(以下省略) 上総国市原郡八幡郷 八幡宮社僧 円蔵坊
天正十八寅年三月、御用掛青山藤蔵様(家康重臣) 同宮神主 誉田斉宮
- (3) 関係資料=八幡宮へ家康の所領寄進判物(はんもつ)
寄進、八幡宮、上総国市原郡八幡郷内、百五十石のこと
右、先規のごとくこれを寄付せしむ。この旨を守り、いよいよ武運長久の精誠にぬきんで、ことにもっばら祭祀すべきの状、くだんのごとし。
天正十九年辛卯十一月日、大納言源朝臣御墨(花押)
- (4) 家康は八幡宮にも。慶長はじめ積蔵院快元和尚→八幡滞在中の高野山西門院あて返書=



上総国市原郡八幡郷
禁制
一、軍勢甲乙人等乱暴、ろうぜきのこと
一、放火のこと
一、地下人(じげにん) 百姓に対し非分の儀申しかくること
天正十八年五月日



八幡宮禁制と判札
寄進
上総国市原郡八幡郷
百五十石
右、先規のごとくこれを寄付せしむ。この旨を守り、いよいよ武運長久の精誠にぬきんで、ことにもっばら祭祀すべきの状、くだんのごとし。
天正十九年辛卯十一月日、大納言源朝臣御墨(花押)

しからは内府（家康）様御着馬について、郷城御通りあるべく候条、その時分御立ち寄り一宿成られべく候。いかよう御通りのみぎりは御立ち寄り御詞（和歌）致すべく候。（以下省略）

(5)側近本多正純（後出）が文禄の役出陣の家康の武運長久と戦勝を祈願して大太刀を寄進
関係資料＝大納言源家康、武運長久、とくには今度唐入り早速凱陣、丹誠の旨趣よってくだんのごとし。上総国市原郡八幡宮へ寄進奉るものなり。天正二十年壬辰八月十八日、使者本多弥八郎正純

② 八幡の近世は「太閤検地」と「刀狩り」にはじまる

(1)天正19年（1591）、文禄3年（1594）市原でも「太閤検地」を実施。天正10年から17年がかり、同じ基準で全国的に。一地一作人「検地帳」に登録、租税と労役の義務化。中世の複雑な土地領有関係を整理、貫高制→石高制へ、近世知行制度を確立する。

(2)参考資料、新日本史料集（大野郡志）＝太閤検地

- 一、六尺三寸のさおをもって五間六十間、三百歩一段（反）と相定むこと。
- 一、田畑ならびに在所の上中下、よくよく見届け斗代（年貢高）相定むこと。
- 一、京升をもって年貢納所致すべし、売買あわせて同升たるべきこと。

(3)谷田村、日竹村、勝間村などに「太閤検地帳」が現存、八幡村の検地帳はすべてない。

関係資料＝市史文禄3年「上総国石高村々覚え帳」。八幡村1,404石、五所村457石

(4)農民から武器を没収、検地を助け一揆を封じる。「兵農分離」で身分を統制、百姓の子は百姓。

③ 天正18年、榊原康政を総奉行、伊奈忠次、青山忠成に命じて家臣団の所領配分。

(1)歴戦の有力武将を境目沿いに、小知行は江戸近くに、徳川氏の蔵入り地を江戸周辺に集中させた。

(2)上総は安房里見に備え譜代重臣を配備、本多忠勝＝大多喜10万石、土屋忠直＝久留里3万石、内藤政長＝佐貫2万石

0) 家康入府当時の八幡の所領配置

① 永井直勝（天正18年～元和3年）＝右近太夫。家康譜代の武将。当時5千石。のち老中古河7万石。

(1)関係資料＝文禄三甲午年、永井右近太夫殿当社御信仰あらせられ、これにより御造営料として御蔵米二百俵御寄進あらせられ（調査修復時に文禄3年の棟札が発見された）

② 本多正信（天正、文禄？～元和2年）＝佐渡守。家康最側近、戦時は軍謀、平時は国政に活躍。通称神奈川甘縄藩だが、本来は八幡藩、当時1万のち2万石。

(1)関係資料、寛政譜＝ある書に上総八幡五千石を領すとありてその余を記さず、またある書には下総佐倉といい、官庫の記録には相模国甘縄と記す、いずれか詳ならず。

(2)市史（潤井戸山本家文書）＝潤井戸村領主変遷。文禄年中から慶長まで本田（多）佐渡守領

③ 本多正純（天正18年？～元和ころ）＝弥八郎、上野介。正信嫡男。幼少から仕え側近の筆頭。大坂冬の陣後の総堀埋め立てを指揮。当時の石高未詳、のち宇都宮15万石、権力闘争に敗れて改易。

(1)関係資料＝八幡宮境内総検地書き上げのこと（慶長18年、本文省略）、本多上野介御役人中

(2)関係資料＝八幡宮境内の内、地頭方へ御蔵造立につき、蔵屋敷に貸地の分検地、竪九十間、横十九間、本多佐渡守、本多上野介、永井信濃守、三給地頭方へ貸地なり。慶長十九年甲寅年五月右三給地頭方御蔵地造立につき御蔵米運送新規みお掘割地所当社海面御除地の内、別紙証文とおりの貸地いたし、冥加金として一両ずつ年々上納致すものなり（以下省略） 以上



平成18年度

八幡史学館

—— 江戸時代の八幡 ——



講師 山岸 弘明氏

日時：②平成18年10月17日（火）

（午前9時30分～11時30分）

場所：視聴覚室

市原市立八幡公民館

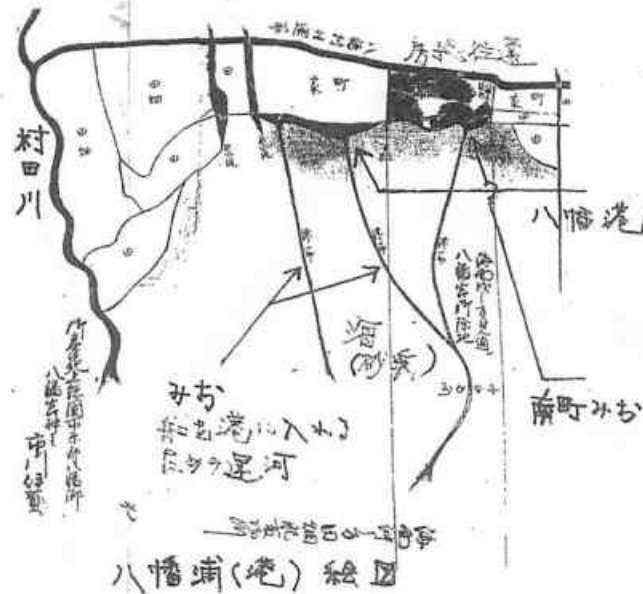
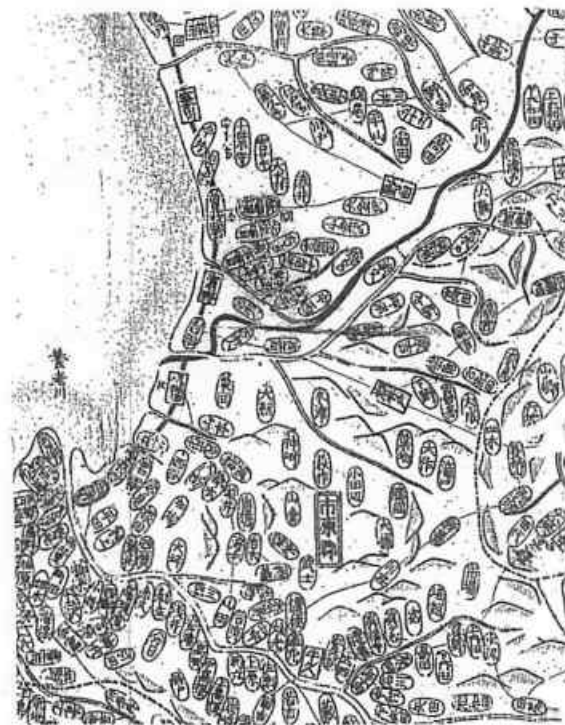
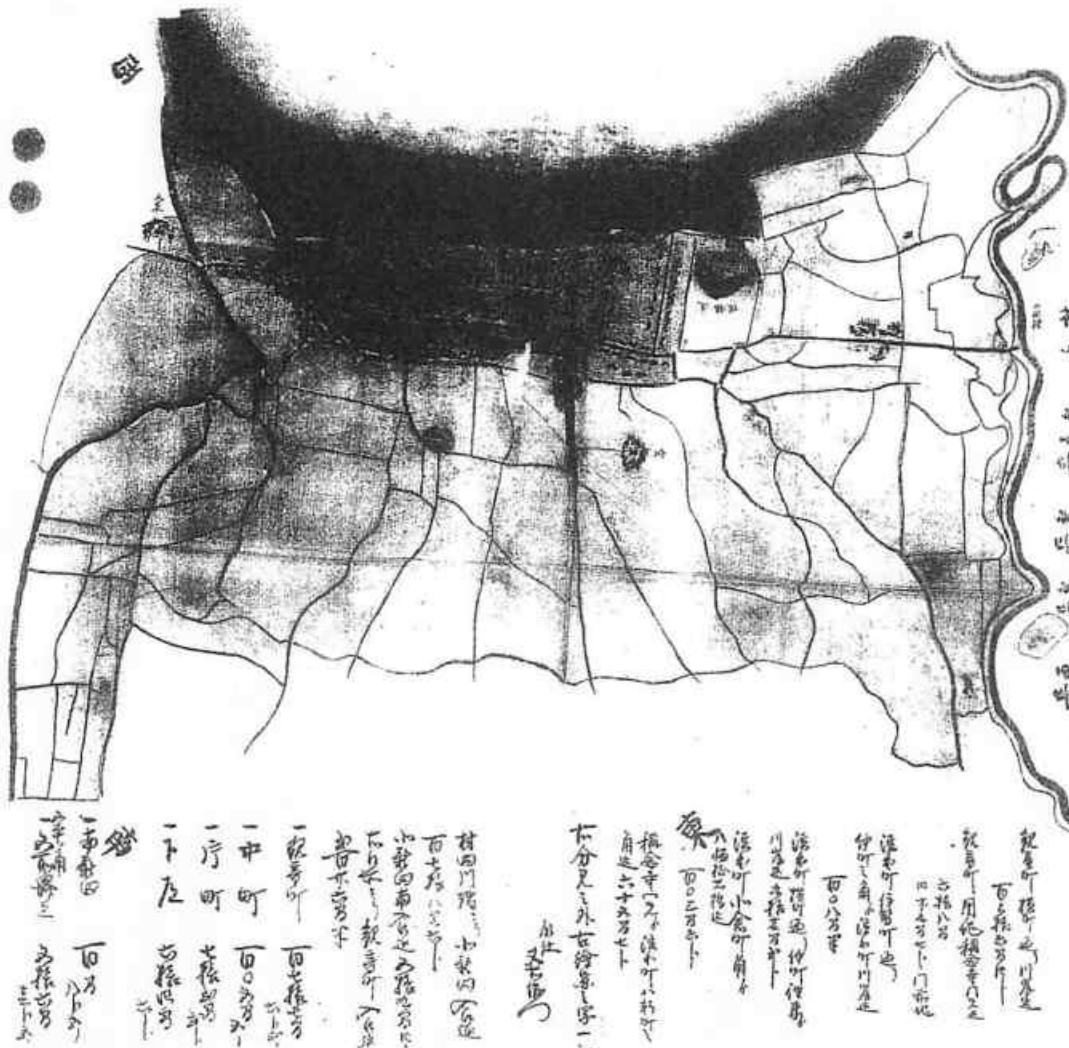
八幡公民館「八幡史学（楽）館」

第2回 八幡の歴史②江戸時代の八幡

平成18-10-17

山岸弘明

八幡宿の江戸時代は海と陸の交通要衝として発展した宿場¹した。市原の内陸部や外房海岸から運ばれてくる年貢米の中継基地²。八幡海岸から「五大力船」と呼ばれた中型帆船が海路9里（およそ36km）、年貢米を江戸へ津出ししました。かつて浜本（はもと）地区は五大力船の船問屋の拠点で年貢米を納める蔵が立ち並びました。南北に走る旧「房総往還」は参勤交代路で、休泊のための本陣や問屋場が置かれ、久留里黒田藩など7大名が供揃いを整えて通行しました。幕府の街道保護政策で八幡から海路による直接の江戸入りが認められなかった一般の旅人たちも徒歩で江戸をめざしました。「八幡史学（楽）館」の第2回「江戸時代の八幡」をご紹介します。



江戸末期、八幡村地図

八幡公民館「八幡史学（楽）館」 第2回 八幡の歴史②江戸時代の八幡

1) 「八幡史学（楽）館」へようこそ

- ① 趣旨＝八幡の歴史を楽しみながら学ぶ
- ② 第1回（9月12日）＝八幡の歴史①神話から江戸開府まで
第3回（11月14日＊16時ころまで）＝飯香岡八幡宮探検隊（現地見学＝八幡宮大研究）

2) 謎多い2つの八幡藩とその城地

① 八幡堀藩1万石（陣屋大名）

(1)越後椎谷堀家＝豊臣秀吉の重臣で北の庄→春日山45万石をえた堀秀政、秀治の支族。藩祖直之は長岡8万石直政の5男で大坂の役軍功で江戸町奉行9,500石、次の直景が1万石に。はじめ夷隅郡の刈谷を居所としたが3代直良が寛文8年（1668）に八幡に移し、元禄11年（1698）まで2代30年にわたって八幡藩を名乗った。子孫は椎谷1万石で明治維新におよんだが八幡の城地は確認できていない。

(2)2人が参勤交代帰国挨拶のため将軍に謁見、直良が八幡で亡くなったなどの記録も。

*寛政譜＝直良＊寛文8年8月10日封を継ぎ、9月5日はじめて領地に行くのいとまをたまう。12月27日従五位下飛騨守に叙任し、これより先上総夷隅郡刈谷の居所を同郡（誤り）の八幡に移す。

*寛政譜＝直宥（さだ）＊元禄4年4月26日遺領を継ぎ、8月28日はじめて領地に行くのいとまをたまう。11年3月11日封地を改め、越後国沼垂、蒲原、三島3郡の内に移され沼垂郡椎谷を居所とする。

(3)解説＝「はじめて領地に行くのいとま」は参勤大名初国入りの決まり言葉。祖父、父は江戸詰めで、直良の時定府を解かれたのだろうか。刈谷は交通不便？。最初の国入りで居所を八幡に移している。以後4度の大坂加番を除いて6か月交代で江戸と八幡を行き来したことは確実といえる。

② 八幡大久保忠高藩1万石（名目藩＝定府大名）

(1)烏山大久保藩＝小田原大久保藩分家の分家。忠高は5代将軍綱吉の側近、加増を重ねて貞享3年7,000+りん米3,000石＝1万石の大名。八幡藩は貞享3年（1686）～元禄10年までの11年間。その子常春が烏山3万石に進み、子孫が明治維新におよんだ。

(2)寛政譜＝居所と参勤なし。諸侯年表＝居所なし。恩栄禄＝八幡。武鑑＝元禄4年甲州の内、8年八幡

(3)忠高は参勤交代しない定府大名。実態のない名目藩で定府側近にしばしばみられる。藩地に殿様の居館はないが郡奉行管理の地方陣屋や蔵屋敷が置かれた可能性はある。

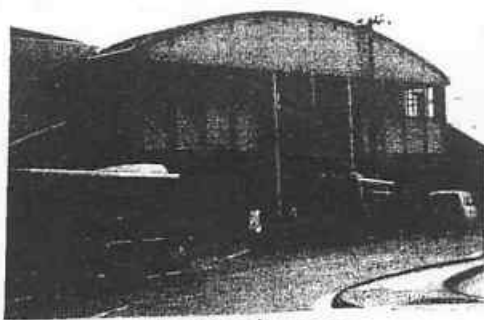
③ 飯香岡八幡宮由緒本記＝現在の拝殿建立に寄進

元禄4年＝八幡宮幣殿、拝殿立て直し新造立これあるによりて、堀飛騨守殿、大久保伊豆守殿御両家御信仰あらせられ、よりて御造営料として御蔵米御寄進あらせられる

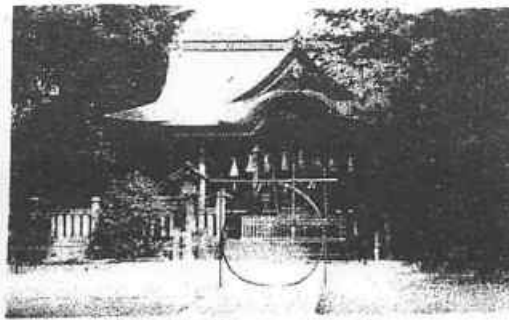
3) 「じんや」鈴木家と南町みお蔵屋敷

① 屋号「じんや」鈴木家が「陣屋絵図」を保管

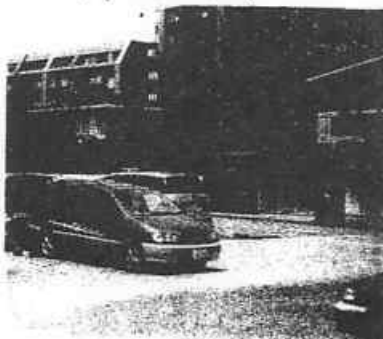
(1)八幡駅北200mの鈴木家は代々屋号「じんや」を名乗る。家伝は「殿様から陣屋地を譲っていただいた」ことから。証拠の「陣屋絵図」を保管している。



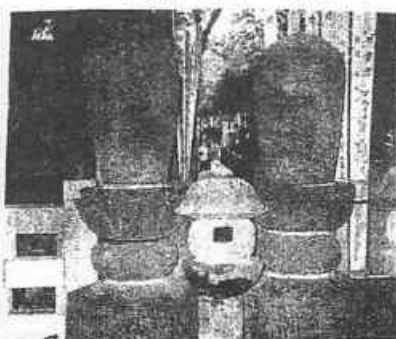
八幡宿駅



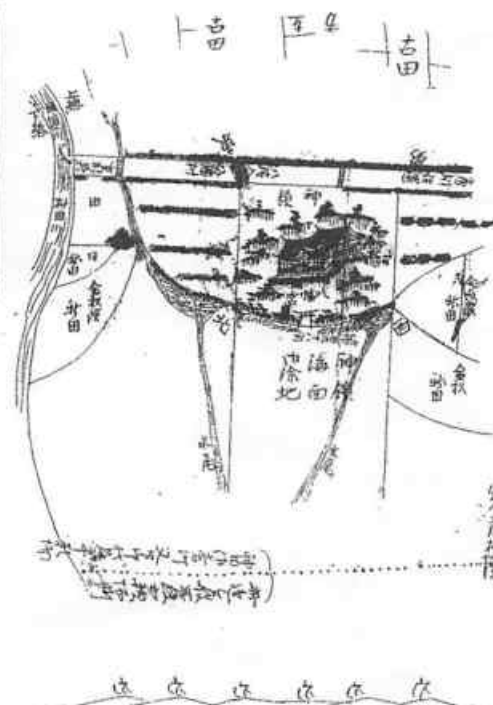
飯香岡八幡宮



じんや 鈴木家



堀道良(左)×道齊の墓



→ 陣屋絵図

- (2)「御陣屋敷絵図写し、文化6年改め、名主太右衛門預かり」(鈴木家文書)
この反別2反2畝10歩、この永223文3分1厘、右は開発仰せ付けられ、書面のとおり文化12亥年御高請け仰せ付けられ、永上納年々開発人太右衛門より上納致し所持致すべきものなり。
200年前、鈴木家の先祖太右衛門が領主(記名がない)から陣屋跡地を拝領したことを記す。
- (3)県「埋蔵文化財分布地図」は大久保、堀家陣屋地、市は陣屋地、「市原郡誌」は大久保陣屋とする。
- (4)じんや家(イコール)八幡堀藩陣屋か? 候補の1つだが問題点も多い。
第1に大名陣屋地としては狭すぎる。堀や土塁が実戦向きでない、溝、竹山の呼び名などから、幕府代官、旗本の出先陣屋、蔵屋敷も考えられ、今後の研究課題といえる。

② 本多正信と永井尚政が作った南町みおと蔵屋敷

- (1)飯香岡八幡宮文書(特記ないかぎり以下も)
*慶長19年5月=八幡宮境内の内、地頭方へ御蔵造立につき、蔵屋敷に貸地の分、間地豎90間、横19間、本多佐渡守(正信)、本多上野介(正純)、永井信濃守(尚政)、三給地頭方へ貸地なり。
右三給地頭方御蔵造立につき御蔵米運送新規みお掘割地所当社表海御除地の内、別紙証文とおり貸地致し冥加金として1両ずつ年々上納致すものなり。
*寛永17年、寛文元年=堀三左衛門(直良、直宥)、永井豊前守、永井式部少輔、酒井兵部少輔
*文政2年=蔵地屋敷といい、旧来諸侯に貸地したが中古引き払いになり近來は民家2軒、社用に使う。
- (2)港はのちの南町みおで現理容専門学校と引き込み道、昭和30年代までのり取り船使用。蔵屋敷は八幡支所、幼稚園、八幡公民館一帯、南北に長い長方形でおよそ6,000㎡あった。

4) 八幡領主の変遷と村高

- ① 幕府直轄天領と八幡宮領、7人の旗本領に分割領有される
(1)八幡領主の変遷を別表にまとめた(市史などを参考にした)
(2)家康関東入府当時は本多父子、永井の譜代直参、中期は堀、大久保の譜代小藩、後期は分割され、中堅旗本の9給で明治維新におよんだ。

② 村高の変遷

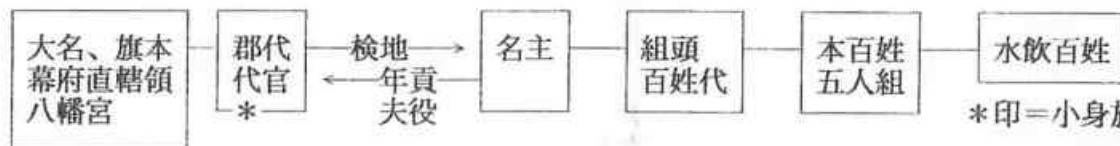
- (1)文禄3年=1404石、天保5年1403石、慶応4年1403石
江戸時代を通じて変わっていない。新田開発のない村
- (2)寛政5年南総郡郷考(深山家文書、船橋西図書館文書ほか) 同じ写しでも違う
八幡村=御料所内方鉄五郎、岩本内膳正、佐野九右衛門、水野石見守、松平兵庫頭、村上三十郎、永井重左衛門、河野善十郎 高1235石677=376軒(1255石677=376軒)
八幡村=御料森覚蔵、岩本石見守、水野石見守、松平兵庫、村上三十郎、河野善十郎、佐野九右衛門、永井重左衛門 高2055石677=379軒

(3) 嘉永2年

御朱印八幡宮領	高150石	岩本大隅守様	高204石852
岩田鍛三郎様御支配所	高108石5396	村上八十郎様	高178石552
河野対馬守様	高95石9414	佐野長十郎様	高226石913
松本十郎兵衛様	高166石5685	永井鉄弥様	高182石824
水野石見守様	高89石2765	合計	村高1403石4670

③ 村の組織

(1)所領ごとに独立した自治体。領主が任命した村役人の名主を通じて支配。



- (2)五人組=生活の助け合い、年貢、防犯の連帯責任。一人のなまけ者も出せないしくみ。
- (3)名主同志の連携=年番で村共通の作業や宿場継ぎ立てを行なう。
- (4)八幡村組合=八幡(寄場、組合総代)、五所、菊間、市原、大馬屋、郡本、上古市場、藤井、山田橋、総社、根田、加茂、能満、山木、小田部村

5) 厳しい年貢取り立てに泣いた領民たち

① 村のしくみと年貢取り立て

- (1)年貢は「村請制」で共同責任、名主が完納までのすべての責任を負った。
検地帳の田畑のランクで示された石盛(公定収穫高)の4公6民(4割)が年貢、ほかに屋敷や野原や海の利用税、村や宿場経費、殿様の任官や冠婚葬祭、家屋敷の補修経費などが割り当てられた。
- (2)市内には多くの「割り付け(年貢通知書)」や「皆済証文(領収書)」が残っているが八幡はない。
- (3)「百姓は生かさぬように、殺さぬように」「百姓となたね油は絞れば絞るだけ出る」家康と幕府高官のことばだとされる。庶民は厳しい年貢取り立てに泣いた。
- (4)百姓から年貢を取り立てるためにはそれぞれが最低限の田畑を所有することが必要、幕府は「田畑永代売買禁止令」「分地制限令」を作るが実効がない。
- (5)年貢を払えない百姓は田畑を質に入れ、返せないと小作人になった。小作人は一人前の百姓として認められず、食事にも困って水ばかりの雑炊やひえ、あわを食べたので「水飲み百姓」と呼ばれた。

② 土間むしろで生活、唯一の楽しみは信仰を通じた寄り合い

- (1)名主や船持ちを除く一般の百姓家はよくて一部が板の間、水のみ百姓は土間にむしろを敷いた程度の粗末なものが多かった。
- (2)新聞もテレビもない。旅行やばくちもだめ。春秋の八幡様大祭や出羽三山講、富士講、庚申講、子安講など信仰を通じた寄り合いが唯一の楽しみであった。
- (3)しかし気候温暖、加えて人柄も温厚。天災、飢饉(ききん)、大事件もなく平和が続いたといえる。

6) 宿場町、継ぎ立て寄場として発達

① 継ぎ立て寄場として発展

- (1)江戸後期、房総往還交通の要衝に位置した八幡は継ぎ立て宿場町として賑わった。宿場の中心となる本陣は参勤交代の休泊旅館で、問屋場(といやば=伝馬所)は公私の荷役業務を担当した。
- (2)問屋場では予め継ぎ立てに定められた人馬(25人25匹?)を用意、大名行列などの公務のほか、産物や生活用品、旅行者の荷物などの荷役業務を独占的に取り継いだ。
- (3)八幡宿の問屋場は駅入り口とみられるが解明できていない。宿役人は名主が月番交代した。
- (4)宿場経費は八幡村と近郷の定助郷村、菊間、大厩、市原、上古市場、五所村が負担した。
- (5)物資の輸送を実際に従事した人たちは八幡村と助郷村の農民たちで毎朝交代で問屋場に詰めた。公務人馬の割り振りの後、江戸からの船荷物や継ぎ立て荷物を運送、現金収入とした。

② 八幡宿を通った大名家は7藩、半年交代で1日50kmの強行軍

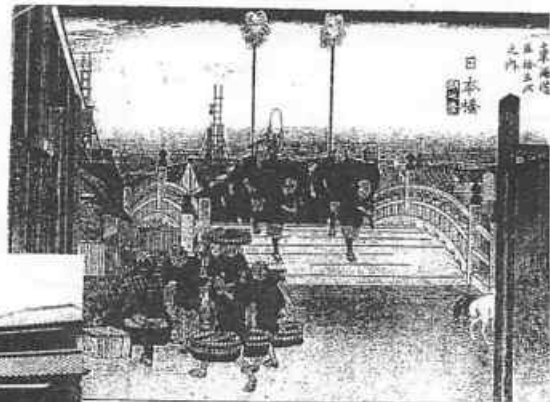
- (1)八幡宿を通った大名家は館山稲葉1万石、勝山酒井1万2,000石、佐貫阿部1万6,000石、飯野保科2万石、久留里黒田3万石、鶴牧水野1万5,000石と一時期五井に陣屋を構えた有馬1万石の7藩、2月(後期は12月出府)、8月の2交代で江戸に向かった。
大多喜松平藩は伊南房州往還を潤井戸、浜野経由した。飯野、一宮藩は定府で参勤交代はなかった。
- (2)大名行列は軍役の行軍を行列に移行したもので、供揃いの最大は加賀前田藩の2,500人、八幡を通った大名家は1万石クラスが多く150人程度。行列の半分は荷物の輸送部隊であった。



宿通り(旧道)



宮本陣跡↓



大名行列

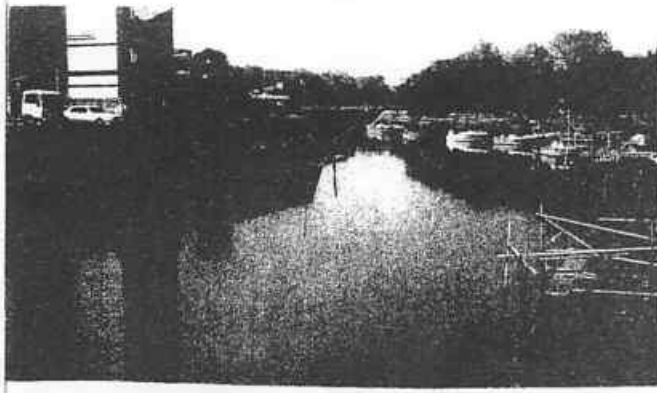
- (4)久留里黒田藩の参勤(上り)宿割り帳(久留里藩政一斑=延享2年)
本陣付き54人、下宿付き(氏名など省略)、総人数締め185人、内上(士族か)38人、下147人
- (5)江戸への参勤は浜野、曾我野、千葉寒川、検見川、幕張、船橋と進み、成田佐倉街道を市川小岩の渡し、水戸街道を利用して千住、日光街道を江戸日本橋めざした。市原からは1泊2日、幕府の街道保護政策で、海路や近道は認められなかった。
- (6)例外(または幕末)として両国、平井経由した久留里藩=当初、上記正式ルートであったが千住と姉ヶ崎で継ぎ立てトラブルがあり、以降武蔵逆井(平井)、今富通りに変わった。
- (8)大名行列は「下に下に」の制止、奴さんが毛槍を振るわせる華麗な絵物語を思い浮かべるが現実には厳しい。日の出前に宿を出て1日40~50kmを行軍した。
- (9)八幡本陣ははじめ名主4家が兼帯、幕末期は旧道の市原出途バス停留所近くの宮吉東屋は确实、1軒かどうかは未詳。房総各藩は千住、船橋、木更津などに宿泊、八幡は休憩、継ぎ立てだけか。

7) 年貢津出し港として発達、五大力船が江戸へ向かう

- ① 大名、旗本領年貢米津出し港でにぎわう
 - (1)八幡は近郷や外房方面の村々から送られてくる年貢米の津出し港として発達、江戸へ向かう五大力船で賑わった。五大力船は100石積み程度の中型帆船で、江戸へおよそ3時間で着いたが物資専用で乗客は乗れなかった。江戸へ米や薪を運び、帰りは衣料や雑貨、酒などを持ち帰った。
 - (2)寛政6年(1794)八幡宮絵馬・五大力船勢揃い図
奉納、海上安全、江戸角屋十兵衛せがれ冬木源左衛門寄進。作者不明。八幡宮の大祭で13隻が祝う船名=観音丸2、弁天丸、山王丸、高砂丸、稲荷丸、飛鳥丸、山善など
 - (3)旧浜本町街区の倉町、八軒町周辺には江戸時代から昭和戦前にかけて船持ちの蔵が立ち並んだ。地元の人たちの中には現在も昔の船名の屋号で呼びあっている家も多い。
 - (4)元禄11年(1698)米原村差し出し(明細)帳=市原市史
船路の儀、当村より上総国八幡陸路8里、八幡より海上9里
 - (5)寛政4年(1792)御年貢(船宿)引き受け証文のこと=神崎区有文書
鈴木松之助様知行所兩村御年貢米このたび私方へ船宿仰せ付けられ(中略)
寛政4年子8月日 八幡村、船宿、太右衛門印(上総八幡鈴木)
神崎村御名主甚左衛門殿、久々津村御名主太郎左衛門殿、右兩村御組頭衆中
 - (6)年号不明、年貢米送り状=茂原市史
当西の御年貢10俵、内2俵もち米津出し仕り候、右は江戸麴町四丁目谷、曲淵源太郎様御屋敷まで(中略) 西8月29日 上総国中原村、名主、四郎右衛門
高師村伝兵衛殿(荷宿)、八幡村小兵衛殿(船宿)
 - (7)船の輸送運賃はおおむね3~5%であった。

8) 江戸時代の八幡絵図と人口

- ① 八幡宮が所蔵する各種の八幡村絵図をみくらべる
 - (1)天正18年図と江戸後期図を比較=人口増加にともなう村落の拡大と都市化、浜本を中心とした街区の碁盤目整備、道路の直線化と周辺村々への交通路整備など
 - (2)往還と村落、みお、八幡浦(港)、村田川渡船場
- ② 職業分布=身分は百姓、専業農家は6割、4割は兼業商店
 - (1)天保9年(1838)農間商い渡世取り調べの儀につき八幡村ほか14か村組合書き上げ帳



八幡港跡



飯倉園八幡宮の
五大力船し絵馬



渡船場跡



村田川

八幡の歴史
 八幡の歴史は、江戸時代を通じて、米の運搬と船宿の業として栄えた。特に、寛政6年(1794)の八幡宮大祭の際には、観音丸2隻をはじめ、弁天丸、山王丸、高砂丸、稲荷丸、飛鳥丸、山善丸など、五大力船の勢揃いがあった。これは、八幡が江戸への年貢米の津出し港として発達したことを示している。また、天保9年(1838)の農間商い渡世取り調べの儀につき八幡村ほか14か村組合書き上げ帳には、八幡の職業分布が詳しく記されている。専業農家は6割、4割は兼業商店であったことが確認できる。

水野忠邦「天保の改革」の奢侈禁止のための実態調査

- (2)村高1,403石、家数339、人口1,564人、内専業農家211、兼業（農間商い）職人渡世128人。
- (3)居酒屋＝借地百姓次兵衛（文化6年創業）ほか 穀商売＝名主佐右衛門（安永4年）ほか
 髪結＝借地百姓忠蔵（文政10年）ほか 小間物＝百姓市兵衛（文化8年）ほか
 湯屋＝借地百姓新平（安永4年）ほか 太物＝組頭久兵衛（天明4年）ほか
 旅籠＝借地百姓権八（文化2年）ほか 業種＝組頭孫八（宝暦10年）ほか
 ほかに煮売、金物、古着、薪炭、米つき、菓子、蒲焼、下駄、す商いなど

③ 八幡宮領宗門御改め帳＝寺が戸籍を管理

- (1)弘化4年（1847）八幡宮領「宗門御改め帳」
 寺が戸籍を管理、禁教のキリスト教徒でないことを証明。
 11家族で平均5人強、領高は150石で平均14石、他領とくらべ恵まれた境遇といえた。
- (2)百姓卯之助の戸籍（ほかは省略）
 真言宗満徳寺（寺印）旦那百姓卯之助未29才印 同寺（寺印）旦那 同 きよ未12才
 同寺（寺印）旦那 女房 いち未38才 同寺（寺印）旦那 せがれ伊三郎6才
 同寺（寺印）旦那 娘 くま未16才 人数合わせ5人、内男2人、女3人
- (3)真言宗、京都醍醐三宝院末寺、上総国市原郡八幡村 満徳寺（寺印）（円頓寺、無量寺）
 右のとおり宗門人別残らず相改め申し候ところ、不審なる者または疑わしき宗門の者ござなく候、
 （中略）後日のため証文差し上げ申すところ、よってくだんのごとし。
 弘化4末年3月 社領両行事 杉本刑部、宮古雅楽（印）
 岩本大隅守様御役所

9) 明治戊辰の戦いから廃藩置県へ（明治維新の八幡）

- ① 明治元年（1868）徳川幕府が倒れ明治新政府が樹立
 - (1)江戸後期、ペリー来航、桜田門外の変以後の幕府は急激に力を失っていく。慶応4年15代将軍徳川慶喜率いる幕府軍が鳥羽、伏見の戦いで新政府軍に敗れて江戸が開城されると、不満の旧幕臣「上総義軍府」が挙兵、新政府軍は市川、船橋戦争でこれを破って房総往還を南下する。
 - (2)4月7日八幡五井戦争＝八幡に集結した新政府軍は南新田（八幡海岸入り口周辺）から3手に分かれて五井に進軍、養老川出津渡船場を背にした50人の決死隊を壊滅させ、さらに敗走する本隊を追って姉ヶ崎、真里谷へと転戦して行った。
- ② 菊間藩領をへて廃藩置県、近代国家がはじまる
 - (1)明治元年旧将軍徳川宗家は養子16代家達をもって静岡80万石に転封、八幡の幕府直轄領と旗本領は没収され、新たに転封した菊間6万石水野忠敬領となる。菊間の丘地に城作りが急ピッチで進められたが完成することなく明治4年廃藩置県を迎えた。
 - (2)明治元年神仏分離令。八幡宮別当寺の靈応寺は行き過ぎた「廃仏毀釈」の嵐の中に取り壊された。
 - (3)明治4年菊間県、木更津県、6年千葉県に編入、八幡村は維新後、八幡宿、八幡町をへて昭和38年に市原市になった。

10) 八幡はかつて市原の中心地で「豊かな歴史の町」

- ①(1)八幡の歴史は日本の中近世史そのもの、かつて市原郡の中心地として発展した「豊かな歴史の町」
- (2)八幡には八幡宮や寺院、八幡港、旧道に沿って史跡や石造物、旧家の蔵などの文化財が多い。
- (3)今回は通史、来年継続の場合は個別テーマで。
- ② 次回（最終回＝11月14日）は飯香岡八幡宮探検隊。現地をご案内します。



天正18 寛永3 10 元禄11 宝永4 慶応4 明治元 明治4年

古河永井領	八幡堀領	幕領	旗本佐野領 226石	柴山支配	菊間水野領	庵藩領
旗本永井式部領			旗本村上領 178石			
天和2			旗本河野領 95石			
			旗本水野領 89石			
旗本永井豊前守領 182石						

天正18? 元和2 寛永10? ? 貞享1 元禄10 延享3 寛延2年

八幡本多領	旗本酒井領	八幡大久保領	幕領	前橋酒井領
旗本本多領	元和2			

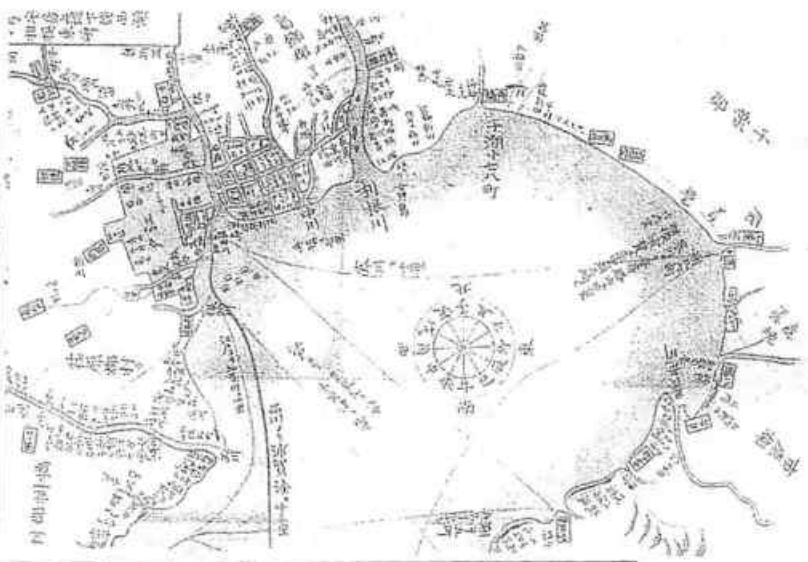
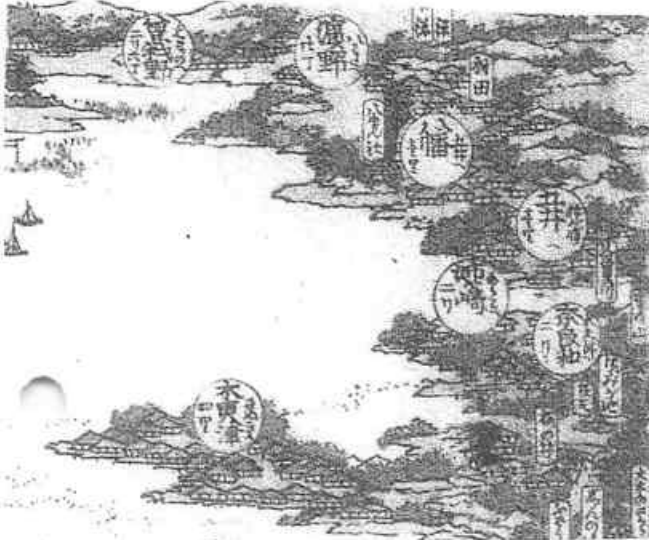
明和7	文化8	天保3	5	12	慶応4年
川越松平領	幕領	佐貫阿部領	幕領	貝淵林領	幕府直轄領 108石
天明7 旗本岩本領 205石					
旗本松本領 166石					

天正以前

八幡宮領 150石

八幡町領の支遣

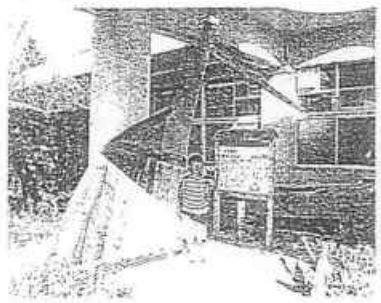
村高推移=文禄3年1, 404石、天保5年1, 403石、慶応4年1, 403石



「才一武家流」
(八幡宮領の支遣)

歴史で見るいちほら③7

こがいりせん 五大力船と八幡町並み



五井小学校に併られている五大力船の館

江戸時代、徳川幕府は防
 衛上の理由から大型の造船
 を禁止しました。
 このため年貢米や薪炭、
 野菜や鮮魚など、江戸市中
 の台所を賄う物資を、五大
 力船などの小廻し船で運ぶ
 ようになりました。
 五大力船は、百石から三
 百石程度の帆船です。重い
 荷物を載せるので、五大力
 菩薩の名前にちなんで、こ
 の名称になったといわれて
 います。船幅が細く、吃水
 も浅いことから順風であれば、
 江戸までの十三海里
 (約二十四時間)を二時間
 程で快走しました。最大の
 特徴は川をさかのぼれたこ
 とで、日本橋かいわいの河
 岸まで荷物を積み替えずに
 運ぶことができた。
 江戸湾独特の船で、その
 数は千葉郡の茶川の湊に次
 いで、市原部の五井や八幡
 の湊が多く、昭和三十年代
 まで活躍していました。
 埋め立てですっかり姿を
 消してしまいましたが八幡
 の浜本町には今でも土蔵が
 連ち並び、「御蔵町」「伊
 勢町」「漁師場」といった
 通りの名が残されています。
 また、船主だった旧家には
 「太神丸」の屋号が伝わり
 飯沼八幡宮に奉納された
 絵馬「五大力船勢揃い」に
 も太神丸が描かれるなど、
 町のそこそこには往時の姿を
 しのぶことができます。
 問合せ先「ふるさと文化課」
 電話(23)988533

八幡町並みは江戸時代から
(八幡宮領の支遣)

↑「五大力船」

平成 18 年度・第 3 回

八幡史学館



講師 山岸弘明氏

日程とコース：平成 18 年 11 月 14 日（火）

- 9:15 八幡公民館 第1会議室へ集合
- 9:30 飯香岡八幡宮 昇殿参拝→宝蔵庫見学
- 10:30 八幡宿駅（トイレ）→ロータリー（八幡宮別当寺）→満徳寺→高札場跡→山祇神社→行屋→飯香岡橋（八幡港 海水浴場跡）→八幡公民館
- 12:00 昼食 第1会議室 12:50 まで
- 13:00 飯香岡八幡宮正面（道路ぎわ）に集合→放生池→八幡宮外観見学
- 13:30 拓本研修（石造物研究会）
- 14:00 境内（夫婦いちょう 逆さいちょう 道標 立野信之文学碑 三山塚 富士塚）
市川本店→本陣跡→南町みお→蔵屋敷跡
- 15:30 八幡公民館前 解散

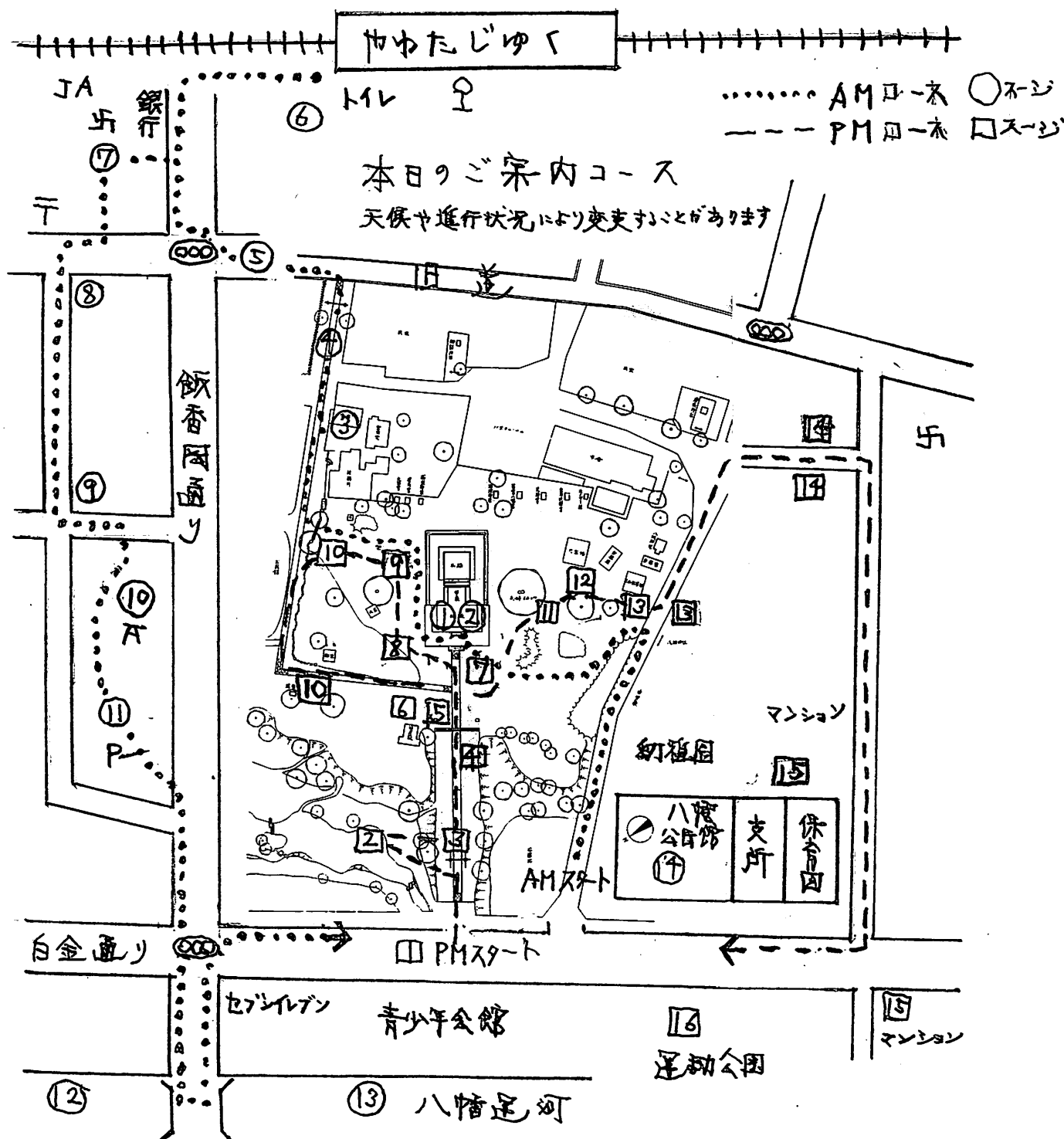
市原市立八幡公民館

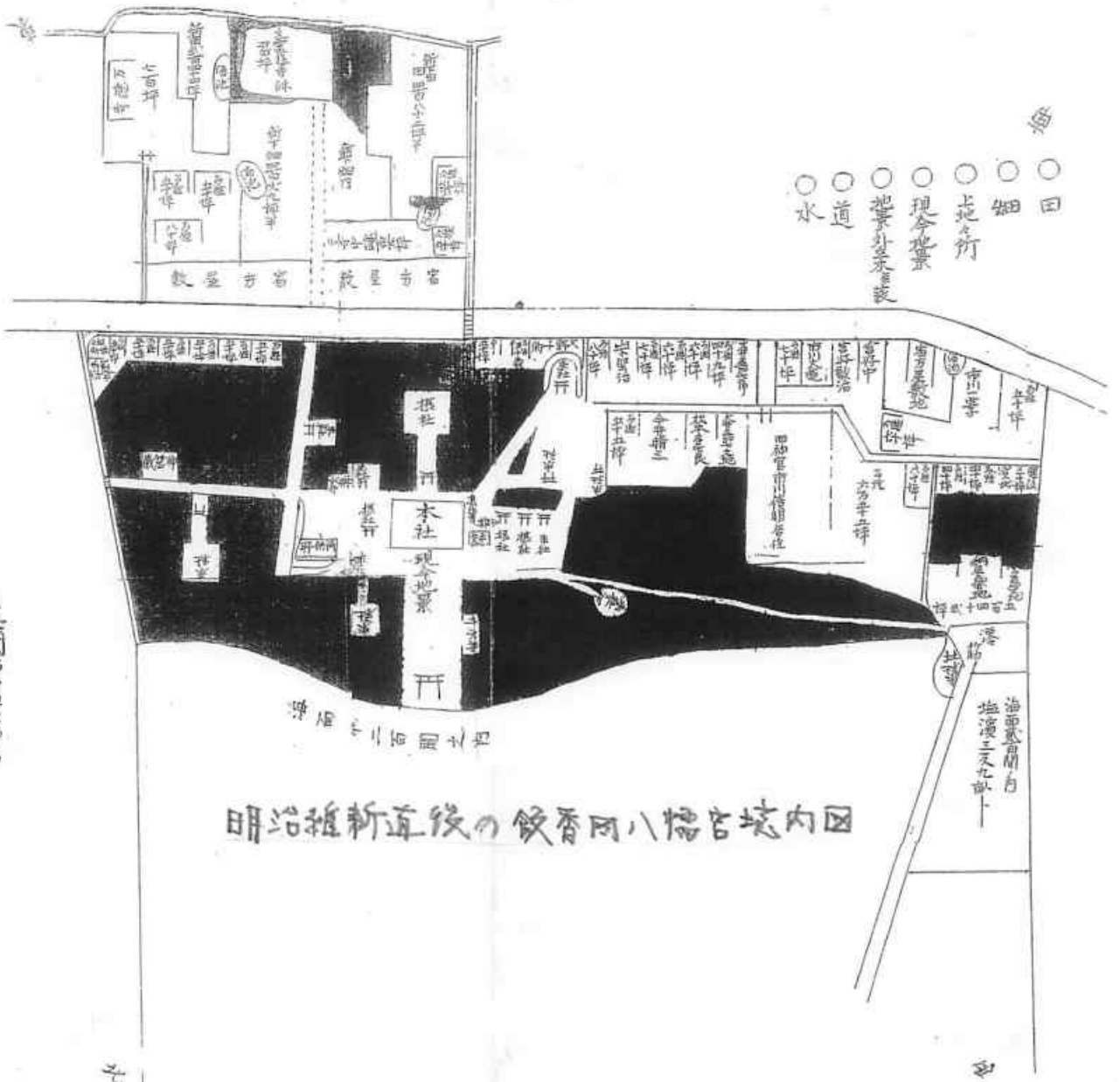
八幡公民館「八幡史学(楽)館」

第3回 飯香岡八幡宮探検隊

平成18-11-14

山岸弘明

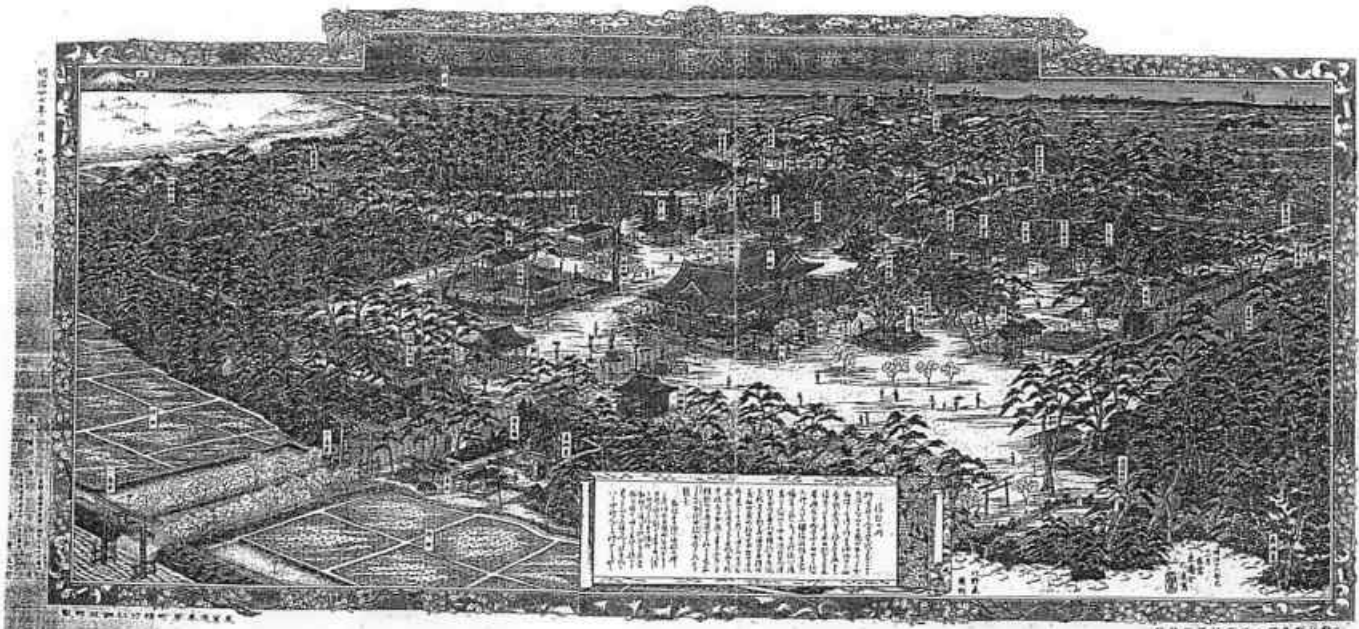




明治維新直後の飯倉岡八幡宮境内図

藤繪圖寫
 上巻國家新編
 八幡大神上知
 現今地景内外
 壬申九月
 明治六年酉年二月十一日記述
 藤岡千道及

明治中期の飯倉岡八幡宮



第3回 飯香岡八幡宮探検隊

-) はじめに飯香岡八幡宮ありき
- ① 八幡の語源は八幡宮から。飯香岡八幡宮の門前町として発達した。
- ② 社伝は「この地は始め御影山と称し六所御影神社が鎮座し、白鳳4年一國総社の八幡宮が勧請された」とする。国府近くで創建、鎌倉から室町中期ころ現在地に移転したとみられる。
- ③ 祭神は誉田別尊（ほんだわけのみこと＝応仁天皇）、息長帯姫命（おきながたらしひめのみこと＝神功皇后）、玉依姫命（たまよりひめのみこと＝神武天皇の母）ほか。
八幡信仰は弓矢の神、八幡神を祭神に6世紀後半から。皇室、武家、庶民の信仰で全国に4万社にも
- 2) まずは飯香岡八幡宮昇殿参拝からスタート
 - ① 第1回、第2回「八幡の歴史」に引き続き、八幡の原点ともいえる飯香岡八幡宮を探訪する。
 - ② 9時30分昇殿（特別）参拝から。昇殿は許されて社殿に上ること。一同拝殿に着座、御祓い、玉串奉てん。御祓いは祈願や災厄を除くための神事、榊に紙をつけた玉ぐしを神前に供える。かつて武道の神さま、現在は健康、家内安全、交通安全などに靈驗新たか。
 - ③ しばらく社殿内部を拝観
本殿＝神霊を奉安する社殿。正面内陣が神様のお住まい。
幣殿＝幣はくを奉てんする社殿。神を祭る神官（祭主）の居所。
拝殿＝礼拝のための前殿
 - ④ 御鏡、へい束、玉ぐし、神酒を入れるへいし、山海の物を供えるみけ、錦旗、御神燈、ほこ、たて
 - ⑤ こまいぬ＝神域守護、魔よけ。あうん1対、獅子に似た架空の動物。江戸中期貞享3年、市内最古、寄せ木造り、わずかに金彩色が残る。
- (1) 貞享三丙寅季五月吉日、上総国市原郷田中佐助拝、寄進、願主勢州安濃郡八幡町川口助兵衛（墨書）
- ⑥ 飯香岡八幡宮額（明治＝勝海舟）、鬼界が島の源為朝絵馬（文化7年＝雪山堤等林）
- ⑦ 宮柱太く丸い、しとみ戸、突き上げ窓。古い形式の造り
- 3) 足利義満のみこし、徳川家康の大太刀 —— 魅力いっぱいの宝蔵庫
普段非公開の宝蔵庫を特別拝観。毎年3月15日に一般公開される。
 - ① 伝足利義満寄進みこし（千葉県指定文化財）
室町幕府3代将軍寄進4基のうちの1の宮、ほかの3基はみこし庫に保管されている。
皇室ゆかりの菊と桐紋。宝形造り屋根の照り起（むく）りなど室町前期の建築、工芸様式を示す。墨書、由緒本記などとも一致、専門家は修理の少ない若宮を重要文化財クラスと鑑定。
 - (1) 鎌倉法華堂下中小路において新造畢（おわる）、時に至徳元年甲子九月六板敷、鎌倉大工藤原清久書判有り、奉行執行善国右同断、宝暦九己卯八月十五日修復によりこれを写す（1の宮床下板墨書）
 - (2) みこし四社、征夷大将軍源朝臣義満、上総州八幡宮寄進奉るものなり、よってくだんのごとし。奉行上杉中務少輔禪助これを奉る。至徳元甲子九月日（1の宮天井墨書、後世の書き写し）
 - ② 徳川家康武運長久祈願大太刀（市原市指定文化財）
家康江戸入り当初の八幡領主で家康小姓の本多正純が家康の朝鮮出陣（実際は名護屋まで）、武運長久、戦勝祈願のため寄進。全長163、刃長130、反り3.5cm、平井和泉守作。正純はのち2代将軍秀忠の老中、宇都宮15万石にすすむが無断石垣修復のかどで改易。
 - (1) 大納言源家康、武運長久、とくには今度唐入り早速凱陣、丹精の旨趣よってくだんのごとし。上総国市原郡八幡宮へ寄進奉るものなり。天正二十年壬辰八月十八日、使者本多弥八郎正純（銘文）



飯香岡八幡宮と宝蔵庫



本社

文政二年三月二十日

徳神				運神
	八幡宮	上総州	八幡宮	運神
			西郷	之閣
				拾五疊
席	後	方	家	社
				社殿同拾五疊

山

江戸後期の神楽板屏風

③ 伝足利義明寄進経びつ、義明の家門繁栄祈願、奥書のある大般若経
足利鎌倉府直系6代、古河公方政氏の2男義明は真理谷武田氏に請われ、はじめ別当寺靈応寺に入り八幡御所、のちに小弓御所を名乗る。天文7年市川国府台で小田原北条氏に敗死。

④ 当世具足（市原市指定文化財）

鎌倉以降のよろいを当世具足という。本来は胴丸、袖、かぶとの三物がセット。戦国時代から江戸初期の11領を保管、いずれも千葉、北条、徳川など東国武士寄進とみられるが氏名は伝わらない。

⑤ 柳楯（柳楯神事は千葉県指定無形文化財）

⑥ 大絵馬（30cm以上の絵馬を大絵馬という）

はじめ馬は神の乗り物として献上、8世紀ころ生馬に変わって土や木、石で作った馬形に、室町後期ころ絵馬へ転化した。およそ30点を保管、江戸後期、上総国内で活躍した堤派の作品が多い。

(1) 五大力船勢ぞろい図（寛政6年=作者不明）観音丸、弁天丸、山王丸、高砂丸ほか奉納、海上安全、上総国八幡村五大力船江戸問屋、角屋十兵衛せがれ冬木源左衛門

(2) 牛若丸と弁慶（文化元年=秋月門人堤秋泉）、瀬田の唐橋（天保2年=堤栄川）、しころ引き（享和2年=堤等舟）、曾我物語草すり引き、源頼朝富士牧狩り、近江八景瀬田の唐橋

⑦ ゆかりの直木賞作家・立野信之コーナー=先代神主収集品のかずかずを展示

4) 江戸後期の石橋跡もひっそり —— 往還側鳥居周辺の石造物

① 日露戦争凱旋記念石燈籠（明治41年）、日露戦争戦利品陳列所跡（戦時中まで）
飯香岡八幡宮碑（昭和16年=海軍大将書）

② 往還側大鳥居（昭和43年）、旧木造鳥居根巻（昭和15年）、参道敷石（大正4年）

③ 水濠石橋=橋幅3.3m、長さ1.7m、橋台は埋没

(1) 神田龍岡町元地上総屋清七、石寄進同清兵衛、嘉永三庚戌年八月吉日、□町石工安藤佐平治（碑文）

上総、安房6藩の大名行列も通った房総往還、宿場通り

① 船橋から館山まで、いまの内房線に沿った旧脇往還

(1) 江戸後期、館山、勝山、佐貫、久留里、鶴牧、五井諸大名の参勤交代路
八幡からは「房総往還」を浜野、曾我野、千葉寒川、幕張、船橋

「佐倉成田街道」市川小岩の渡し、葛飾新宿、「水戸街道」千住を経由して江戸へおよそ70キロ。

② 大名行列の荷物を次宿へ継ぎ立てる問屋場（伝馬所）

(1) 大名行列などの荷物は宿駅ごとに継ぎ立てられた。引き継ぎ地を問屋場または伝馬所という。
房総往還では宿場ごとに馬25頭？、人夫25人？が義務づけられた。

(2) 八幡村の受け持ちは上りは村田川の渡しを含む浜野（蘇我？）、下りは五井まで。経費は八幡村のほか菊間、大厩、市原、上古市場、五所村の近隣5か村の定助郷で賄われた。問屋場は旧往還の八幡宮前と考えられるが確定資料はない。

6) 八幡宿駅は八幡宮別当寺跡、明治維新の廃仏毀釈で廃寺に

① 八幡宿駅=明治45年（大正元年）国鉄木更津線として開業、当初は単線、蒸気機関車が煙をたなびかせた。一時「市原駅」改名案もあったが実現しなかった。

(1) 木更津線、北条線、房総西線をへて内房線。この間複線、電化、快速が走り、京葉線が乗り入れた。

(2) 平成10年改修、近代的な階上駅に生まれ変わる。新駅舎は市の木「いちよう」をイメージ。

② 江戸時代は八幡宮別当寺、若宮寺（別称=靈応寺）跡

別当寺（宮寺、神宮寺）=神仏混こう時代、神社を管理、統括する寺院

若宮寺は飯香岡八幡宮と若宮八幡宮の別当寺を勤めた。本来、宮寺と神社は同じ土俵で、協力し合う



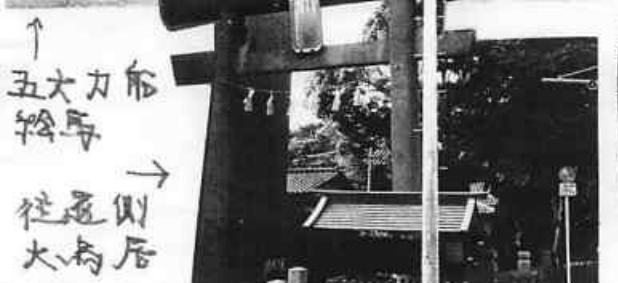
参勤交代

宿場通り

八幡宿駅開業
明治45年3月28日



昔の八幡宿駅↑と現在の八幡宿駅



べきだが利害が相反、対立することも多かった。明治維新の時、社僧の病気や後継トラブルが起こり行きすぎた「神仏分離令」のなか暴力的に破壊された。

- (1)八幡村若宮寺、本寺三宝院、寺領87石、この内69石門徒支配（寛永10年＝関東真言宗新義本末寺帳）
- (2)市原郡八幡村若宮寺、本寺醍醐三宝院、御朱印18石社領配分

右の若宮寺末寺、市原郡菊間村福寿院

右の若宮寺門徒、市原郡八幡村長寿院、御朱印6石6斗（端数略）領配分、宝珠院2石7斗、菊間村徳性院2石2斗、東漸院4石社領配分

右の若宮寺、満徳寺両寺支配寺、市原郡八幡村円寿院14石2斗、広徳院8石5斗、東覚院7石2斗、神王院11石3斗、宝蔵院6石4斗、安養院10石2斗、菊間村戒誓院（寛政7年＝寺院本末帳）

- ③ 明治7年、円頓寺、称念寺をへた八幡小学校が若宮寺跡地に移転、また、八幡町役場も置かれた。八幡小学校は昭和30年代、駅前ロータリー再開発のため駅裏の現在地に移転した。

7) 魅力いっぱいの石仏と不動明王像 —— 満徳寺

- ① 満徳寺は江戸時代に若宮寺とともに八幡宮別当寺を勤めたが、檀家の支持で維新後も継続、現在は無住。八幡公方足利義明ゆかり、御墓堂墓地に伝夫妻の墓、境内無縁塔に石仏群など。

- (1)八幡村満徳寺、本寺三宝院、末寺、八幡村東学院、光徳院、安養院、親王院、円寿院、法蔵院、円通院、法福院（寛永10年＝関東真言宗新義本末寺帳）

- ② 不動明王像、一石六地蔵は八幡の宗教史もの語る貴重な石造物。

- (1)無縁塔（廃墓塚）＝地藏菩薩、如意輪観音、大日如来などを刻む。大半は地藏菩薩、不遇にも早世したわが子への思いが現れている。墓碑の古くは寛永、元禄……、中世の五輪塔は残念にも散逸。

- (2)一石六地蔵（延享3年）＝延命地蔵ほか。6体のぼん字と持ち物が異なる。死後の六道で衆生を救う。造立奉る供養六地藏尊像、願主御墓堂浄観、自他法界平等普利、導師阿闍梨法印広運

- 浜本観音講中、同志念仏講中、浜本善男、同所若衆、南新田善男女、片町南善男、観音講中ほか
- (3)不動明王像＝舟型高さ164cm。古く、大きさ、形もすばらしい。義明供養は誤伝か。

法印宥清上人御菩提のためなり、寛文六丙午年七月二十二日、敬白

8) 往還沿いに豊臣秀吉禁制高札、水濠、土塁の一部も現存

- ① 江戸時代は八幡宿第1ホテルから無量寺手前までが八幡宮境内、観音町側は水濠、土塁を回した。当初の高札御禁制は天正18年の豊臣秀吉軍おきてであろう。江戸時代を通じたどうかは不明。

- (1)この図のごとく、天正二十年辰二月御境内構え堀（堀、土塁、虎口）、横口2間、土上げ場1間、こより御禁制高札場構え堀外の内へ立て置くものなり（天正20年＝八幡宮天正絵図）

9) 観音町参道と文化5年の石橋跡

- ① 観音町参道＝江戸時代は鳥居（現在は石柱）、石橋（後出残欠）。

釘抜町、倉町を遠望、釘抜きは参道釘抜き門または五大力船修理の釘抜きに由来か。倉町は五大力船船持ちの蔵が立ち並んだことによる。一時は「八幡銀座」とも。

10) 山祇神社（石尊神社）と子安（地藏）堂

- ① 山祇は大山祇と同義、祭神はいざなぎ、いざなみのみことの子大山祇命（おおやまつみのみこと）で山林の神様、石尊参りも大山参りの別称で大山阿夫利神社の勧請であろうか。

鍵のかかった扉の中に「石尊大権現」の扁額と木造の男太刀、女太刀が奉られ、戦前までは3月15日の祭礼はお囃子やおどりで賑わったという。

- ② 子安は安産を祈願する婦人たちの講、現在でも街区ごとに子安講が続いている。



山祇神社と子安堂



無縁塔



六地藏



江戸時代の満徳寺



観音町石橋跡



高札場跡



不動明王

1 1) いまも毎年100人近くが出羽三山にお参り —— 三山信仰の行屋

- ① 湯殿山、羽黒山、月山、出羽三山を信仰する八日講の修行場。古くからの人たちは一生に一度出羽三山に参拝しないと葬式も出せないという。
- ② 当初満徳寺におかれ昭和34年現在地に。玄関上部の飾り箱に「つつが虫(大松明)」を飾る。出羽三山松例祭で使用される験くらべ引き綱。無病息災、商売繁昌、五穀豊穡に靈験あらたかという。
- ③ 内部は大日如来を祀る祭壇とぶっ通しの2間。昔は護摩(ごま)を焚いた。毎月8日に集会「三山拝詞」を唱え、夏に100人近くが三山登拝に向かう。

1 2) 五大力船の本拠=八幡浦、浜本(はもと) 海岸跡を遠望

- ① コンクリート岸壁は満潮時の海岸線で八幡浦(港)跡、明治以降は町側にみおを築き直した。船は人工的の3本のみお筋を利用して出入りした。
- ② 毎年夏にみお筋を掘り直すみお浚いを実施。経費は船主が負担した。
- ③ 江戸時代、八幡から江戸まで海路28km、およそ3時間、しかし旅客は認められなかった。

1 3) かつて神領、戦前戦後期は海水浴と潮干狩りで賑わった八幡海水浴場だった

- ① 岸壁から先はかつて海。遠浅の砂浜で、江戸時代は幅200間、干潮時かい立て地までが神領であった。
 - (1)みこし御行汐ごり場=同海面除地、当社前海面幅二百間(およそ400m)、戌の方沖見通しかい立て除地。おのおの一間六尺五寸間なり(天正4年=御伝記)
 - (2)戌亥の方にあたる、海岸中央より江戸築地あたりおよそ海上七里、汐いっぱい満ち時、三十間目(55m)深さ一尺二寸(40cm)、五町目一尺五寸、十町目二尺七寸、二十町目六尺、三十町目七尺、四十町目七尺三寸、五十町目一丈七尺三寸(嘉永2年=御除地海面深さ絵図)
- ② 戦前、戦後期は海水浴場で納涼台(海の家)が続いた。広い砂浜は電車やバスで訪れた海水浴や潮干狩りす立て客で賑わった。
- ③ 昭和38年、県の沿岸埋め立て計画に沿って漁業権を放棄、八幡海岸の埋め立てがはじまる。またたくまに海は陸地に変わって誘致工場が進出した。橋からおよそ3kmに工業団地。富士電機、昭和電工、古河電工、大日本インキ、不二サッシ、ライオンなどの工場プラントが続く。先端は企業の専用岸壁で一般市民が立ち入ることはできない。

1 4) 文化の殿堂八幡公民館で昼食

- ① 1階の会議室、好天なら運動公園、八幡宮で適宜。近くの食堂、自宅も可。集合時間厳守。
- ② 八幡公民館は昭和23年、やや北東の寄りに全国に先がけて創館、社会科?教科書にも載った。現在地は八幡中学校跡。町長兼初代館長菅野儀作氏を中心に町民総出で校庭(運動公園)を拡張。
 - (1)許されよ神木切るのも国のため 菅野儀作(昭和24年=句板)
- ③ 四季草花図、浜辺にて(山口達)、鳳凰、しゃも(作者不詳)
平和を愛好する町の人よ、真理と自由を尊び自治建設を理想と仰ぎ協力の町八幡の建設(浅見喜舟)



出羽三山行屋

↓ 八幡浜本港跡

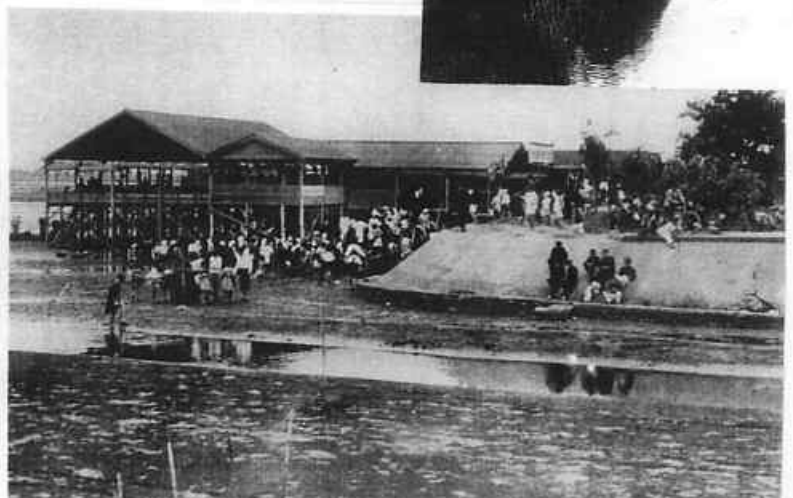


↑ 海面深さ絵図

八幡海水浴跡 ↓ と 北 北



初代公民館



午後のスタート

- 1) 午後は正面参道から。かつて松林が続き海中に2の鳥居(1の鳥居とした資料も)があった。
 - ① 改めて正面参道から。参道前を白金通りが走りぬける。むかしは松林が海岸に続き、500mほど先の海中に2の鳥居があった。社伝は足利義満、足利義明、千葉富胤寄進とする。
 - (1)嘉慶元丁卯年九月、大將軍源朝臣義満公、当社御祈願によりて御神輿御行汐ごり場、海面へ二の鳥居新たに御造立御寄付(以下省略)(御伝記)
 - (2) 上総総社碑=平安、貴族の時代、国司の参拝の便宜のため1国の祭神を1か所に勧請した神社をいう。飯香岡八幡宮が上総総社であったかどうかは明確でない。
 - ② 八幡宮最大の神事だった放生会、やぶさめも行われた
 - ① 放生とは作善のため捕らえられた生物を山野や池に放つことをいう。
 - ② 奈良時代の養老年間、「隼人の乱」犠牲者慰霊のため宇佐八幡宮で放生が行われた。その後8月15日の中秋名月の日に各地の八幡宮でも行われ、八幡宮最大の神事になった。
 - ③ 江戸時代の放生池は参道右側、現在でも旧暦8月15日に鯉などを放生している。
 - ④ 清見の滝、滝句碑、江戸後期の石燈籠2基、江戸本所三ツ目、□□屋善治郎
 - ⑤ やぶさめ道跡=やぶさめは平安から鎌倉時代に盛んになった武芸で、馬上から弓矢を射かける。飯香岡八幡宮でも明治維新まで神事に奉納された。
 - (1)八月十六日、(中略)やぶさめ行事終わりにて同未刻より十二座御神楽修行(江戸後期=年中神祭行事)
- 3) みごとな上り龍と下り龍きざむ1の鳥居(2の鳥居とした文書も)
 - ① 安定感あふれる壮麗な構え、権現鳥居または両部鳥居という。
 - ② 創建から。代を重ね昭和45年再建、神額と礎石は江戸後期からのものを利用。
 - (1)(上り龍、下り龍、玉眼)八幡宮(裏面不明)(鳥居神額)
 - (2)石、願主、南町丸屋伊兵衛、世話人、観音町虎市、喜兵衛、浜本町万右衛門、卯之助、仲町増兵衛、新次郎ほか、天保十二辛丑年秋七月朔日(礎石)
 - (3)周辺にみこし、参道敷石、鳥居再建記念碑が並ぶ
- 4) 江戸中期の石灯籠と明治、大正期のこまいぬ
 - ① 4代将軍家綱、5代綱吉時代の六角型春日灯籠が参道両側に。
 - (1)寄進奉る、八幡宮御宝前、石灯籠、生国は和州宇智郡(現奈良県五条市)杉井甚七郎内徳兵衛現世安穩として後生善処なり、承応四乙未暦二月吉日(碑文)
 - (2)寄進奉る、石灯籠一基、元禄四年辛未九月二十五日、杉井三左衛門常政(碑文)
 - ② 神前型置石灯籠(明治39年=日露戦役凱旋記念)
 - ③ こまいぬ(大正6年=のり業者、八幡五所漁業組合寄進)
- 5) 県下屈指の逸品手水鉢、水盤舎に棟札も覗く
 - ① 市内最古、県内屈指の逸品。寄進者は名主、組頭、氏子総代など有力者。教科書で江戸時代庶民に名字なしと教えられたが公式に名乗れなかっただけ、神社や寺の碑文や古文書が姓名を記す。
 - (1)(丸に龍)御宝前、上総国市原郡八幡住各十三人、梅田猪兵衛、和田彦兵衛、田中五郎七ほか寛文二千寅暦九月吉日(碑文)
 - (2)再建奉る、講浄攸舎諸災皆除護所、天下泰平、三元三行、御武運長久、加持慶応寅二年八月、両行事山下左近正源庸吉、神主市川伊賀亮信明、同市川大和正藤常忠、総社家中



正面参道



1の鳥居へん額



手水鉢

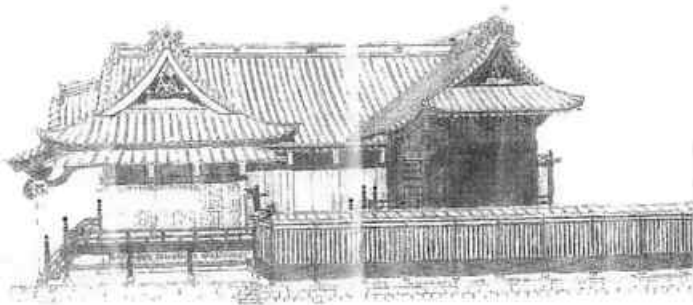


放生池



大正時代とみらたる祭礼—みこしが上の鳥居めざす

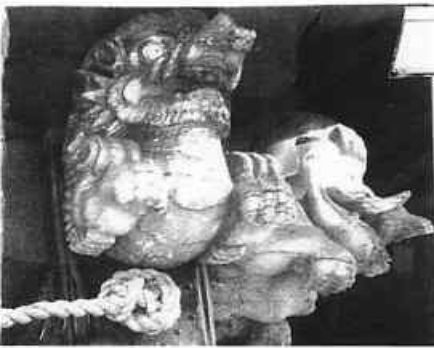
- 6) 十二座神楽も奉納、鐘楼は神仏混こうの名ごりだった
 - ① 神楽殿=かつて十二座神楽を奉納。各町宝蔵庫に面や衣装が残るが神楽は伝承されていない。
 - ② 鐘楼跡=江戸時代は神仏混こう、鐘楼や経蔵がおかれたが明治維新時の「神仏分離令」で撤去された。
 - (1)龍頭下たて長さ三尺八寸、胴の丸さ七尺九寸、龍頭の長さ一尺七分、(中略)洪鐘銘、琴ひつ鼓鐘けだし楽器のたぐい、堅壊不同そのゆえなんぞや(以下省略)(明暦元年=由緒本記)
 - ③ みこし庫=新旧15基ほどを保管、足利義満寄進みこしも。
- 7) 壮麗な権現造り社殿、改めて拝殿と本殿を見上げる
 - ① 権現造り=拝殿、幣殿、本殿からなる。
 - ② 拝殿(元禄4年=県指定文化財)=屋根入母屋造り、銅板葺き、千鳥破風、正面5間1戸、側面3間、向拝3間、軒唐破風。総丹塗(朱)、け魚=三花、蛙また=菊と桐紋章、木はな=獅子と象、えび虹梁=花の彫刻は極彩色。本殿にくらべて華麗。
 - 幣殿(元禄4年=指定なし)=昭和42年の解体修理時に屋根を改変
 - 本殿(室町中期長禄3年または文明元年=国指定重要文化財)=屋根入母屋造り、銅板葺き、正面3間、側面2間、総丹塗、太い木組みや組物、彫刻は力強く簡素で室町中期の特色をよく表している。
 - (1)長禄三己卯年三月、当社幣殿、拝殿新造立発願につき、征夷大將軍朝臣義政公御代、太田左衛門佐殿へ右新造仕りたき旨願ひ奉るところ(中略)御造立金千両御寄付下し置かれ頂戴、神前へ供え奉り、早速御本殿御修復を加え、幣殿、拝殿、向殿ならびに神前段敷石そのほかみず垣などまで美をつくし新造立奉るものなり(由緒本記)
 - (2)再造奉る一字、災い消除の攸、文禄三甲午年三月吉日、神主、代官、総社家中(棟札)
 - (3)文明元己丑年八月、小弓御所足利右兵衛佐源義明公御祈願によりて当社御屋根古来ひわだ葺きのところ新たに銅板屋根に葺き替えそのほか御造宮、御寄進あらせられ、真里谷原式部如鑑奉行をつかさどる(由緒本記)
 - (4)元禄四辛未年、八幡宮幣殿、拝殿建て直し新造立これありによりて、堀飛驒守殿、大久保伊豆守殿御両家御信仰あらせらる由にて御造宮料として御蔵米御寄進あらせられ(以下省略)(御伝記)
- 8) 拓本教室(八幡の石造物研究会=板倉 満先生、鷺津寛子さん)
 - ① 拓本(湿拓)=石碑や器物に刻まれた文字や文様を紙に写し取ること。湿拓は画せん紙か綿紙を被写物の上に乗せ、これに水を刷いて密着させ、半ば乾いてから墨汁をしめたタンポでたたく。
 - ② 石造物を傷めたり汚りたりしないよう正しい知識とマナーを覚えよう。
 - (1)お神楽のひょうしに昇る初日かな 長四郎、一徳
安政2年(1855)=お神楽は新年を告げる太鼓をいう。初春の慶びがあふれる。
- 9) もし活着すれば源氏勝利疑いなし——頼朝伝説の逆さいちょう
 - ① 逆さいちょう=治承4年、源氏再興の兵を起こした頼朝は安房から下総をめざして八幡宮に立ち寄る。いちょう樹を逆さに植え、平氏追討を祈願したとされる。
- 10) 道標、庚申塔、道祖神など——周辺の史跡
 - ① 観音町石橋(前出) 残欠が江戸後期の八幡の人たちの屋号や名字を記録している。
 - (1)寄付、観音町、一金二両松田喜右衛門、一同寺島庄五郎、一同一両一分倉持庄兵衛、一同一両植草権右衛門、一同川上平十郎、一同桜井清治郎(中略)、裏面最後=文化五年戊辰六月(石橋残欠碑文)
 - ② 道標兼庚申塔=道標は追分道(交通要衝)などに置かれた道しるべ、庚申信仰(塔)は60日に1回めぐる庚申の日、集まって読経したり、寝ないで夜をあかす風習。市原出道の三叉路にあった。
 - (1)青面金剛尊、(日輪、月輪、飛雲、猿、にわとり)
右側=左かさもりへの道、右たかくらへのみち、願主喜兵衛、治兵衛、源七、甚助、森右衛門
左側=安永二己十月吉日、左江戸の道、喜八、長兵衛、郷左門、又左門(角柱碑文)



江戸時代の八幡宮絵図

↓道祖神 拓本

逆さいちょう



←木は様

←神楽殿

- ③ 道祖神＝道路の悪霊を防いで旅人の安全を守る神様。三山参拝のお礼にわらじを奉納する人も多い。
(1)道祖神、享和三亥十二月吉日、願主、善了(石祠碑文)
- ④ 昔、八幡に住んだ学者先生の記念碑や句碑、詩碑がならぶ
(1)此君(しくん)林文暁翁伝碑、翁姓は岸本、名は信成、字祐助、文暁はその号なり。竹を愛して此君林と称し(中略)人その恭謙方正の徳に服し、風流温籍なるをよろこびて門に入り業を受ける者三百余人の多きにおよべり(以下省略)(安政2年＝石記念碑碑文)
(2)天名地鎮庵宗匠俳句碑＝息災で 古希の美空やはつ鴉(からす)(昭和6年＝句碑碑文)
(3)知雪翁俳句の碑＝名月や あさなき鳥もおきている(明治40年＝句碑碑文)
(4)漁業組合記念碑＝明治三十五年十二月、宮吉長五郎氏ほか九名の発起により八幡五所浦漁業組合が設立され(以下省略)(昭和35年＝記念碑碑文)
- ⑤八幡の礎を築いた川上南洞と菅野儀作の像
(1)南洞先生の銅像は昭和十一年十一月南総中等学校々友会ならびに有志の発起により同校々庭に建設されたのであるが、大東亜戦争中に供出されたのである。(中略)南総中学校の発祥地でもある飯香岡八幡宮の境内に移転したのである。(昭和11年、30年＝銅像移転の詞碑文)
(2)菅野儀作先生は明治四十四年六月一日、市原郡八幡町に生まれ(中略)とくに第二次世界大戦で荒廃した郷土の復興に心血を注ぎ(中略)千葉県発展の基礎を築いた。(昭和58年＝像碑文)
- 1 1) 安産子育てのシンボル夫婦いちょうと八幡宮ゆかりの句碑 —— 周辺の史跡
① 社伝は八幡宮勧請の際、勅使桜町中納言によって植えられた記念樹とする。
樹高17m、目通り幹囲11m、地上3mのところまで二股に分かれているので夫婦いちょうの名がある。
② 周辺にゆかりの句碑や日露戦争記念碑がならぶ
(1)佐々木高行歌碑＝神か地に 千歳をにえにちちの木の かみかけをたのまぬ人なかりけり(明治24年)
(2)藤原季満歌碑＝巳年往古白鳳四年、この国この神社を創り仰せられし時、季満卿勅使に渡らせたまひ、自ら銀杏樹を植えて詠を歌いし歌なり
君がためけふ植えそえし銀杏樹 いく世経んとも神宿るらむ(明治24年)
(3)源建通歌碑＝御影山 神のめてにし飯香岡 むかしをかけく世に匂いけり(明治33年)
(4)万葉宗匠句碑＝見わたせば 花たたずむはさくらかな(年号不詳)
(5)忠霊塔(昭和30年)、凱旋碑(明治30年＝榎本武揚)、日露戦役記念碑(明治38年)、神明照覽碑
- 1 2) 直木賞作家立野信之の初恋の森 —— 文学碑
① 直木賞作家立野信之は市原市平田に生まれ、八幡にあった南総中等学校に学んだ。自伝小説「流れ」ではこの地を初恋の森としている。
(1)ある日 —— 初夏の爽やかな日だった —— 高志はいつも帰る汽車に乗り遅れたので、仕方なく次の汽車までの二時間を過ごすために海岸べりの神社の境内へ出掛けた。ほこりっぽい停車場よりも潮の香りのする緑の森の園のほうが快適だったからである。(昭和56年＝文学碑碑文)
- 1 3) 八幡での山岳信仰の深さ示す三山三段塚と富士塚
① 出羽三山講方三段塚＝出羽三山講(前出)の祭典塚、参拝記念碑が所狭しと立ち並んでいる。
(1)湯殿山、月山、羽黒山、三社大権現(文化9年)、湯殿山、月山、羽黒山(天保2年)ほか
② 富士講＝富士山を信仰する人たちが組織する講社、夏に白衣を着て鈴を鳴らし六根清浄を唱えて登山する。八幡は江戸時代から盛んで、出羽三山と重複、同じ人物が出羽三山を登拝し、富士講の講員も兼ねた。富士塚はシンボル、富士山の溶岩を貨車で運んだ。規模、歴史とも市内最大、八幡人の仰心を伝えている。



川上南洞 菅野儀作



御影山 立野信之の文学碑



↑富士塚



夫婦いちょう



出羽三山塚



14) 江戸後期から明治の商家造りを伝える市川本店と東屋八幡本陣跡

- ① 市川本店は代々八幡宮社家を勤め、江戸後期から醤油業を兼ねた。「日本博覧図絵」掲載の名家、棟門、店蔵などが現存。店内の古い帳場や箱階段、銘酒看板を昔のガラスごしに。
- (1)高二石六斗七升社家市川大造分配。社家市川大造藤原常忠(明治3年=菊間藩届け書)
- (2)反別三反二畝二十一歩、この草高二石六斗七升、旧社家、市川大造配当
三か年平均この入付米二石七斗四升二合九勺、辰年米二石八斗八升平作、巳年米二石四斗六升八合六勺違作、午年米二石八斗八升平作(明治8年=上伸書)
- ② 右側庭園部分は神官旧邸、明治はじめ後出東屋宮吉家とともに柴山房総知藩事八幡本陣跡ともいう。
- ③ 八幡本陣旧東屋宮吉家跡を覗く。庭や蔵などに本陣の遺構を偲ぶ。
本陣は参勤交代する大名などの宿泊、休憩所で、通常、車寄せ式台玄関、上段の間、書院、庭園など大名居館に準じた。八幡本陣は延享年間名主宅見立て、維新当時東屋以外は未確認。
諸藩の財政は火の車、経費節減で行程を急ぐ、次宿が近いなど利用は少なかつたかも?
- (1)永井伊勢様方、名主長三郎(ほか3名省略)いずれも月番石高にて相勤め申し候、問屋五人にて相勤め、本陣御見立てなされ候由(延享2年=久留里道中里程付)
- (2)八幡村知事柴山文平様へ願ひ出候。一同東屋本陣へまかり出候。(慶応4年=島野村名主日記)
- ④ 蔵造りの続く裏道をすすむ。明治、大正、昭和戦前の雰囲気が小路に漂う。

15) 本多正信、正純父子が年貢積み出し港として作った南町みおと蔵屋敷跡

- ① 南町みお=慶長19年、八幡村地頭本多正信、正純、永井直勝の3人が年貢米積み出し港として構築。江戸中期まで。大正時代海苔の養殖が本格化、みおは海苔取り船で埋まった。昭和30年代埋め立て、引き込みの道路と看護専門学校、職業訓練校などになっている。
- ② 蔵屋敷跡=天正ころ(または慶長18年)~元禄ころ、八幡村前出地頭の年貢米蔵屋敷。跡地は現在の八幡公民館、市原支所、八幡保育園に。
- (1)八幡宮境内の内、御三侯へ御蔵造立につき蔵屋敷に貸地の分、間(検)地、縦九十間、横十九間、本多佐渡守、本多上野介、永井信濃守、三給地地頭方へ貸地なり(慶長18年=御伝記)
- (2)八幡宮御徐地見通し四百八十間、上幅口十二間、地底尻八間、山岸南北三十間、同東西十八間、このたび御運送みお地書面のとおり拝借(以下省略)慶長十九甲寅年五月、村役人総代善六、同利兵衛、同羽左衛門(3領名主)運送蔵地守善左衛門、(あて先)八幡宮御役所(拝借地証文)

16) 草競馬も開かれた運動公園、戦後は潮干狩りの観光バスで満車に

- ① 古くは八幡宮敷地の砂浜、大正時代に防波堤を築いた。このころ農耕馬による草競馬も開催。近郷から弁当持参の観衆が集まった。騎手は飼い主、馬券はない。
- ② 戦後は八幡中学校グラウンド、海水浴や潮干狩りシーズンの休日は観光バス駐車場。数10台のバスで満車になった。

17) 講座にあたり下記皆さんのご協力をいただきました。ありがとうございました

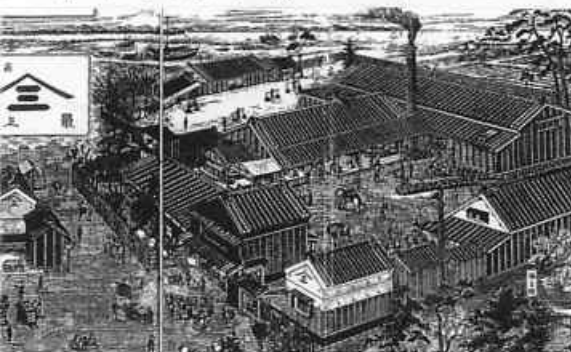
- ① 協力=飯香岡八幡宮、満徳寺、市川本店、秋葉平、板倉満、小出惣治、皆川清、佐倉東雄、鷺津寛子、北島勝代さん、織田自転車店ほか
- ② 石造物は「八幡の石造物研究会」で解説、詳細はホームページ「私の美しい房総」の市原市八幡の石造物を参照ください。調査完了後「八幡の石造物」(仮題)に取りまとめ刊行予定です。
- ③ 飯香岡八幡宮文書は「市原の古文書研究会」で解説中です。順次「市原の古文書研究」として刊行します。
- ④ 講座で使用した「八幡写真館」は公民館2階階段で仮展示、恒久展示を検討中です。
- 以上



市川本店、明治田↓と現在↑

↑本陣跡 ↓みお跡

草競馬↑ 運動公園↓



八幡史学館③ 平成18年11月14日

飯香岡八幡宮探検隊

9:15 八幡公民館 集合 (第1会議室)

9:20 出発

9:30 昇殿参拝→宝蔵庫見学

↓

10:30～ 八幡宿駅 (トイレ) →ロータリー
.。八幡公民館

↓

12:00～12:45 昼食 (第1会議室)

↓ 13:00まで自由(境内で)

13:00～ 一の鳥居→ 放生池→ 八幡宮外観

13:30～ 拓本

14:00～ 境内→市川本店

15:30 八幡公民館 解散

雨天でも実施します。
昼食・飲み物は各自用意 見学時、貴重品以外は第1会議室においてもよい。
飲み物は持っていたほうがよいでしょう。

子ども史学館

八幡宿という駅名は？八幡という地名は？



なぜこのように名づけられたのだろうか。

○いつごろから八幡に集落ができたのだろうか？

○工場や公民館のあたりは、いつごろからどのように変わってきたのだろうか？
昔へタイムスリップし、古き八幡をのぞいてみましょう。

きっとたくさんの発見があるよ。新しい何かが待っているかも知れないよ。八幡の街がちがって見えるかもしれないね。

1. 実施日と時間 8月8日(火) 9時30分 ~ 11時30分

2. 教えてくださる人 山岸弘明先生

3. 参加費 無 料

4. 募 集 小学5年~中学生 先着40名

申し込みは、窓口または電話(41-1984)

5. 持ち物 筆記用具



(五天カ船)

18.7.18 市原市立八幡公民館

会場 八幡公民館 視聴覚室

平成18年度八幡公民館「こども八幡史学(案)館」(講座要旨)
山岸弘明

1) プロローグ (資料1ページ)

- (1)みなさんは、むかし八幡が海の町だったという話を知っていますか、いまからつい50年ほど前までの八幡は海水浴や潮干狩りでにぎわった海の町だったのです。
- (2)昭和はじめと20年代の八幡町絵図、30年代の八幡海岸の写真をみましょう。八幡公民館前の運動公園の先端にはいまでもコンクリートの岸壁がのこっています。大正時代に作られた八幡海岸の岸壁です。かつてここから先が海、満潮時は海水が押し寄せ、干潮で潮が引くと3kmも砂浜になりました。波静かで遠浅、東京から潮干狩りや海水浴の学童たちが観光バスを連ねてやってきました。
- (3)もっと昔、江戸時代は年貢の津(積み)出し港、房総往還宿場町として発展しました。江戸時代後期の八幡村の絵図をみましょう。往還に沿った細長い町が八幡宿です。八幡浦(港)はいまの飯香岡橋の少し先からスーパーベイシアにかけてありました。
- (4)砂浜にみおという人工の運河を掘って港まで船を通します。船頭たちは潮を見ながら港に出入りしました。
- (5)船は五大力船という中型の帆船です。飯香岡八幡宮の絵馬「五大力船勢ぞろいの図」に13隻の五大力船が描かれています。
- (6)五大力船は年貢米などを積んで江戸まで9里(36km)、およそ3時間で着きましたが、旅客は乗れません。幕府は街道の保護政策で行徳と木更津以外での船旅を禁止、旅人は徒歩で江戸をめざしました。
- (7)江戸時代、その後の明治、大正、昭和前半の八幡は貧富の差の激しい村でした。一部船持ちたちの富豪の一方で、一般の家庭は貧しくわずかばかり田んぼで農業のかたわらにのりや貝を拾い、船仕事の手伝いなどをして生活しました。
- (8)昭和30年代になると高度成長といって、日本の経済が急速に発展します。東京や千葉、川崎などに大きな工場が次々と建設されるようになると海も汚れます。原油の流出さわぎで、頼りののりが大きな被害を受けるといった事件も起こります。
- (9)ちょうどこのころ千葉県は大規模な造成事業を計画します。千葉から先、市原、袖ヶ浦、木更津、君津の海岸を埋め立て京葉工業地帯を作ろうというものです。
- (10)八幡港を埋め立てるといふ計画に町の人たちは大混乱します。年寄りたちは、先祖からの海を無くしてはいけないという意見でしたが、若い人たちの考えは違っていました。海苔や貝に頼る将来に不安を持つ一方、雇用の拡大による新しい町作りに期待をかけたのです。
- (11)議論は続きましたが、昭和32年、漁業権を放棄して湾岸埋め立てに協力しようということにまとまります。八幡海岸は次々と埋め立てられ、埋め立て地には進出企業の新しいプラントが建設されました。八幡はこうして海を失いましたが、一方で工業都市として新たなスタートを切ることになったのです。
- (12)八幡の歴史は日本の歴史そのものです。きょうは歴史の町、八幡を紹介します。

2) はじめに海と伝説ありき (資料3ページ)

- (1)市原の地名は広い一面の原っぱ、八幡周辺の平野をいいます。おお昔は市原、菊間の高台までが海、なん千年か前に隆起、現在の地形ができます。
- (2)八幡の地名は飯香岡八幡宮に由来します。八幡宮の門前町として発展したのです。八幡宮の祭神は誉田別尊(ほんだわけのみこと)といいます。4世紀ころ大和朝廷時代

の第11代応仁天皇で武の神様です。八幡宮は全国に4万社あります。

- (3)八幡の歴史は日本武尊神話から始まります。神話とか伝説は現代の科学では説明できない架空の物語です。じゃーうそかという、そうともいえない。そこに古代人たちのロマンがあります。昔からの物語として語り継いでゆきましょう。
- (4)大和国家時代のはじめ、日本武尊（やまとたけるのみこと）という人がいます。日本統一のため軍勢を率いて千葉県にきます。当時の東海道は神奈川から舟で千葉へ渡ります。一天にわかにかき曇り暴風雨、このとききさきのおとたちばな姫は「わが身に変えてみことを守りたまえ」といってあら海に飛び込むと一瞬にして波が収まります。
- (5)おとたちばな姫の着物の袖が流れ着いた所が袖ヶ浦です。館山から船橋の広い範囲をいいます。袖ヶ浦市は有名だが、八幡海岸も昔は袖ヶ浦ともいったし、観音町に袖ヶ浦幼稚園があります。
- (6)八幡宮の地に陣を布いた日本武尊は歓迎の接待を受けます。このときのご飯が大変おいしかったので尊は「飯香岡」と名付けなさい、といったといひます。飯香岡のいいはご飯、かは匂い、小高い岡というので飯香岡になりました。

3) 菅原孝すえ女（むすめ）の「更級日記」と房総往還（資料3ページ）

- (1)次は「更級日記」です。平安時代の終わり、天神さまで有名な菅原道実の子孫で上総国司の上総介になった菅原孝標（たかすえ）という人がいます。
- (2)上総介はいまの県知事。都から派遣され任期は4年です。孝すえは奥さんと2人の娘を連れて上総に赴任します。妹はかぞえ10才から13才までの3年間余り市原で生活します。みんなと同じ年ごろですが早い子は結婚します。
- (3)この子が京都への帰りの道中の様子を和歌に読んで、40年後、おばあさんになってから「更級日記」という旅ものがたりにまとめます。
- (4)帰りの旅は国府からはじまります。上総の国府はいまの市役所のある高台あたりです。そこから「今たち」という所にいったん移って吉日を選んで出発します。今たちも謎です。これまでいくつかの説が発表されてきましたが、八幡宮の地も考えられます。
- (5)孝すえとその家族はれん車で旅をします。れん車の絵をみましょう。孝すえのむすめが成人したあと京都石山寺に向かう姿を描いたものです。絵は人が車を曳いて押し、弓矢を持った家来が守っています。
- (6)五所小学校の前に「四反田」という史跡看板があります。校舎を建てた時の発掘調査で1000年前に作られた幅6mの道路と、側溝が出てきました。国府と国府を結ぶ古代駅路と考えられています。
- (7)駅路は市役所の方から高台を市原のあすは神社という所に出ます。「万葉集」という平安時代の歌集にも出てくる古い神社です。そこから高台を降りて五所小学校を通り、旧道バス通りを八幡に抜け、村田川へ出る、後の房総往還がこのころすでに出来上がっていたものと考えられます。菅原孝すえのむすめのれん車も八幡を通過して下総の国府をめざし、京都への旅を続けたのです。

4) 飯香岡八幡宮の起源（資料4ページ）

- (1)飯香岡八幡宮は大変古い神社で「白鳳（はくほう）4年創建」といひます。白鳳は「年号表」にもない不思議な時代です。7世紀の「大化の改新」ころを「白鳳文化」といひます。

- (2)その白鳳4年、第40代天武天皇の命令を受けた桜町中納言季満という人が飯香岡に来て八幡宮をちん座した、と「社伝」はいいます。
- (3)一般に白鳳時代というのはあまりはっきりしない年代の落とし所で、年代不詳の時、謎めいた白鳳時代にすることが多いようです。
- (4)そして、八幡宮がはじめから八幡にあったとすることにも多くの疑問があります。
1つは古い八幡宮の資料は「市原八幡宮」になっていて、飯香岡の地名を付けた文書はすべて江戸時代以降のものだということです。
- (5)また、飯香岡八幡宮の建物を詳しく調べた結果、現在の本殿は棟札や由来などから、15世紀、室町中期の長祿3年と文明元年に行われた建築工事のいずれかのもので、それ以前の建物の跡は認められなかったといえます。
- (6)研究者の人たちは、飯香岡八幡宮ははじめ国府（市役所周辺か）近くで創建されて、中世に現在地に移ったとする説が有力です。もし、みなさんのお宅の庭から八幡宮の基礎石が発見されれば八幡の歴史も大きく変わることになります。

5) 飯香岡八幡宮の壁板 （資料なし）

- (1)これは昭和42年に行われた飯香岡八幡宮の修復工事の時の八幡宮本殿の壁板本物です。当時、本殿は老朽化して補強の柱が立ったり、雨もりがしたり、いまにも床も抜けそうで神主さんも恐る恐る入ったそうです。
- (2)旧材は可能なかぎり復元使用されましたが、一部は神主さんが貰い受け記念として地元の関係者に配付されました。これはその1枚、材質はけやきのようです。
- (3)当時、板は大変貴重です。「おが」という二人びきの縦のこぎりが生まれたのもこのころ。それ以前は丸太に穴を明けくさびで切り裂いて板にしました。この板はどっちの工法でしょうか。けずりは「やりがんな」です。平かんなはまだありません。荒あらしい表面の仕上がりが特長をよくあらわしています。

6) 頼朝の鎌倉入りと伝説 （資料4ページ）

- (1)市原には頼朝にかかわる伝説がたくさんあります。
治承4年（1180）、伊豆で挙兵した頼朝は石橋山の合戦に敗れ、わずかの兵を連れて小船で安房に逃げますが、地元の武将たちの援助をえて1か月後に進撃を開始します。
- (2)当時、上総は千葉広常、下総は千葉常胤が勢力を握っていました。頼朝は房総往還を通して千葉常胤の本拠千葉城（国府台とも）をめざします。
- (3)飯香岡八幡宮は源氏の守護神です。八幡宮を参けいした頼朝がいちょうを逆さに植えて「もし生き付くことがあれば源氏勝利まちがいなし」と祈願します。神社左側のいちょうが頼朝手植えといわれます。
- (4)千葉広常、常胤ら千葉県の武将たちの応援をえた頼朝は鎌倉に入ります。のち弟源義経らの活躍で平家を滅ぼして鎌倉幕府を興すことになります。大願なつた頼朝は建久4年（1191）八幡宮社殿を建立、社領150町石を寄進したといわれます。

7) 武家社会の崇敬を集めた飯香岡八幡宮 （資料4ページ）

- (1)鎌倉幕府は150年続くが、元弘3年（1333）足利尊氏（たかうじ）によってほろぼされます。尊氏は京都の室町に幕府を興しますが、足利將軍家からも手厚い保護を受けます。社伝は3代將軍義満が至徳元年（1386）、みこし4基を寄進、4代將軍義政も1000両を寄進して、へい殿と拝殿を建立したとします。

- (2)足利義満から寄進されたみこしは1基が宝蔵庫、残り3基はみこし蔵の奥に半分こわれ、ほこりまみれで現存しています。専門の先生方の鑑定で、作風や墨書銘などが一致、とくに若宮はその後の改修も少なく、専門家による修復を行えば国の重要文化財にも指定されるべき作品だといわれています。
- (3)以後、飯香岡八幡宮は千葉氏、北条氏など関東の武将たちに崇敬されながら徳川時代を迎えることとなります。

8) 千葉宗家康胤 (やすたね) の墓と胴埋塚 (資料4ページ)

- (1)観音町にどうまん塚という共同墓地があります。塚は墓のことです。千葉宗家17代千葉康胤の胴体を埋そうした所です。
- (2)千葉氏は源頼朝の鎌倉幕府創立に貢献した広胤の子孫です。代々千葉介を名乗って下総国を所領にします。城は千葉の亥の鼻公園の千葉城、いまは天守閣風の博物館になっていますが、元々天守閣はありませんでした。
- (3)鎌倉時代は幕府創設の名門として力を発揮しますが、室町時代になると一族が2派に分かれて争うようになります。康正元年(1455)16代胤直のとき、父の弟おじの馬加(幕張)康胤が千葉城を攻めて宗家を滅ぼし、自ら17代を名乗ります。
- (4)一族の東常縁が天皇に訴えて追討の兵を起こします。幕張城を攻めて康胤を破ると、退却する康胤を追って千葉から八幡へと迫ります。もはやこれまでと心に決めた康胤は村田川ではなばなく討ち死に、最後の地が八幡の雁田川だという人もいます。
- (5)康胤の首は村田川にさらされて京都に送られましたが、胴体は近くの砂浜に埋葬され胴まん塚になったといわれます。また、八幡宮の隣の無量寺は千葉氏と関係深く、ここにも康胤と一族の墓があります。

9) 足利義明と五所伝説 (資料5ページ)

- (1)五所の元字は御所です。京都御所、皇居の吹上御所と同じ、天皇や将軍のことです。どうして八幡にこんな地名があるのでしょうか。
- (2)室町幕府、足利尊氏は京都に幕府を開きますが、旧鎌倉幕府のあった鎌倉にも本拠をおいて関東地方を治めさせます。これを鎌倉府または鎌倉将軍といいます。
- (3)長男の家が代々将軍を、2男の子孫が鎌倉府を勤め、はじめはうまくゆきますがまもなく冷戦となり、鎌倉将軍4代持氏のとき幕府軍と戦い敗れて自害し、その子成氏が茨城県の古河(こが)に逃れます。これを古河公方といいます。
- (4)2代目は政氏で、政氏に4人の子供が生まれます。長男は3代高基、2男が義明です。義明の生まれたころの日本は戦国時代で、強い者勝ち、全国が麻のように乱れました。義明は少年時代、鎌倉の鶴が岡八幡宮の別当寺で厳しい修行を積みます。
- (5)やがて古河に戻った義明の目に写ったのは父政氏と兄高基の激しい親子けんかでした。たまらず出奔、義明が頼ったのは市原近い真里谷の上総武田氏です。
- (6)当時武田氏は千葉の小弓城を本拠とした千葉一族の原氏と争っていました。武田氏は名門の義明を押し立てて力にしようと考えたのです。義明ははじめ八幡宮の別当寺霊応寺に住み、のちに五所に移って八幡公方を名乗ります。公方は将軍です。いくつもの自称将軍が誕生し、混乱がますます深まることとなります。
- (7)いまジョイフル本田となっている金杉川側の地がその御所跡ともいわれています。20年前まで土塁、空堀が回っていたので城跡に違いないということになったのでしょうか。ここが御所であったとすれば何らかの痕跡があるはずですが、ジョイフル本田の工事の

前に発掘調査を行なわれましたが、残念ながら当時のものは何も出てきません。

- (8)地名からも五所に義明が御所を構えたと思像できますが、現在のところそれがどこか解明できません。
- (9)義明は千葉の小弓城を攻め落として移り、八幡公方から小弓公方に変わります。義明の活躍に里見氏など安房、上総の戦国大名たちがその旗本に加わります。
- (10)このころ兄の高基は戦国大名として力をつけた北条氏と結び、千葉氏も北条傘下となります。こうして北条、古河公方、千葉連合軍と小弓公方、安房里見連合軍が軸ができて上がります。
- (11)天文7年(1538)、関東の覇権をかけて両軍が市川の国府台で激突します。小弓公方足利義明軍は1万、対する小田原軍は2万、江戸川を挟んで対陣します。戦いははじめ小弓方が有利、しかし多勢を頼む小田原軍が強引に川を押しわたって3方から攻めたてると小弓軍はたちまち形勢不利となります。この絵は義明を描いたにしき絵です。もはやこれまでと敵陣におどり込んで壮絶な討ち死にをとげます。
- (12)北条勢は勝ちに乗じて下総に兵をすすめ小弓城を占拠、このとき妻は自害、子供たちは安房へ逃れます。伝夫妻の墓がJR八幡宿駅近くの満徳寺御墓堂にあります。
- (13)以後、八幡を含む上総の大半は小田原北条氏の所領となります。

1 0) 八幡の古寺と飯香岡八幡宮新市 (資料6ページ)

- (1)それでは八幡の集落はいつから始まったのでしょうか。
当然、地名の由来となった飯香岡八幡宮の移転とかかわることですが、それははっきりしません。実はもう一つのヒントは八幡の古い寺でらにありそうです。
- (2)八幡の無量寺や称念寺に室町中後期の五輪塔やほうきょういんとうと呼ばれるお墓がたくさん残っています。当時、一般の人たちはお墓を立てません。おそらくお坊さんや武士、有力な地元の人たちのものでしょう。
- (3)このことは、少なくとも室町中期に多くの人たちの住んだ八幡村落がすでにあったということになります。もしかすれば鎌倉時代の可能性もないとはいえません。
- (4)この資料は飯香岡八幡宮の文書(もんじょ)です。「相定む、新市ほつとのこと」と読みます。天正9年(1581)、小田原北条氏が発行した「楽市」の免許状です。
- (5)当時、織田信長の安土城下で楽市が開かれたことは歴史の教科書にも出ます。楽市は町を繁栄させるために城下や寺社の門前で市を開くことで、税金の免除などの優遇処置がとられました。小田原北条氏も各地で楽市を作ったことが知られています。新市の開催は八幡の町場形成に大きな影響力を与えたと考えられます。

1 1) 豊臣秀吉の小田原攻略 (資料6ページ)

- (1)戦国時代の戦乱の世に「天下布武」をすすめたのが織田信長ですが、明智光秀の「本能寺の変」に散ります。後を継いだ豊臣秀吉の天下統一、最後の仕上げとなったのが天正18年(1590)北条氏康のいる小田原城でした。徳川家康をはじめ20万の大軍が小田原城を包囲、籠城3か月、戦意を失った北条軍は降伏します。
- (2)当時市原は北条氏の所領で、八幡は千葉一族の原氏が治めています。上総の武士たちは全軍を小田原に結集したので、地元には留守を守る老人や子ども、女性しかいません。秀吉の軍が迫るとわれ先に逃げ出し、ほとんど抵抗もなく全城が明け渡されたといえます。市原の椎津城、池和田城もこの時落城しました。
- (3)小田原落城で八幡の北条氏所領も終わり、徳川時代へと進むこととなります。

役を義務化、中世の複雑な土地領有関係を整理して、近世知行制度の基盤を固めます。

- (4)測量の絵です。市原の検地は天正19年と文禄3年に行なわれました。
- (5)刀狩りも検地と並行して行われました。百姓から武器を没収、検地を助けて一揆を防止します。「兵農分離」といって武士と百姓の身分を統制します。百姓の子は百姓、武士になることも勝手に職業を選ぶこともできません。

1 5) 八幡ミステリー、2つの城はどこか (資料7ページ)

- (1)元禄時代になると大久保忠高八幡藩1万石と堀八幡藩1万石の2つの八幡藩が登場します。藩は城、八幡に置かれた謎の城「八幡城=陣屋」はどこにあったのでしょうか。
- (2)大久保忠高は大久保彦左衛門の一族、5代将軍綱吉の側近として1万石で大名になります。名乗りは「八幡藩」ですが常に将軍近くに勤務するため城はありません。ほかにもこうした例はたくさんあります。かってに「名目藩」と位置付けました。
- (3)一方、堀家は3代直良と4代直有(なおさだ)の2人が寛文8年(1668)~元禄11年(1698)の30年間八幡藩を興します。江戸幕府の正式記録に2人が参勤交代の帰国あいさつのため将軍に謁見したという記録もあります。参勤交代で江戸と八幡を往復したとすれば、八幡陣屋は必ずあったはずです。

1 6) 屋号「じんや」鈴木さんが所蔵する「陣屋絵図」 (資料7ページ)

- (1)八幡駅から北へ100mほど行ったところに屋号「じんや」を名乗る鈴木さんというお宅があります。屋号は家のあだ名です。昔からの人たちはいまでも屋号で呼んでいます。その鈴木さん宅に「陣屋絵図」が保管されています。これがその陣屋絵図です。
- (2)手前が房総往還、旧道。高札が立っています。引き込みの道があって陣屋地、水濠と土塁が回り、池があります。まん中の大きな字は「御陣屋屋敷絵図写し、文化6年(1809)改め、名主太右衛門預かり」。文化6年は八幡堀藩から100年後、名主太右衛門は鈴木さんの先祖です。陣屋跡地の「請書」ですが残念ながらあて先の領主名部分はありません。以後「じんや」の屋号が許されたといえます。
- (1)それではここが八幡堀藩の陣屋か、というとは実は問題も多いのです。まず、1万石の陣屋地としては小さすぎるということです。城には藩主の居住御殿のほか、武器や食料を納める蔵や役所、作業小屋、城門や門番所、少なくとも数十人の武家屋敷や長屋が必要です。また、縄張りの水濠や土塁が実戦向きでなく、溝や竹山などの呼び方は官陣屋や蔵屋敷のもので、八幡陣屋の謎解きはもう少し時間が必要です。

1 7) 江戸後期は旗本8給、村人たちの生活 (資料8ページ)

- (1)八幡村の所領後世は幕府の直轄領がおよそ10%、八幡宮領10%、残り80%は旗本領で佐野、村上、河野、水野、岩本、松本領の8給です。それぞれに名主と組頭、百姓代の村三役が置かれ、独立した自治体でした。
- (2)年貢は「村請制」といって村の共同責任、名主は村長ですべての責任を負います。年貢徴収の図です。村人たちは収穫のおよそ半分を米やお金で払います。畑や家も税の対象、海や川、野原の利用税、村の共同出費や宿場経費も大きな負担になりました。殿様の任官や冠婚葬祭、家屋敷の新築、補修、ときに家計の赤字も割り当てられます。
- (3)税金を払えない人たちはたんぼや畑を質に入れて金を借り、返せないと小作人になりました。借地百姓たちは、五人組と呼ばれた村の仲間にも入れず、自分の作った米も食べられません。水ばかりのぞうすいやひえ、あわを食べて生活したので「水飲み百

姓」と呼ばれました。

- (4)百姓たちはどんな家で生活したのでしょうか。大半はわらぶき屋根にせいぜい板の間と土間、たたみもありません。水飲み百姓は土間にむしろをしいて生活しました。
- (5)最初に八幡は海の町で「五大力船」で賑わった話をしました。皆さんはこの船で「江戸見物」や観光旅行を楽しんだと思うでしょう。ところが庶民が旅行を楽しむということはほとんどありません。一生に1度か2度出羽三山かお伊勢さんにでも参詣できるかどうか、ほとんどは市原から1歩も出ることなく生涯を終えたのです。
- (6)新聞もテレビもけいたいもない。旅行もばくちもだめ、唯一の楽しみは信仰を通じた集まりでした。毎年中秋の名月に行われた八幡宮の祭礼はその中心でした。

1 8) 宿場町、継ぎ立て寄場として発達 (資料9ページ)

- (1)房総往還、交通の要しょうに位置した八幡は房総往還の宿場町として賑わいます。宿場の中心となるのは本陣と継ぎ立て問屋場です。本陣は参勤交代の休泊旅館、問屋場(といやば)は荷物の輸送係です。
- (2)江戸後期、八幡宿を通った大名家は館山稲葉1万石、勝山酒井1万2,000石、佐貫阿部1万6,000石、飯野保科2万石、久留里黒田3万石、鶴牧水野1万5,000石と一時期五井に陣屋を構えた有馬1万石の7藩、大多喜松平藩は伊南通り往還から浜野を経由したので八幡は通りません。
- (3)大名行列のとも揃いの最大は加賀前田藩の2,500人ですが、八幡を通った大名家はいずれも小藩で150人くらいです。江戸への参勤は八幡から蘇我、千葉、検見川、幕張、船橋と房総往還を継ぎ立て、そこから成田佐倉街道を市川小岩の渡しを越えていったん千住に出ます。千住から日光街道を江戸日本橋めざします。
- (4)大名行列というと、「下に下に」の制止、奴さんが毛槍を振るわせる華麗な絵物語を思い浮かべます。あんなことをしていたら一日に何キロも進まない。それじゃーうそかというところでもない。実は泊まりと江戸入りのセレモニー、お江戸日本橋では大勢の見物人を前に意地と面つを競いあいます。
- (5)八幡の本陣はどこにあったか、というと旧道の市原出途、辰巳の方に曲がるバツ傳のあたり、昔あずま屋という料亭をやった宮吉さんが本陣です。周囲を白壁でめぐらせ、池庭、上段の間をもった御殿建築と考えられますが詳しい状況はわかりません。旧道沿いの跡地はなんとなく雰囲気が残っているようにも見えます。
- (6)問屋場は旧道の駅入り口のあたりと考えられますが特定できません。

1 9) 八幡港と五大力船 (資料9ページ)

- (1)八幡宿のもう1つの顔は年貢米の港町です。江戸後期の八幡海岸の絵図をみましょう。満潮時の海はここまでですが、干潮時はこのあたりまで潮が引いて砂浜になります。港は干潮時の海岸、海の中に作らなければいけません。
- (2)ここは陸からは遠く荷上げが大変ですね。昔の人は考えました。そして生まれたのがみお(人工港)とみお筋、人工の運河を作って陸地まで船を入れようというのです。
- (3)最初のみお当時八幡宮の境内、いま理容専門学校とその周辺、小さな公園があって引き込みの道になっています。慶長19年(1614)本多正信父子ら3人の八幡領主が専用みおとみお筋を作って年貢米の津出しします。青線がみお筋、船だまりのみおはこの部分です。船は潮具合をみながらみおを出入りしました。
- (4)その後年代ははっきりしませんが浜本にもみおができます。

(5)みお筋は深さが4、5mでしょうか。最初に掘るのも大変だが、すぐ波で埋まってしまいます。手入れも大変です。大正時代に港の大改修が行われいまの白金通り付近に移ります。補修のみお堀りも戦後しばらくまで続けられたということです。

2 0) 江戸後期の八幡絵図 (資料10ページ)

- (1)八幡宮所有絵図の中から「八幡村絵図」2枚をみましょう。
- (2)江戸後期の絵図で「八幡村近郷図」。八幡宮がここ。八幡村、南新田、北新田に分かれています。五所村、菊間村、市原村、能満村などがみえます。
- (3)これは江戸後期の詳しい「八幡村絵図」。何しろ詳しい江戸後期の八幡がよくわかります。さっきの天正時代の絵図とくらべてみましょう。
- (4)まず村が拡大していることに気づきます。八幡港はこのあたり、浜本地区が港を中心にご盤目に整備されています。道路が曲線から直線に代わり、周辺村々への道路網が広がっています。村が宿通りを中心とした街道継ぎ立て宿場町として、年貢米津出し港として発展している様子が絵図からもうかがえます。

2 1) まとめ (資料10ページ)

- (1)きょうは神話から江戸時代までの八幡の町の歴史を駆けあしで紹介しました。八幡宮の門前町として発展した八幡、気候温だん、加えて住民の人柄も温厚です。天災、ききん、大事件もない、平和が続いた町といえます。
- (2)八幡には八幡宮や八幡港跡、宿通りに沿った本陣などの史跡や、江戸時代からのたたずまいを残す旧家などがたくさん残っています。ぜひ自分の足と目で八幡の歴史をたどってください。これを機会に町の歴史に興味をもってくれれば幸いです。

平成18年度八幡公民館「こども八幡史学(楽)館」資料

みんなは八幡の町が、みんなのおじいさんたちの若かったつい40年前まで海水浴や潮干狩りでにぎわったマリンスポーツの町だったことを知っていますか。八幡公民館前の運動公園から先が海、満潮になると運動公園の岸壁に波が押し寄せ、潮がひくと3キロも海が遠のいて砂浜が広がりました。八幡の海は波静か遠浅の海岸で、運動公園には海水浴場を示す万国旗がほんぼんと翻(ひるがえ)りました。着替えや食事、飲み物などを提供する「納涼台(海の家)」が立ち並び、シーズンは東京の小中学生が観光バスを連ねて広い海岸がいっぱいの人波で埋まったのです。

*

JRの駅名「八幡宿」になぜ「宿」なの?と不思議に思ったみんなも多いでしょう。実は八幡の江戸時代は海と陸の交通要衝(ようしょう)として発展した「宿場町」だったので。市原の奥地や遠く外房海岸側から運ばれてくる年貢米の中継基地で、飯香岡橋からスーパーベイシアの裏あたりにあった八幡浦(港)から「五大力船」と呼ばれた中型帆船が年貢米を江戸(東京)へ津出しします。かつての浜本(はもと)は五大力船の船問屋の拠点で年貢米を納める蔵が立ち並びました。旧道「房総往還」は参勤交代路、休泊のための本陣や荷物を継ぎ立てる問屋場が置かれ、久留里黒田藩など7大名家が供揃いを整えて通過しました。幕府の街道保護政策で市原から海路による江戸入りが認められなかった旅人たちも徒歩で江戸をめざしました。

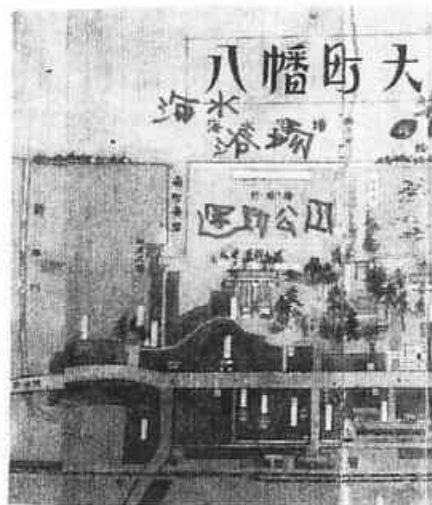
*

江戸時代、その後の明治、大正、昭和前半の八幡は貧富の差の激しい町でした。大地主や船持ちたちを除く一般の家庭は貧しくわずかばかり田畑を耕し海苔や貝を拾って生活のたしにしました。昭和30年代に入ると高度成長が始まり日本の経済が急速に発展しますが、油の流失騒ぎで頼りの海苔が大きな被害を受けたりもします。ちょうどこのころ千葉県が大規模な湾岸埋め立てによる「京葉工業地帯」の造成を計画します。八幡浦を埋め立てるという計画に八幡の人たちは大混乱します。年寄りたちは先祖からの海を無くしてはいけないという意見でしたが、若い人たちの考えは違っていました。海苔や貝に頼る将来に不安を持つ一方、雇用の拡大による新しい町造りに期待をかけたのです。昭和32年漁業権を放棄して湾岸埋め立てに同意、八幡海岸は埋め立てられて進出企業の大型プラントが次々に建設されました。八幡の新しい町造りの歴史がこうして始まったのです。

*

きょうの「こども八幡史学(楽)館」はタイムスリップして「八幡のむかし」をご案内します。

- | | |
|----------|-------------------|
| 世紀=時代 | ①はじめに海と伝説ありき |
| 4C=大和朝廷 | 日本武尊伝説 |
| 11C=平安中期 | ②更級日記と古代駅路 |
| 7、15C | ③八幡宮の白鳳創建と移転伝説 |
| 12C=鎌倉初期 | ④頼朝伝説 |
| 14C=室町中期 | 足利義満寄進のみこし |
| 15C=" 戦国 | ⑤八幡公方と千葉一族の内乱 |
| 16C=安土桃山 | ⑥寺々と天正新市、八幡集落の起こり |
| 16C=" 徳川 | ⑦家康の江戸入りと太閤検地 |
| 17C=江戸中期 | ⑧2つの八幡藩のなぞ |
| 19C=" 後期 | ⑨八幡領主と村人たちの生活 |
| 19C=" | ⑩宿場町、年貢津出し港 |
| 19C=明治時代 | ⑪明治維新から廃藩置県 |
| 21C=現代 | ⑫まとめにかえて |



昭和20年代

戦鳥図幅八縣葉斗



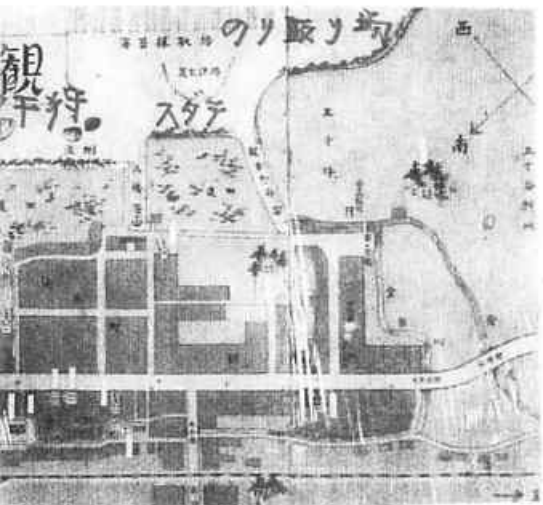
昭和はじりの八幡町



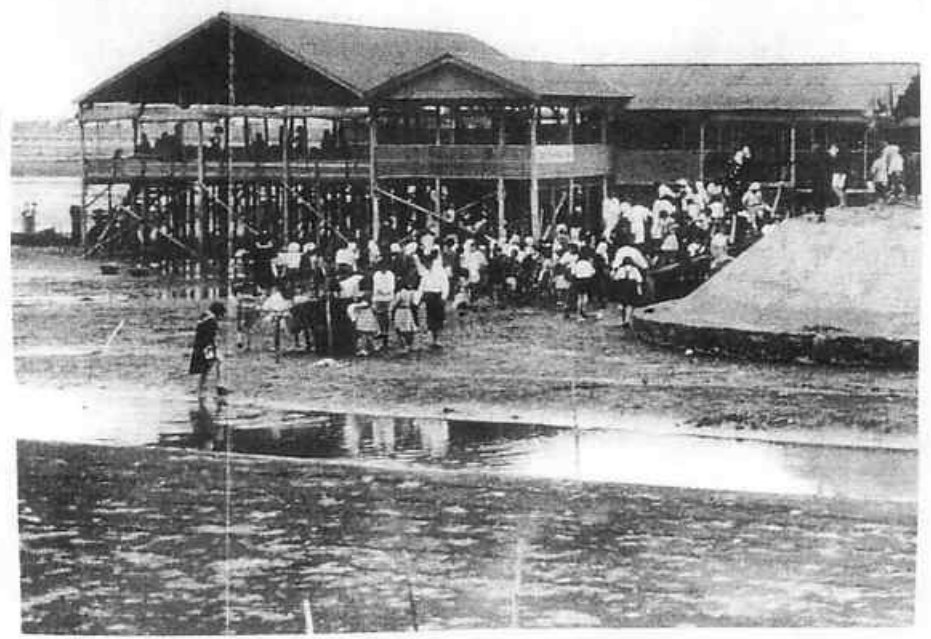
大正時代の八幡浦(港)



潮干狩りの賑い



八幡町(公民館展示)



昭和30年代の納涼台(海の家)

1) はじめに海と神話ありき(八幡の始まり)

① 地名の起こりから

- (1)市原=いちいの木の茂る野原、また広い一面の原っぱとも。
- (2)八幡=飯香岡八幡宮の「はちまん」から。「八幡さま」の門前町として発展した。

② 日本武尊(やまとたけるのみこと)神話(伝説)

- (1)日本武尊は大和(奈良)国家創設期(4世紀ころ)の皇子で英雄。父である景行天皇の命令を受けて大和政権にさからう各地の豪族たちを征服、死後白鳥となる。
- (2)みことは関東や東北地方の反乱を静めるため東海道を下る。相模から「走水海」(東京湾)を上総に渡るとき嵐にあう。妻の弟橘媛(おとたちばなひめ)が「わが身にかえて夫を守りたまえ」と荒波に身を投じ海神の怒りを静めた。姫の袖が流れついた所が袖ヶ浦で、富津から船橋あたりまでの内房海岸をいう。袖ヶ浦市は有名だが八幡にも袖ヶ浦幼稚園がある。
- (3)みことが八幡に宿陣した時、歓迎のご飯をたくよい香りがしたので「ご飯の香りの岡」となった。

③ 古墳時代は菊間国造(くにのみやっこ)が支配、八幡に集落はまだない

- (1)大和朝廷時代、市原の南半分を支配したのは菊間国造で、菊間に巨大古墳や古代廃寺が残っている。
- (2)当時の八幡は海岸の砂地で、古代の集落を示す古墳や住居跡、貝塚はみつからない。

2) 平安中期、菅原孝標のむすめのれん車が行く(更級日記と古代駅路)

① 上総国府の誕生

- (1)大化の改新(646年)後、天皇による新しい政治がはじまり国別に国府が置かれる。上総国府の位置は市原、郡本、惣社、能満説などがあるが特定されていない。

② 孝標(たかすえ)の女(むすめ)と「更級日記」

- (1)国府の現地知事・上総介(国司)は都から派遣されれば4年の任期を勤めて京都に戻る。
- (2)菅原孝標=学問の神様・藤原道真の子孫、代々文章博士、大学頭だが孝標は上総介、常陸介に終わる。
- (3)孝標の女(女性の名前で呼ばない)=寛弘5年(1008)孝標2女に生まれ、10才の時父の任地・上総国府に下り市原で3年間を暮らした。歌人が多い血筋を受け文学に熱中、夫の死後、50才を過ぎてからその人生を回想した「更級日記」を書く。
- (4)「あづま路の道のはてよりもなお奥つかた」ではじまる書き出しは上総国府かられん車で京都をめざす帰り旅。「境を出でて下総の国のいかだという所に泊まりぬ。庵なども浮きぬばかりに雨降りなどすれば、恐ろしくていもねられず」八幡から村田川をこえた池田(千葉市)に泊まった、どしゃ降りの第1夜の不安を表現している。

- (5)れん車の絵=人が引いて押し、周囲を弓矢を持った家来たちが守る。

③ 五所小学校の「四反田遺跡」と「古代駅路」



日本武尊



菅原孝標のむすめのれん車



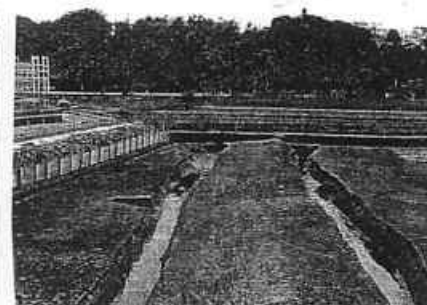
五所小周辺の古道



→ 古代駅路



埋田(仮池田)



四反田遺跡の古道

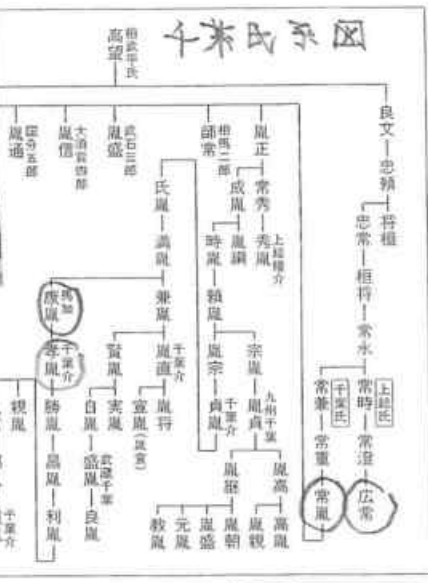
- (1)五所小の発掘調査で1000年以上前に作られた幅6mの古道が出てきた。国府と国府を結ぶ当時の駅路とみられる。また、すき、くわなどの稲作農具も発掘された。JR線から市原の高台までの平地は「条里制」といわれる古代に区画整理されたたんぼであった。
- (2)古代駅路は市役所周辺から大馬屋に抜ける高台を縦断したが、阿須波神社から五所小をへて海岸通りを結ぶ道が確認されたことで、房総往還も早い時点から主要往還として利用されたことを示している。

3) 謎多い飯香岡八幡宮の創建伝承 (白鳳創建と移転説)

- ① 飯香岡八幡宮の由来 (伝説)
 - (1)社伝は白鳳(はくほう)4年創建。天武天皇の命を受けた桜町中納言鎮座とする。白鳳は「日本書紀」に登場するが年号表にない。7世紀「大化の改新」から「奈良遷都」までの50年間の文化をいう。
 - (2)はっきりしない年代を白鳳時代とすることがある。八幡宮もあいまいで創建不詳といえる。
- ② 上総総社の謎
 - (1)「上総総社」「1国総社」を名乗る。総社は平安時代、数社の祭神を1か所にまとめた神社のこと。14世紀後期の資料に祭祀や建築資金を上総国レベルで集めているが「総社」とする根拠はない。
- ③ 市原八幡宮と移転伝承
 - (1)飯香岡を付けた文書はすべて江戸時代以降で、以前は市原八幡宮などになっている。
 - (2)昭和43年の解体修理にともなう調査で本殿は中世後期・長祿3年(1459)または文明元年(1469)建造でそれ以前の建物の礎石などは認められなかった。
 - (3)地元に石塚、元八幡移転伝承がある。
 - (4)「国府付近で創建、現在地に移転」が有力、しかし時期や前身地は未詳、上限が鎌倉時代、下限は本殿が建造された室町中期といえる。

4) 源頼朝が鎌倉をめざし、足利義満は八幡様にみこしを寄進 (中世前期の八幡)

- ① 貴族から武士の時代へ
 - (1)中世は華やかな貴族政治から武家政権へ。戦いの時代を迎えた房総往還は軍用道路として兵士たちを戦場に送る。源頼朝が、足利義満が、北条氏康が、徳川家康が全国統一に向かって軍を進めた。
 - (2)このころ八幡に飯香岡八幡宮が移転、武の神さまとして関東の武将たちの崇敬を受ける。八幡の町並みは八幡宮の門前町としてうぶ声を上げる。
- ② 頼朝の鎌倉入りと八幡宮の逆さいちょう伝説
 - (1)治承4年(1180)、伊豆で挙兵した頼朝は石橋山の合戦に敗れわずかの兵と安房に逃がれるが、その1か月後には房総武将たちの援助を得、鎌倉めざして進撃を開始する。
 - (2)当時、上総は千葉広常(上総氏)、下総は千葉常胤(千葉氏)が勢力を握る。頼朝は房総往還の八幡を通して常胤の本拠千葉城(異説も)をめざす。



飯香岡八幡宮



(3)逆さいちょう＝頼朝が逆さに植え「もし活着くことがあれば源氏勝利疑いなし」と祈願。八幡宮社殿左側のいちょうをいう。

(4)上総広常と千葉常胤は2万の兵を率いて頼朝軍に加わる。勢いを得た頼朝は鎌倉に入り、平家を滅ぼして鎌倉幕府を興す。大願なつた頼朝は建久4年(1193)社殿と社領12町を寄進したとされる。

③ 重要文化財クラスの足利義満寄進みこしが現存

(1)元弘3年(1333)、鎌倉幕府倒幕をはたした足利尊氏(たかうじ)が室町幕府を興すが、八幡宮は足利幕府からも手厚い保護を受ける。社伝は3代將軍義満が至徳元年(1384)、みこし4基と1の鳥居を寄進、8代將軍義政も社殿を建立したとする。

(2)みこし4基はほこりまみれで現存。専門家調査は作風、墨書(ぼくしょ)銘から当時の物と鑑定、うち1基はその後の改修も少なく国の重要文化財レベルだが、修復には数千万円がかかるという。

③ 八幡の中世前期は上総広常から鎌倉源氏、北条氏、足利氏領となり、やがて上総武田氏が進出する。

5) 八幡公方足利義明と千葉宗家の内乱(戦国時代の八幡)

① 村田川の戦いと千葉康胤(やすたね)の胴埋塚(どうまんづか)

(1)鎌倉幕府創設の功臣として重用された千葉氏も室町時代になるとかけりが出る。鎌倉府の内紛から一族が2派に別れて争う。康正元年(1455)16代胤直の時、おじの馬加(幕張)康胤が千葉城を攻め滅ぼし、自ら17代を名のる。

(2)怒った一族の東常縁が追討の兵を起こす。馬加城を落とし、追走して村田川が最後の決戦場となる。もはやこれまでと康胤ははなばなしく討ち死に、最後の地を雁田川とする説もある。

(3)首級は村田川の川原に晒(さら)されたという。胴体を埋めた胴埋塚が八幡北町に、千葉氏ゆかりの八幡無量寺にも伝康胤一族の墓がある。

② 関東覇権かけた八幡(小弓)公方の戦い

(1)室町幕府は尊氏の長男の家系が將軍を継ぎ、2男の子孫が鎌倉府を勤め、はじめうまくゆくがまもなく冷戦となる。4代氏持が幕府軍と戦って敗れ、その子成氏は古河に逃れて古河公方(將軍)を名乗る。ここに全国に先駆けて関東の戦国時代が始まる。

(2)6代政氏の2男義明は父兄と不仲、永正7年(1510)ころ真理谷武田氏の誘いに乗って八幡宮の別当寺霊応寺に入り八幡公方を名乗る。武田氏は千葉氏と争い足利家の血を引く義明を利用したのである。

(3)伝八幡御所跡＝五所ジョイフル本田の一部。発掘調査を行なったが中世の遺物はなかった。しかし五所の元字は御所、義明が五所のどこかに居館を構えた可能性が高い。

(4)永正14年(1517)、義明は小弓城の原氏を攻め落として移り、小弓公方と改名する。武名は日を追って高まり、里見氏など安房、上総の戦国大名たちがその旗本に加わる。

(5)このころ兄高基は戦国大名として力をつけた小田原北条氏と結び、千葉氏も北条氏に。北条+古河公方+千葉連合軍と足利義明+安房里見連合軍の対決軸が生まれた。



小弓(八幡)公方義明の討死



- (6)天文7年(1538)、関東の覇権をかけて市川の国府台で激突、小弓義明軍は1万、小田原軍は2万、江戸川を挟んで対陣、多勢を頼む小田原軍が川を押しわたって攻めたると小弓軍は総崩れとなり、義明も壮絶な討ち死にを遂げたという。伝夫妻の墓が満徳寺御墓堂にある。
- (7)北条勢は勝ちに乗じて下総、上総に兵をすすめ、以後八幡は北条氏の支配下に置かれる。

6) 八幡の寺々と八幡宮天正新市(町並みの起こり)

① 八幡宮門前で新市が始まる

- (1)「八幡宮由来本記」によれば天正9年(1581)北条氏が「八幡宮新市免許の証文」を発給して、諸税を免除し、乱暴狼藉(ろうぜき)などを禁止している。
- (2)当時、織田信長の安土城をはじめ有力な城や寺社は城下や町場集落形成のための誘致策として、税などを優遇する楽市が発達した。新市は八幡の町並み形成に大きな影響を与えたとみられる。

② 八幡の寺の伝承はまちまちだが、室町中期ころに集まってきたのではないか

- (1)若宮寺(霊応寺)=真言宗。八幡宮を統括、管理する別当寺。創建不詳、明治維新の時廃寺
- 満徳寺(無住)=真言宗。若宮寺と交代で八幡宮の別当寺を勤める。創建不詳、中世の墓少しあったがいまはない、御墓堂墓地に中世の墓あり
- (2)無量寺=浄土宗。伝白鳳元年創建。伝天文2年(1533)八幡宮境内の現在地に移転、中世の墓多数
- (3)称念寺=浄土宗。伝天正3年(1575)創建。中世の墓多数
- 妙長寺=日蓮宗。伝正長2年(1429)創建。中世の墓なし
- 円頓寺=日蓮宗。伝文明元年(1469)創建。中世の墓なし
- 満蔵寺=真言宗。創建不詳。中世の墓少しあり
- (4)胴埋塚、らん塔婆=中世後期ころからの共同墓地。中世の墓なし
- (5)多数の中世墓碑は主に室町中期から後期のもの。大型墓の多くは住職、小型は富裕庶民の墓か、八幡集落の起源を考える重要な状況証拠といえる。

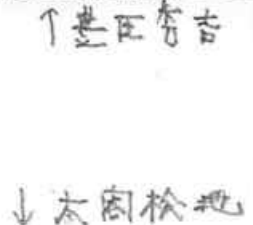
7) 徳川家康の江戸入りと太閤検地(近世はじめの八幡)

① 豊臣秀吉の小田原攻略と天下統一

- (1)戦国乱世に終止符を打った織田信長を後継した豊臣秀吉は、天正18年(1590)最後までに抵抗する北条氏政を攻める。秀吉軍20万が包囲、籠城(ろうじょう)3か月、北条軍は戦意を失って投降。
- (2)当時八幡は北条氏の勢力下で千葉一族の原氏が治めていた。氏政は決戦のため全軍を小田原に結集したので各地の守りは弱い。秀吉の軍勢が迫ると城兵はわれ先に逃げ出し、「神君(家康)の威光に1日の中に50の城が落ちた」という。このとき市原の椎津城、池和田城も相ついで落城した。



徳川家康と守道大太刀



本多正信

② 徳川家康の江戸入府当時の八幡

- (1)天正18年(1590)、秀吉の小田原攻略戦功行賞で家康に関東8か国250万石が与えられる。八幡も当然家康領となる。
- (2)八幡宮が提出した八幡村絵図(参照)=八幡宮中心に若干の村落、港はまだない。
- (3)八幡宮へ家康の所領寄進判物(はんもつ)=
寄進八幡宮、上総国市原郡八幡郷のうち150石のこと。天正19年11月日、大納言源朝臣花押(要旨)
- (4)家康は領内各地を回る。八幡宮にも宿泊? 釈藏院快元和尚から八幡滞在中の高野山西門院あて返書=内府様(家康)御着馬について、御通行のみぎり立ち寄り一泊なれば候。和歌致すべく(要旨)
- (5)側近本多正純が家康の武運長久と戦勝を祈願して大太刀を寄進。大太刀銘=
大納言源家康、武運長久、今度唐入り、上総国市原郡八幡宮へ寄進奉るものなり(要旨)

③ 八幡の近世は「太閤検地」と「刀狩り」にはじまる

- (1)天正19年(1591)、文禄3年(1594)市原で太閤検地を実施。
天正10年から17年がかり、同じ基準で全国的に。一地一作人「検地帳」に登録、租税と労役の義務化。中世の複雑な土地領有関係を整理、近世知行制度が確立する。
- (2)農民から武器を没収、検地を助け一揆を封じる。「兵農分離」で身分を統制、百姓の子は百姓。
- (4)天正18年、家康は家臣団に所領配分。上総は安房里見に備え譜代重臣を配備、本多忠勝=大多喜10万石、土屋忠直=久留里3万石、内藤政長=佐貫2万石

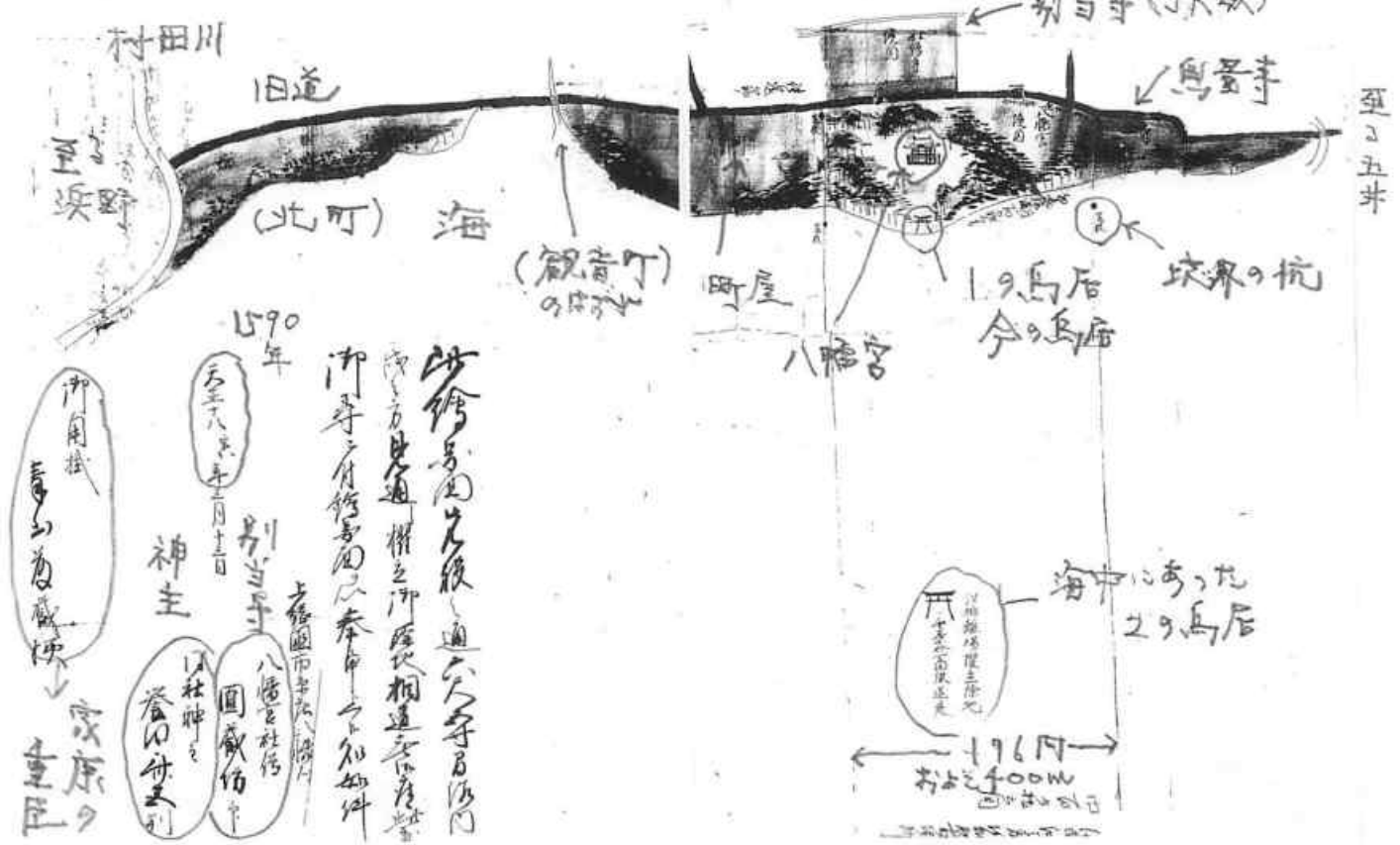
⑤ 家康入府当時の八幡の所領配置

- (1)永井直勝(天正18年~元和3年)=家康譜代の武将。当時5千石。のち老中で古河7万石に。
- (2)本多正信(天正、文禄?~元和2年)=家康最側近、戦時は軍謀、平時は国政に活躍。神奈川甘縄藩で寛政譜は八幡を併記、八幡宮、潤井戸村文書から初期は八幡藩といえる。当時1万のち2万石。
- (3)本多正純(天正18年?~元和ころ)=正信の嫡男。幼少から家康に仕え側近の筆頭に。大阪の陣に従い、大坂城の総堀埋め立てを指揮。当時の石高未詳、のち宇都宮15万石、権力闘争に敗れて改易。

8) 八幡ミステリー、2つの八幡藩(陣屋=城)の謎

① 八幡堀藩1万石(陣屋大名)

- (1)八幡1万石堀藩=豊臣秀吉の重臣堀秀政一族。直之が江戸町奉行9,500石、直景が1万石に。はじめ刈谷藩、3代直良、4代直宥(さだ)が寛文8年(1668)~元禄11年(1698)八幡藩を立てた。
- (2)2人は参勤交代帰国挨拶のため将軍に謁見、直良が八幡で亡くなったなどの記録も。だが城地は未詳。狭い八幡のどこにあったというのだろうか。
- (3)ヒント(飯香岡八幡宮文書)=①慶長20年、境内の一部を領主の年貢津出し港、蔵屋敷用地として貸



天正18年八幡ごもつとも首の村絵図

す。②寛永と寛文、借り手が堀家に代わる。少なくとも旗本時代に堀家の蔵屋敷と専用港があった。
 (4)港はのちの南町みおで現理容専門学校と引き込み道、昭和30年代までのり取り船使用。蔵屋敷は八幡支所、幼稚園、八幡公民館一帯東西25×南北150mのおよそ4,000㎡。

② 八幡大久保藩1万石(名目藩=定府大名)

(1)八幡1万石大久保忠高藩=小田原大久保藩分家の分家。5代将軍綱吉の側近、加増を重ねて貞享3年7,000+りん米3,000石=1万石の大名。八幡藩は貞享3年(1686)~元禄10年までの11年間。

(2)忠高は参勤交代のない定府大名。実態のない名目藩か。定府側近にしばしばみられる。藩地に殿様の居館はないが郡奉行が管理する地方陣屋や蔵屋敷が置かれた可能性はある。

③ もう一つの「じんや」鈴木家の「陣屋絵図」

(1)八幡駅北200mの鈴木家は代々屋号「じんや」を名乗り、「陣屋絵図」を保管している。

(2)絵図名「御陣屋敷絵図写し、文化6年改め、名主太右衛門預かり」。敷地面積およそ2,200㎡。

往還、高札場、引き込み道、陣屋地、溝(水濠)、竹山(土塁)、池など

200年前、鈴木家の先祖太右衛門が領主(記名がない)から陣屋跡地を拝領したことを記す。

(3)県の「埋蔵文化財分布地図」は大久保、堀家陣屋地、市は単に陣屋地、「市原郡誌」は大久保陣屋とし、地元伝承は大久保、堀両家まちまちという。

(4)じんや家(イコール)八幡堀藩陣屋か? 実は問題点も多い。

第1に大名陣屋地としては狭すぎる。堀や土塁が実戦向きでない、溝、竹山の呼び名などから、幕府代官、旗本の出先陣屋、蔵屋敷も考えられ、今後の研究課題といえる。

0. 八幡領主と村人たちの生活(江戸後期の八幡)

① 幕府直轄天領と八幡宮領、6人の旗本領に分割領有される

(1)江戸後期の八幡村は幕府代官所支配の直轄領と旗本佐野、村上、河野、水野、岩本、松本領と八幡宮領の8給。領主が8人、それぞれが独自に名主と組頭、百姓代の村三役を置いた。

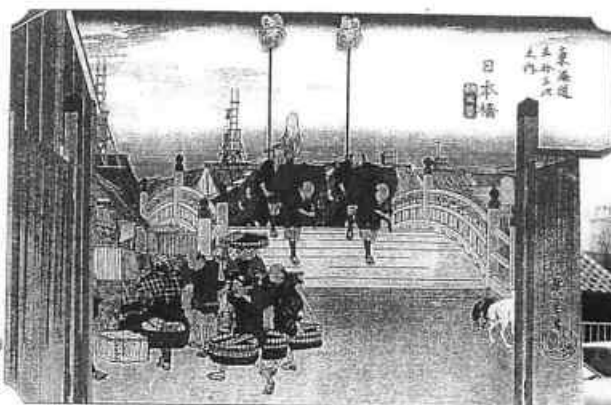
② 厳しい年貢取り立てに泣いた領民たち

(1)年貢は「村請制」で共同責任、名主が完納までのすべての責任を負った。

検地帳の田畑のランクで示された石盛(公定収穫高)の5公5民(5割)が年貢、ほかに屋敷や野原や川、山の利用税、村や宿場経費、殿様の任官や冠婚葬祭、家屋敷の補修経費などが割り当てられた。

(2)「百姓は生かさぬように、殺さぬように」「百姓となたね油は絞れば絞るだけ出る」家康と幕府高官のことばだとされる。庶民は厳しい年貢取り立てに泣いた。

(3)年貢を払えない百姓は田畑を質に入れ、返せないと小作人になった。小作人は一人前の百姓として認められず、食事にも困って水ばかりの雑炊やひえ、あわを食ったので「水飲み百姓」と呼ばれた。



康屋(宮吉)本陣跡



大名行列

鈴木家↓と陣屋絵図↑

↓堀直良直寄の墓

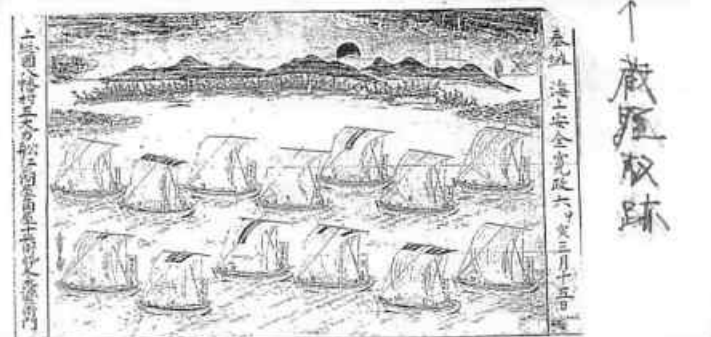
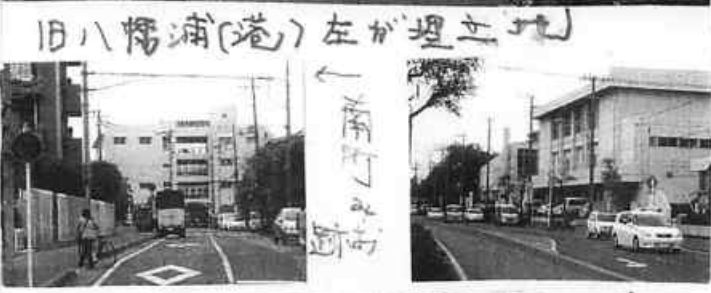
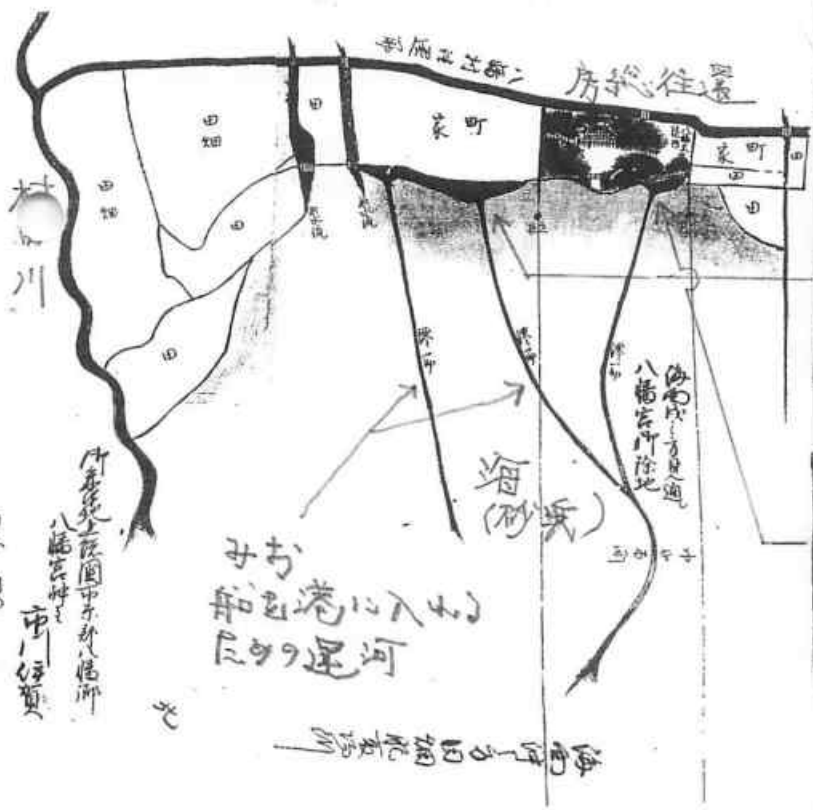


↑八幡町(宮吉)本陣跡

- (4)大地主や船持ちをのぞく一般の庶民は畳のない板の間と土間の小屋のような家で生活した。
- (5)学校もテレビも携帯もない。旅行やばくちもだめ。春秋の八幡様大祭や出羽三山講、富士講、庚申講、子安講など信仰を通じた寄り合いが唯一の楽しみであった。
- (6)しかし気候温暖、加えて人柄も温厚。天災、飢饉(ききん)、大事件もなく平和が続いたといえる。

10) 宿場町、継ぎ立て寄場として発達

- ① 八幡を通った大名行列は7藩、半年交代で1日50kmの強行軍
 - (1)江戸後期、交通の要衝に位置した八幡は宿場町として賑わった。宿場の中心となる本陣は参勤交代の休泊旅館で、問屋場(といやば=伝馬屋敷)は荷役業務を担当した。
 - (2)八幡宿を通った大名家は館山稲葉1万石、勝山酒井1万2,000石、佐貫阿部1万6,000石、飯野保科2万石、久留里黒田3万石、鶴牧水野1万5,000石と一時期五井に陣屋を構えた有馬1万石の7藩、2月、8月の2交代で江戸に向かった。
 - (3)大名行列は軍役の行軍を行列に移行したもので、供揃いの最大は加賀前田藩の2,500人、八幡を通った大名家は1万石クラスが多く150人程度。行列の半分は荷物の輸送部隊であった。
 - (4)江戸への参勤は浜野、曾我野、千葉寒川、検見川、幕張、船橋と進み、成田佐倉街道を市川小岩の渡し、水戸街道を利用して千住、日光街道を江戸日本橋めざした。市原からは1泊2日、幕府の街道保護政策で、海路はもちろん近道も認められなかった。
 - (5)大名行列は「下に下に」の制止、奴さんが毛槍を振るわせる華麗な絵物語を思い浮かべるが現実には厳しい。日の出前に宿を出て1日40~50kmを行軍した。
 - (6)八幡本陣は江戸中期は複数の名主宅が兼務したが、後期は旧道の市原出途バス停留所近くにあった宮吉家となり、問屋場は駅入り口とみられるが充分解明できていない。
- ② 年貢津出し港として発達、五大力船が江戸へ向かう
 - (1)八幡は近郷や外房方面の村々から送られてくる年貢米の津出し港として発達、江戸へ向かう五大力船で賑わった。五大力船は100石積み程度の中型帆船で、江戸まで海上30km、およそ3時間で着いたが物資専用で乗客は乗れなかった。江戸へ米や薪を運び、帰りは衣料や雑貨、酒などを持ち帰った。
 - (2)八幡宮絵馬=五大力船勢揃い図。寛政6年(1794)、作者不明、奉納、海上安全、江戸角屋十兵衛せがれ冬木源左衛門寄進。八幡宮の大祭で13隻の五大力船がお祝いしている。
- ③ 江戸後期の八幡絵図と人口
 - (1)八幡宮蔵、江戸後期「八幡村絵図」(参照)=天正図とくらべ村落の拡大、港を中心とした街区の基



八幡宮蔵、江戸後期、八幡浦岸
 八幡宮校舎「五大力船勢揃い図」→

盤目整備、道路の直線化と周辺村々への交通路整備など、村が大きくなっていることがわかる。

- (2)天保9年(1838)村高1,403石、家数339、人口1,564人、身分は百姓、副業者は128人で内訳は穀物商16(五大力船持っ船間屋などか)、はたご2、湯屋4、居酒屋8などであった。
- (3)江戸後期八幡宮領の「宗門御改め帳」(参照)=戸籍は寺が管理、寺が禁教のキリスト教徒でないことを証明。11家族で平均5人強、領高は150石で平均14石、他領とくらべ恵まれた境遇といえた。

1 1) 明治戊辰の戦いから廃藩置県へ(明治維新の八幡)

① 徳川幕府が倒れ明治新政府が樹立

- (1)江戸後期、ペリー来航、桜田門外の変以後の幕府は急激に力を失っていく。慶応4年(1868)、15代将軍徳川慶喜が鳥羽、伏見の戦いで新政府軍に敗れて江戸が開城されると、不満の旧幕臣「上総義軍府」が挙兵、新政府軍は市川、船橋戦争でこれを破って房総往還を南下する。
- (2)4月7日八幡五井戦争=八幡に集結した新政府軍は南新田(八幡海岸入り口周辺)から3手に分かれて五井に進軍、養老川出津渡船場を背にした50人の決死隊を壊滅させ、さらに敗走する本隊を追って姉ヶ崎、真里谷へと転戦して行った。

② 菊間藩領をへて廃藩置県、近代国家がはじまる

- (1)明治元年(1868)旧将軍徳川宗家は養子16代家達をもって静岡80万石に転封、八幡の幕府直轄領と旗本領は没収され、新たに転封した菊間6万石水野忠敬領となる。菊間の丘地に城作りが急ピッチで進められたが完成することなく明治4年廃藩置県を迎えた。
- (2)明治元年神仏分離令。八幡宮別当寺の霊応寺は行き過ぎた「廃仏毀釈」の嵐の中に取り壊された。
- (3)明治4年菊間県、木更津県、6年千葉県に編入、八幡村は維新後、八幡宿、八幡町をへて昭和38年に市原市になった。

1 2) 郷土の歴史に誇りを持とう(まとめにかえて)

- (1)本日の講座は飯香岡八幡宮神話から明治維新までを駆け足ですすめた。時間の制約もあり十分なお話はできなかったが、八幡の歴史は日本の中近世史そのものでもあったこと、そして八幡はかつて市原郡の中心地として発展した「豊かな歴史の町」だということは理解いただけたものと思います。
- (2)八幡には八幡宮や寺院、八幡港、旧道に沿って史跡や石造物、旧家の蔵などがたくさん残っています。町を歩いて八幡の歴史にみたり、年寄りの人たちにむかしの八幡を伺うのも楽しいことです。これを機会にみなさんが八幡の町の歴史に興味を持っていただければ幸いです。

以上



一 日 ち 長 吉
一 日 ち 喜 兵 衛
一 日 ち 市 三 良
一 日 ち 卯 之 助
一 日 ち 米 蔵
一 日 ち 寅 松
一 日 ち 三 郎 右 衛 門
一 日 ち 勘 之 助
一 日 ち 卯 兵 衛
一 日 ち 勇 蔵

戸籍にあらる八幡宮社領の「宗門御改め帳」

江戸後期・弘化年間の八幡宮領人員構成



←八幡五井戦争
↓菊間城跡

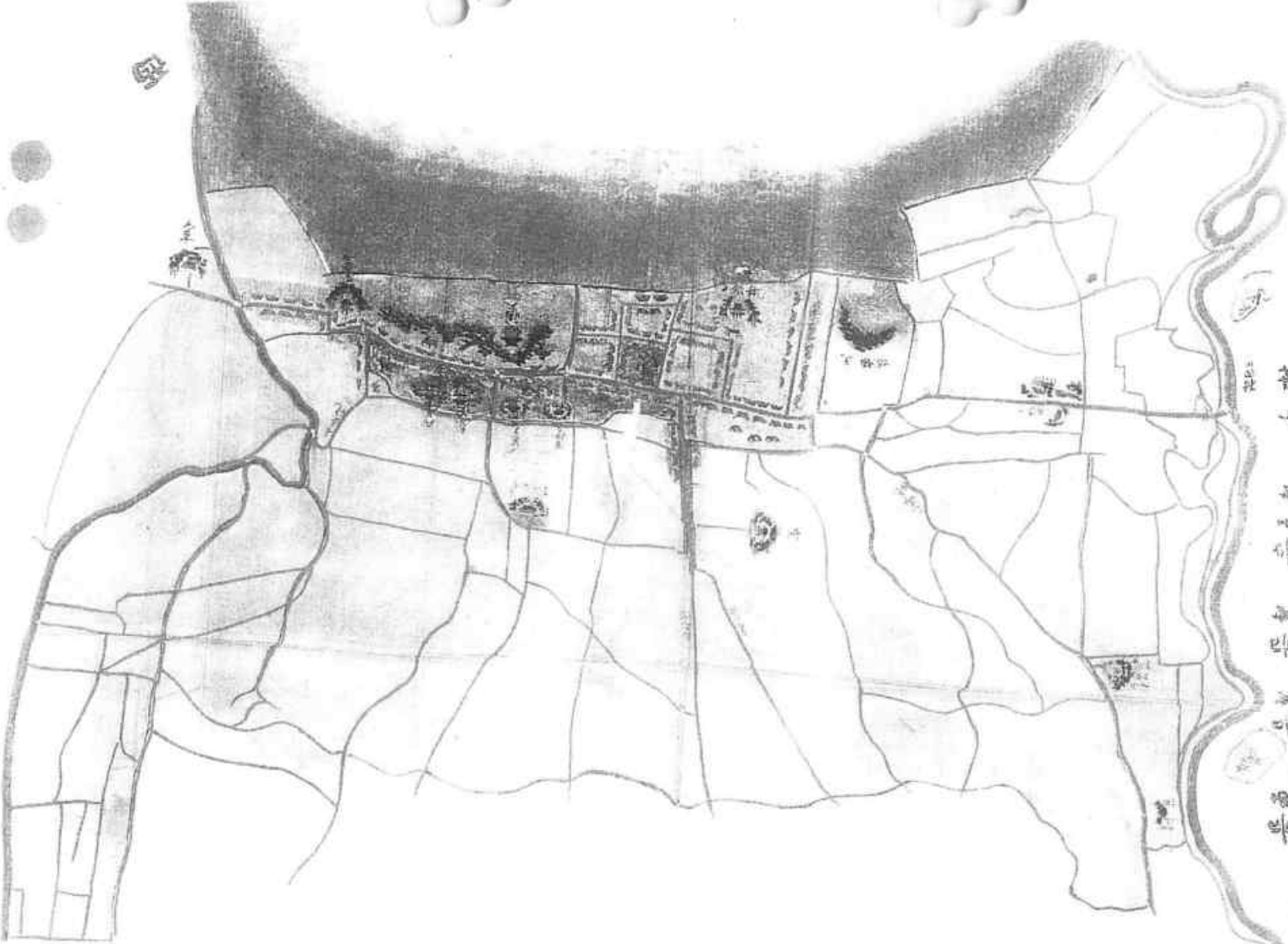


重元寺は八幡宿駅ロータリー横のビルに隣接している

- ① 承仕・宗兵衛=本人32才、妻31才(男4、女2)
 - ② "・長吉= 本人33才、妻32才(男3、女1)
 - ③ "・喜兵衛=本人65才、妻55才(男3、女4)
 - ④ "・市三良=本人78才、妻65才(男3、女3)
 - ⑤ 百姓・卯之助=本人29才、妻38才(男2、女3)
 - ⑥ "・米蔵= 本人46才、妻38才(男2、女2)
 - ⑦ "・寅松= 本人48才、妻40才(男3、女3)
 - ⑧ "・三郎右衛門=本人57才、妻49才(男3、女3)
 - ⑨ "・勘之助=本人死亡、妻34才(男2、女1)
 - ⑩ "・卯兵衛=本人40才、妻38才(男3、女1)
 - ⑪ "・勇蔵= 本人33才、妻34才(男3、女3)
- 承仕=寺社の雑役人 合計11家族、男32+女27=59

世田谷町
北
世田谷町

- 村田川原村跡
- 十番村跡
- 石橋通
- 新町村跡
- 三子村跡
- 高井村跡
- 新町村跡
- 新町村跡
- 新町村跡
- 新町村跡
- 新町村跡
- 新町村跡
- 新町村跡
- 新町村跡
- 新町村跡
- 新町村跡
- 新町村跡



世田谷町八幡宮が所成り江戸江村の八幡区

新町村跡、川原邊
 百七拾五石
 一、新町、用純種寺門口之
 二、拾八石
 三、同、下、南門前地
 四、新町行帯町也
 五、仲町、角、浅草町川原邊
 六、百零八石半
 七、浅草町行帯町、仲町、浅草
 八、川原邊、五、拾五石半
 九、浅草町、小倉町、角、八
 十、拾五石半
 十一、百〇三石半
 十二、梅倉寺門口、浅草町、八、拾町
 十三、角、近、六、拾、七
 十四、本分足、外、右、浅草町、字、一、
 十五、八、拾、五、石、半
 十六、村田川原、十、拾、四、石、半
 十七、百、七、拾、五、石
 十八、浅草町、百、七、拾、五、石
 十九、一、中、町、百、〇、五、石、半
 二十、一、下、及、百、七、拾、五、石
 二十一、一、下、及、百、七、拾、五、石
 二十二、一、下、及、百、七、拾、五、石
 二十三、一、下、及、百、七、拾、五、石
 二十四、一、下、及、百、七、拾、五、石
 二十五、一、下、及、百、七、拾、五、石

江戸時代の八幡村領主の変遷

天正18 寛永3 10 元禄11 宝永4 慶応4 明治元 明治4年

古河永井領	八幡堀領	幕領	旗本佐野領 226石	柴山支配	菊間水野領	廃藩置県
旗本永井式部領						
天和2		旗本村上領 178石				
		旗本河野領 95石				
		旗本水野領 89石				
旗本永井豊前守領 182石						

天正18? 元和2 寛永10? ? 貞享1 元禄10 延享3 寛延2年

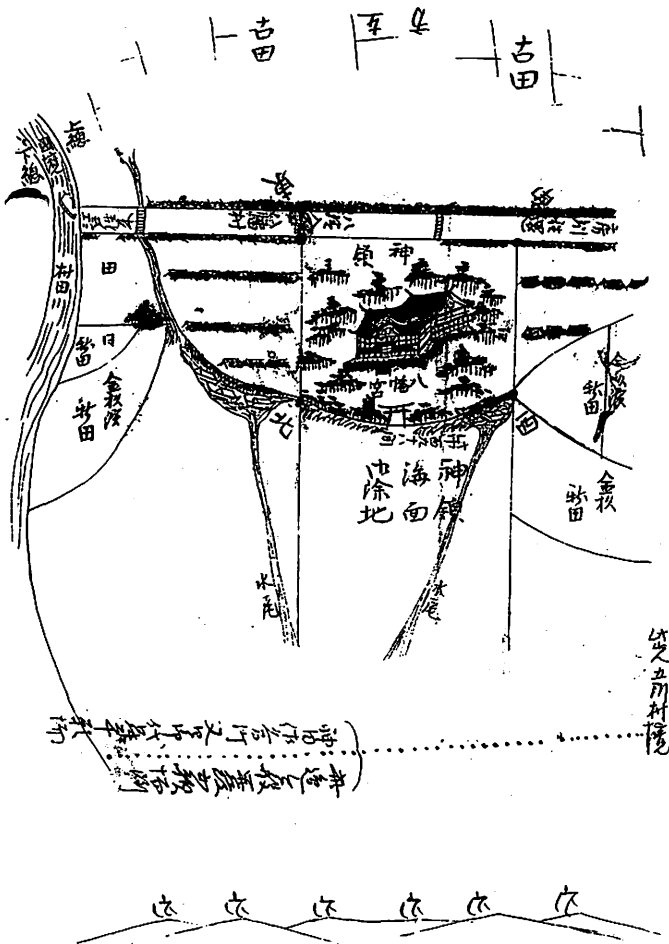
八幡本多領	旗本酒井領	八幡大久保領	幕領	前橋酒井領
旗本本多領	元和23			

明和7	文化8	天保3	5	12	慶応4年
川越松平領	幕領	佐貫阿部領	幕領	貝淵林領	幕府直轄領 108石
天明7 旗本岩本領 205石					
旗本松本領 166石					

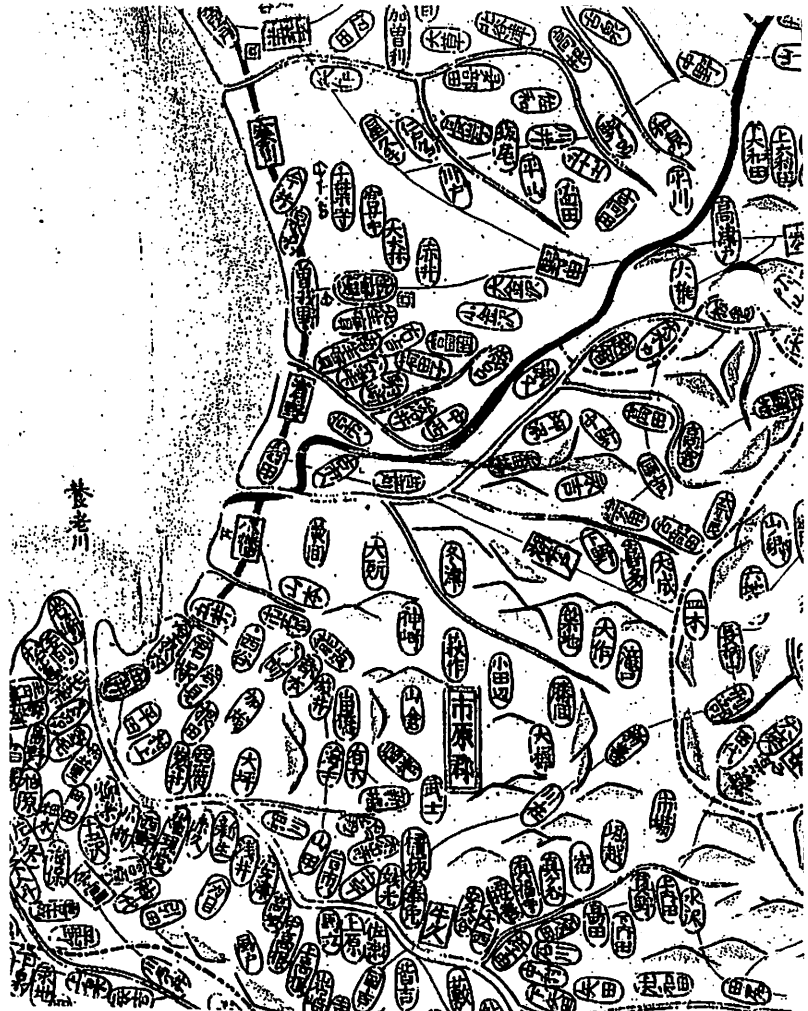
天正以前

八幡宮領 150石

村高推移=文禄3年1, 404石、天保5年1, 403石、慶応4年1, 403石



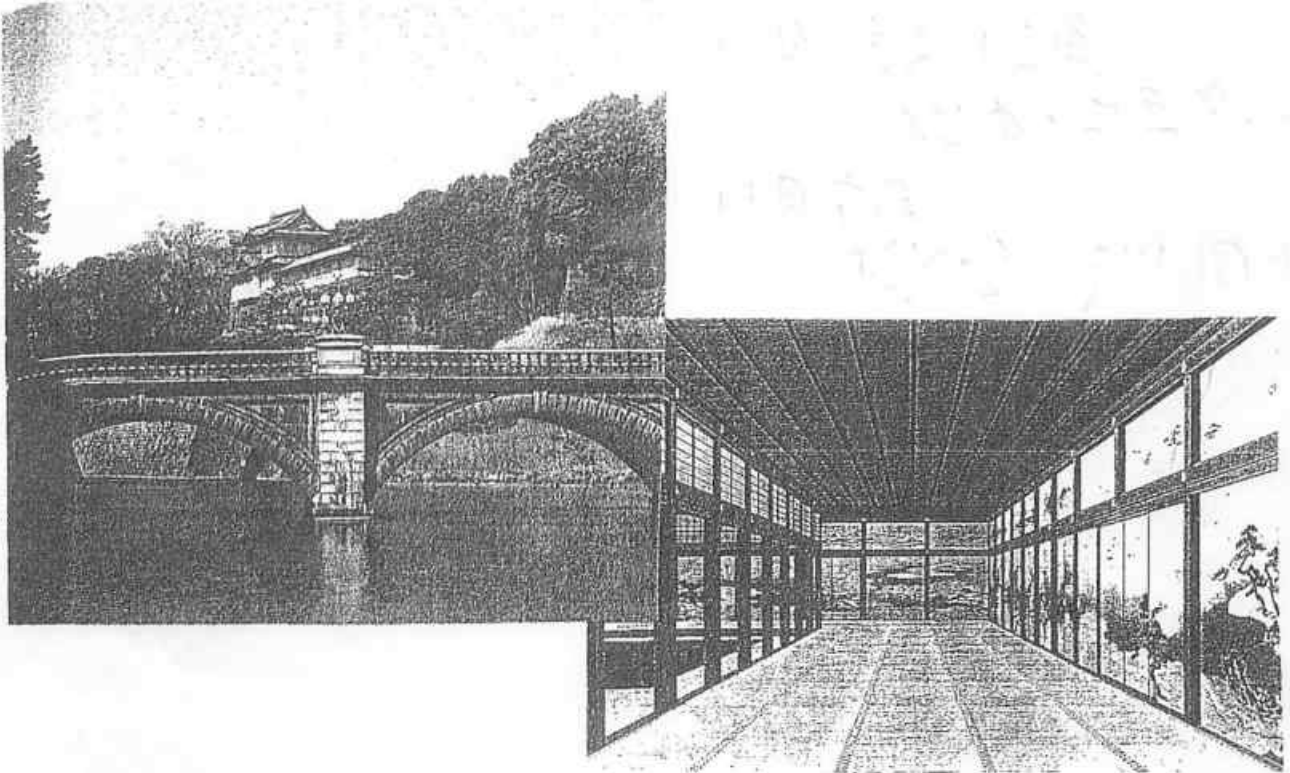
幕末の八幡村地図



江戸後期の八幡村月並

江戸時代にタイムスリップ

講師 ^史城・城跡研究 山岸 弘明先生



日	時	平成17年11月16日(水)
参	観	皇居東御苑と皇居周辺
日	程	八幡公民館集合 8:40
		出発 8:50
		↓
		皇居前着 (10:30)
		↓ 見学 10:30~15:20
		和田倉噴水→大手門→三の丸尚蔵庫→二の丸庭園→(昼食)→
		富士見やぐら→松の廊下跡→天守台→北はね橋門→北の丸第3駐
		車場
		北の丸第3駐車場発 (15:20)
		↓
		八幡公民館着 (16:45)

江戸時代にタイムスリップ

皇居東御苑と皇居周辺

八幡公民館「女性セミナー」バス研修

山岸弘明



太田道灌



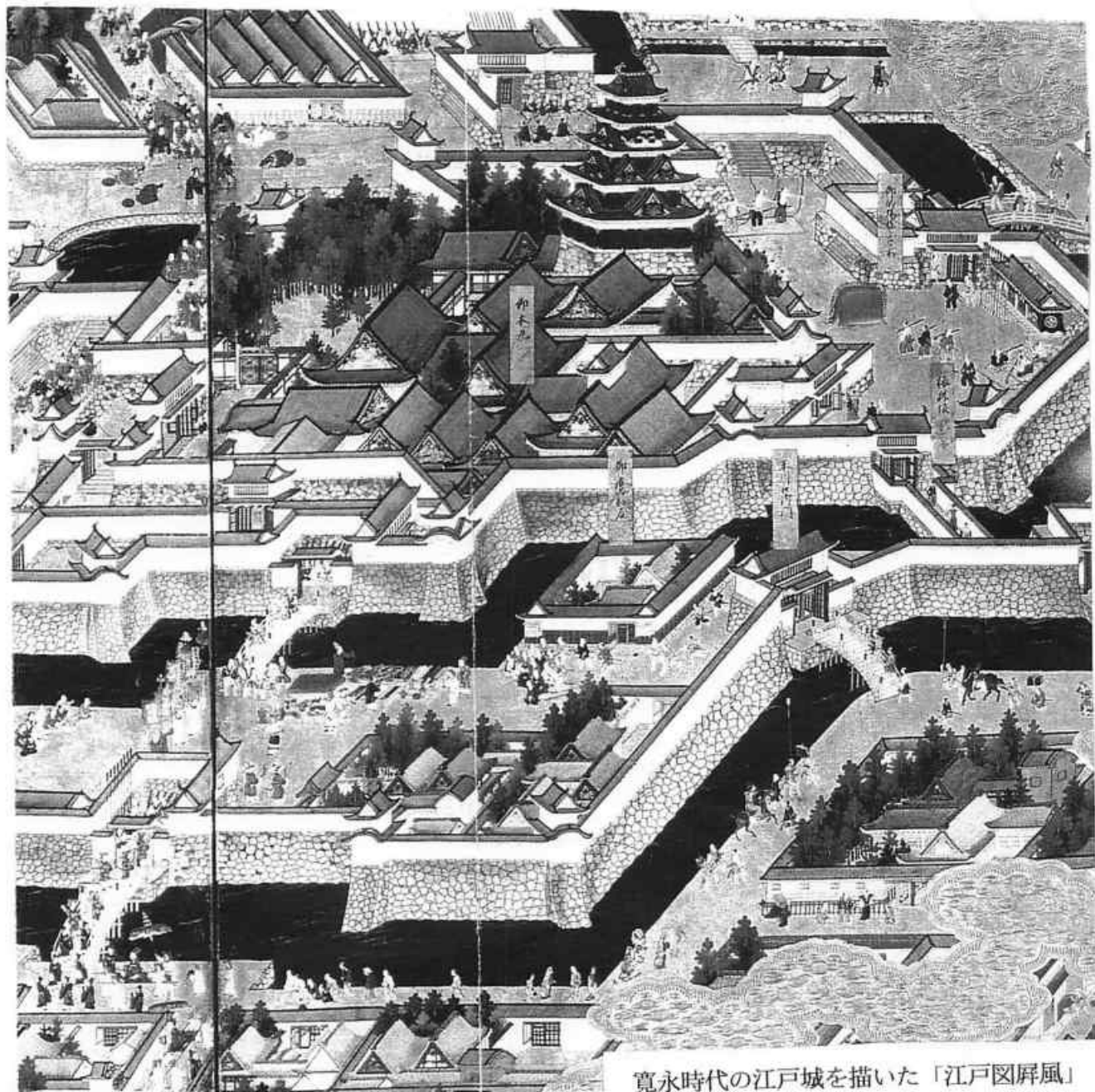
徳川家康



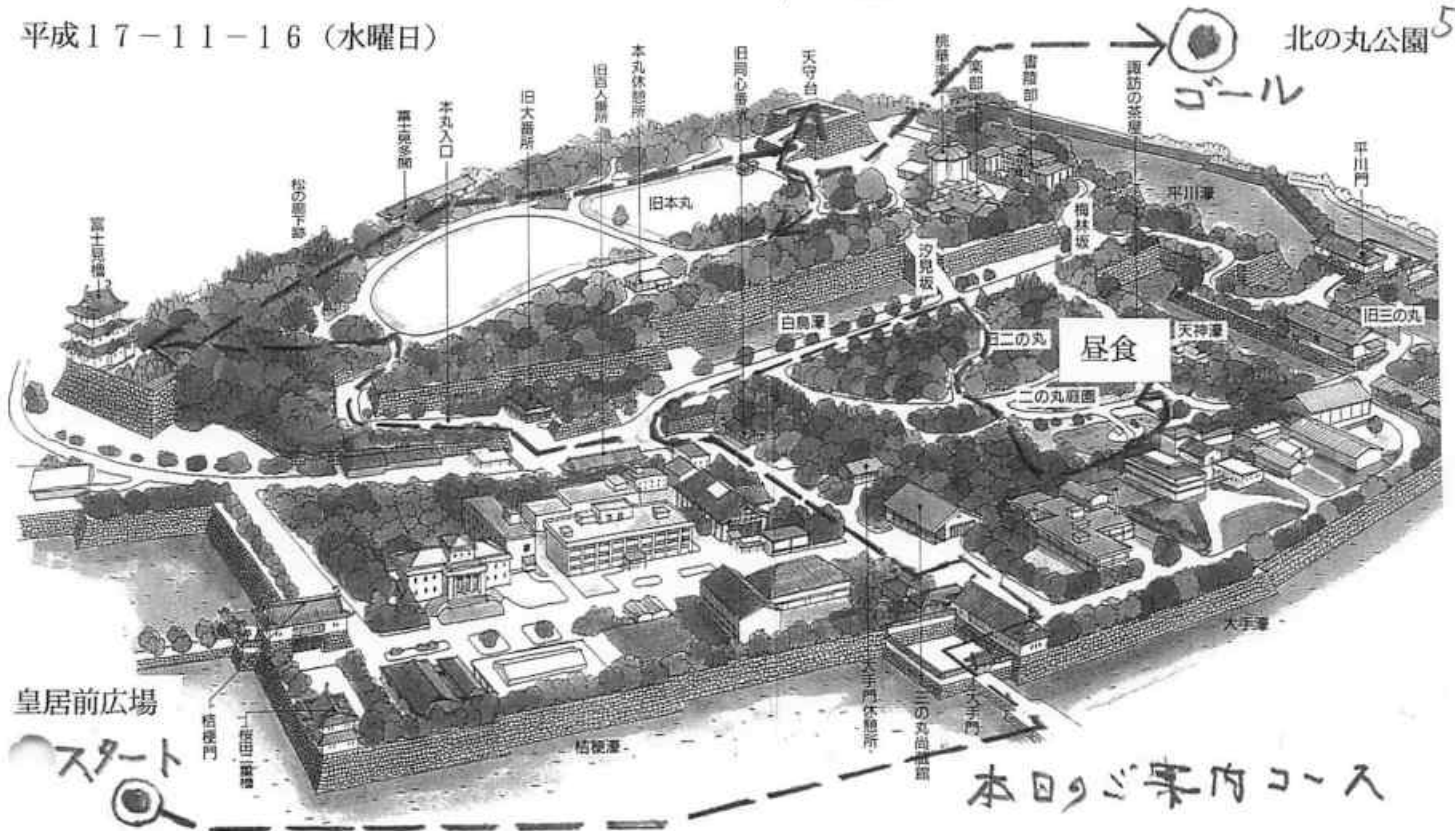
徳川秀忠



徳川家光



寛永時代の江戸城を描いた「江戸図屏風」



西の丸伏見櫓



江戸城3点セット



北の丸田安御門

本日のキーポイント

- ① 徳川家康～慶喜、15将軍が君臨した日本一の大城郭
- ② 3つの顔を持つ巨城＝厳粛の大手、戦うからめ手、柔和な西の丸
- ③ 火事との戦い、本丸7回建造、天守閣4度めは立たず
- ④ 本丸大広間は将軍権威の演出場、上段の間から諸大名を謁見
- ⑤ 将軍の使命は種(しゅ)の保存、権謀渦巻く大奥ハーレム

みどころ＝現地で詳しく解説します

- ① 皇居外苑＝皇居を遠望、二重橋は木陰、一瞬かいま見れるか
- ② 江戸城3点セット＝テレビの定番。異櫓、桔梗門、富士見櫓が並ぶ
- ③ 従者待合所＝1、15日は参勤中の全大名が集まる。登城ラッシュは？
- ④ 大手門＝高麗門、升形、渡櫓門。堅固な江戸城の守り、表の顔
- ⑤ 中の御門、書院前門＝巨石に圧倒される。大名気分の本丸めざす
- ⑥ 本丸御殿跡＝家康、秀忠、家光……歴代将軍が居住。いま洋風庭園
- ⑦ 松の大廊下跡＝元禄14年3月、ここで浅野長矩、吉良義央に刃傷
- ⑧ 天守閣跡＝総高80mダントツ日本最大。最後は台だけ、上物は作れず
- ⑨ 大奥跡＝興味深々謎多い大奥、建物と仕組みを時間限りで現地解説
- ⑩ 北はね門＝深い水濠と高石垣、からめ手は戦う城そのものだ

1) はじめに

- ① 江戸の地名=江は海、戸は入口。隅田川(旧利根川)が江戸(東京)湾にそそいだ地形から。
- ② 江戸城=徳川将軍家15代にわたる居城で江戸幕府政庁所在地。
前史=12世紀江戸重継が居館を設け、15世紀中ごろ太田道灌が築城、関東に武威を広げた。
近世(江戸時代)=天正18年(1590)徳川家康が豊臣秀吉の命で北条氏の旧領関東に転封し、江戸城を本拠とする。宿敵豊臣氏を関が原の戦いとその後の大坂の役で一掃、慶長8年(1603年)、晴れて江戸幕府を開く。家康は諸大名に手伝い普請として城下町整備を命じ、江戸城の増改築を実施、このとき本丸、2の丸、3の丸などの石垣工事と天守閣、政庁殿舎が、家光時代に総構え(外郭)を完成した。本丸周辺の主郭は10万坪、西の丸7万坪、吹上苑13万坪など、外郭は現在の千代田区全域におよぶ全国最大の城郭であったが、明暦の大火で天守閣を焼失、幕末に最後の本丸殿舎も焼いて本丸機能を西の丸に移した。
明治以降=明治元年(1868)開城、その中心部は皇居と代わって今日におよんでいる。

2) 皇居外苑(旧西の丸下)

- ① 江戸城本丸、西の丸に隣接した内郭の一部。初期は榊原康政、井伊直政、本多忠勝、大久保忠隣ら徳川幕府創設期の重臣邸が並ぶ。
- ② 江戸後期は老中、若年寄ら幕閣官邸街、就任とともに支給、退任で没収された。
- ③ 明治維新後新政府官邸街をへた明治21年宮城前広場、戦後昭和26年国民広場として開放された。

3) 江戸城3点セット=桜田巽櫓、桔梗御門、富士見櫓(現存材復元)

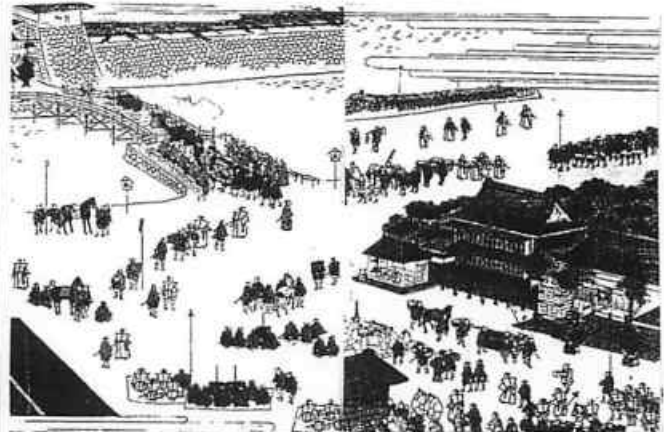
- ① 坂下御門、宮内庁、桔梗御門遠望
- ② 巽櫓=3の丸唯一の櫓。本丸南東巽の方角。もっとも江戸城を感じさせる櫓。白壁と老松の緑が内堀に映える。関東大震災で倒壊、コンクリートで復元された。
2重櫓。初重平側千鳥破風、出窓は弓鉄砲狭間、石落とし、2重飾り破風なし、狭間、屋根入母屋造り本瓦葺き、シャチ
- ③ 巽櫓、桔梗門、富士見櫓の3点セット=テレビ、映画の江戸城定番

4) 桔梗濠と周辺石垣(現存)

- ① 桔梗濠=桔梗御門↔大手御門の濠。内堀北側の終点。銀行会館の辰の口から道三濠に落とした。
- ② 石垣=屏風折れ、歪み、折れ。かつて白壁がめぐった。

5) 大手町と従者待合所

- ① 大手町=明治以降の地名で旧江戸城大手郭。江戸時代は譜代重鎮上屋敷を配した。
- ② 酒井雅楽頭屋敷跡(三井物産周辺)=譜代大名最大の名門。姫路15万石。天正18年拝領、ほぼ一貫して邸地とした。歴代藩主中、忠世、忠清、忠積が大老。忠清の時4代将軍家綱を補佐し、その専権は大手馬札前にちなんだ下馬将軍の異名で恐れられた。
- ③ 従者待合所跡=大手門前の広場は総登城日の諸大名従者待合所でもあった。
毎月1、15日、1月1日、3月3日、5月5日などの式日は参勤大名の総登城日、登城ラッシュ。順番通り登城のため大名家は町角に係員配備、合図で待て、前進を繰り返した。
- ④ 大名にしたがって城内に入れる供わずか+カゴかつぎ、草履持ちなど3の丸下乗門まで。ほかは大名家ごとに敷物で待機。広い大手御門前も諸大名の従者で埋まった。



←従者待合所

3点セ→ト



西の丸下
和田倉内



→大手門前

6) 大手御門 (現存材復元)

- ① 大手門は文字通り江戸城の正門。復元 (一部現存材) された厳めしい門構えが將軍居城の権威を物語る。升形門構造を詳しく観察しよう。
- ② 元和6年伊達政宗造宮。栄誉だが出費も莫大。黄金2,600枚、延べ42万人動員した。以降、数度の焼失をへて、江戸末期の建物は昭和20年戦災焼失、42年東御苑一般開放にあたり復元。
- ③ 土橋=江戸時代は橋台で濠水をセキ止め、中央に木橋。
- ④ 高麗門=本柱、支柱。コの字形、切妻屋根、本瓦葺き。門扉は江戸後期の現存。
- ⑤ 枳形=桜田門と違う四方石垣、正式な形。周囲の石垣、白壁。ガンギ坂、銃座。
- ⑥ シャチ=明暦3年の本物。瓦製。シャチは架空の聖獣。水に棲息して水を吹く。火除のまじない。
- ⑦ 渡櫓門=両脇に石垣。2階に渡櫓 (22×4間)。大入母屋屋根、本瓦葺き。鉄板張り大御門。大御門、巨大柱と梁などに注目。
- ⑧ 大番所跡=平日60人、登城日100人。10万石譜代大名警固。明け6つ (日の出) 開門、暮れ6つ (日没) 閉門。緊急時はガンギ坂から渡櫓門へ。
- ⑨ 内側は3の丸=3の丸御殿。綱吉生母桂昌院ら居住。現在は宮内庁病院など。

7) 皇居東御苑受付

ここからが東御苑。各自入場札を受領、出口で返却。なくさないこと。

8) 3の丸尚蔵庫と休憩所 (自由見学と小休憩)

- ① 宮内庁3の丸尚蔵庫=皇室、宮内庁所蔵宝物を定期的に公開。
- ② やまとうた — 美とこころ展開催中
やまとうたは人の心の種として、よろずの言の葉とぞなれりけり (小野道風)
本阿弥切本古今和歌集、井手玉川・大井川図屏風、二十一代集など豪華絢爛たる書画、蒔絵道具などを展示、わが国が育ててきた独自の文化の美しさを再認識。
- ③ 3の丸休憩所=トイレ、飲物、おみやげ (たべものはありません)

9) 下乗橋、大手3の門跡 (石垣現存)

- ① 3の丸から2の丸へ。かつての水濠は消滅して裸の石垣だけが残る。
- ② 天神濠、蛤濠跡、下乗橋跡=3の丸と2の丸の間の濠と木橋。
大名は下乗橋までカゴで乗り入れ以後は徒歩。カゴかつぎは3の丸の従者待合所で待機。
- ③ 大手3の門升形=高麗門、内枳形左折れ、渡櫓門。
- ④ 同心番所 (現存)=下乗橋前から移築。説明パネルの大名登城図はいい加減だがわかりやすい。
棟瓦に葵紋、軒瓦に菊紋。歴史の変化が垣間見れる。
同心は与力の下で警備などを担当した下級役人で、身分は御家人。



↓ 大手3の丸 ↑ 大手門 →



3の丸尚蔵庫 →



10) 銅門跡から本丸石垣 (石垣現存)

- ① 銅門は大手3の門とセットで、2の丸御殿の正門。門扉の銅板張りが門名に。
- ② 白鳥濠と本丸石垣=圧倒する本丸高石垣の迫力と白鳥濠。家光のとき水舞台を作る。

11) 汐見坂と梅林坂 (現存)

- ① 本丸と2の丸を結ぶ坂道。汐見坂は坂から江戸湾が望めたことから、梅林坂は太田道灌時代からの梅林に由来、汐見坂は年寄りたちが息を切らし、梅林坂は大奥女中たちの通用門でもあった。
- ② 梅林坂先に平河門、升形内に不浄門も併置、城内の犯罪者や死者などを搬出するための帶曲輪から殿中刃傷の浅野内匠頭や絵島生島事件の主犯・絵島が江戸城から追放された。

12) 2の丸御殿跡と2の丸庭園 (昼食=天候や御苑の都合で変更することがあります)

- ① 將軍後継者(世子)居城。ときに本丸焼失時の臨時本丸や別荘となったり、一部で5代將軍綱吉生母桂昌院、8代吉宗生母由利の方、13代將軍家治の正室天璋院が仮御殿とした。
- ② 表御殿、奥御殿、庭園で構成、御殿はたび重なる火災焼失で6度建造された。
- ③ 最後の2の丸御殿は慶応元年再建、2年後の慶応3年に焼け、4か月後に江戸開城となった。現在の庭園は2の丸全盛期の寛永時代を模して復元されている。池泉周辺で自由昼食。

13) 百人番所 (現存)

- ① 大手3の門の大番所。城内最大の警固ポイント。ここからは決められた人しか入れない。最後の人別改め所。長さ50mの変わった建物が寂しげだが、かつて周辺は石垣上に櫓、多間が立ち並んで登城者を威圧した。
- ② 甲賀、根来、伊賀、二十五騎組の4組、各与力20、同心100人交代勤務。

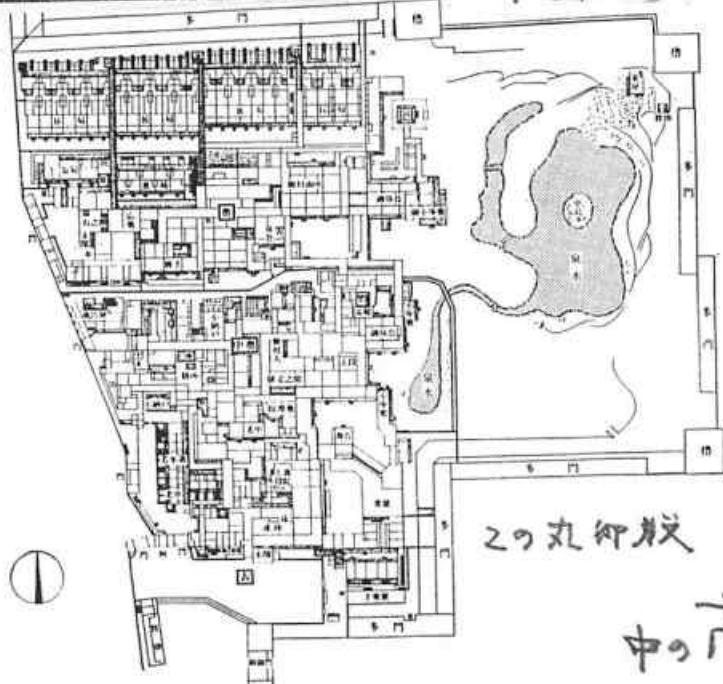
↓ 梅林坂



↓ 2の丸庭園



↑ 本丸石垣と白鳥濠

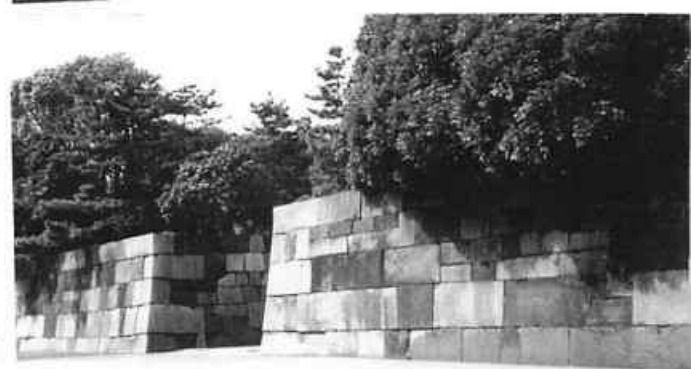


2の丸御殿

→ 中の門



← 百人番所



14) 幕府金蔵跡 (遠望)

- ① 何百万両ともいわれた幕府の大判、小判、金塊を保管。奥金蔵と2か所。江戸開城時はゼロ？小栗上野介が持ち出したとする埋蔵金伝説が各地にある。
- ② 厳重な警固体制。破られることなどありえないはずの金蔵に盗賊が入る (奥金蔵説も)。江戸後期安政2年、2人組盗賊が未使用小判1万両を盗みだす。うち4千両城外、6千両は濠へ廃棄。犯人は2年後富山で捕縛、江戸で獄門ハリツケ。

15) 中の御門跡 (石垣現存) 大番所 (現存=工事中)

- ① 巨大な石垣は2の丸の間仕切り門。江戸城主要城門唯一の形式。大番所説明パネル写真参照。
- ② 巨石にも注目。江戸城最大規模の石材。門下の石畳も当時のまま、柱穴搏 (せん) も注目。切込みハギ=精密加工した石材を積み上げる。元和以降の石組方法だが、現在、中の御門修理工事のため詳しい観察はできない。

16) 本丸石垣 (現存)

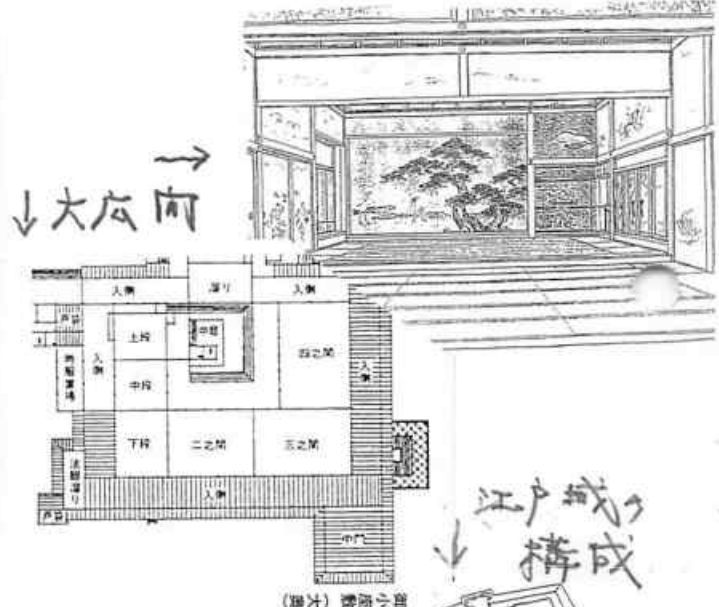
- ① 高さおよそ30mの本丸石垣が続く。慶長9~12年の第1期工事で完成。一部積み直しあり。
- ② 打ち込みハギ=あら加工した石材を積み上げ、隙間に小石を挟む。慶長~元和の石組方法野づら積み (参考)=加工しない石材を積み上げる。慶長以前の石組方法。江戸城にはない。
- ③ 算木組=コーナー部分の石組方法。長方形の大石を縦横交互に積み上げる。

17) 書院前御門跡 (中雀御門) (石垣現存)

- ① 登り坂にそって進むと江戸城最後の城門、本丸正門に出る。
- ② 登石段、高麗門、内枳形右折れ、渡櫓門 (19x4間)、御書院櫓 (2重)、書院出櫓 (2重)、続多聞櫓。古写真が当時の威容を伝える。
- ③ 火勢にあぶられ黒ずみ欠けた石垣。文久3年の本丸火災跡。
- ④ 書院番士ら出迎えの中を大名たちは玄関へ進む。

18) 本丸殿舎跡、大広間跡

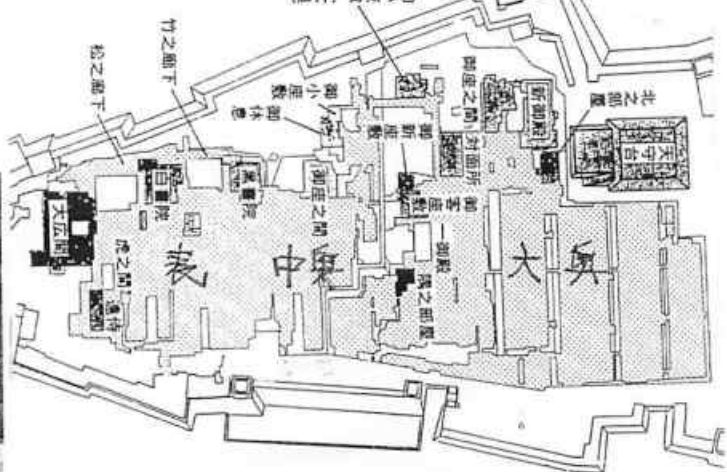
- ① 目前の広い芝生公園は本丸跡。ここに表向き、中奥、大奥3万㎡、宏壮な本丸殿舎が連なった。
- ② 本丸殿舎=江戸城の中心。初代家康から14代將軍家茂までの居城、以降西の丸へ。
 総建坪 1万1千坪 中奥 (將軍官邸) 2千坪
 表向き (政庁) 3千坪 大奥 (御台所、側室居所) 6千坪
- ③ 玄関、遠侍、台所、大広間、白書院、黒書院、中奥、大奥などを廊下で結んだ。火災起きたら全焼。5回焼失、建造は7回、主要図面ほぼ現存。毎回踏襲し変化少ない。
- ④ 弘化2年度造営経費170万両。最後の本丸御殿は文久3年焼失、予算なく再建できない。幕末5年間は西の丸仮本丸で代行。
- ⑤ 大広間跡=本丸碑。上段の間、中段の間、下段の間。権威の演出舞台でもあった。



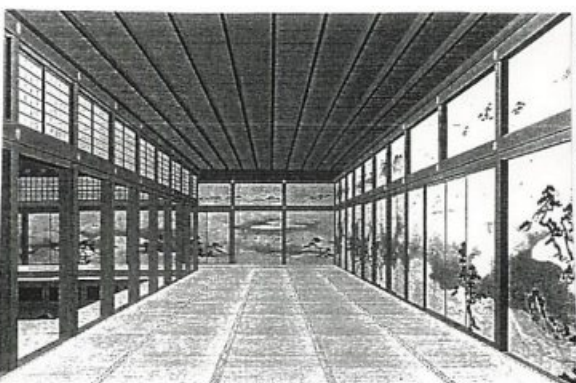
書院前内古写真

↑ 本丸御殿跡

↓ 書院前内跡



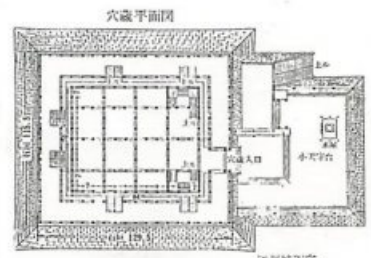
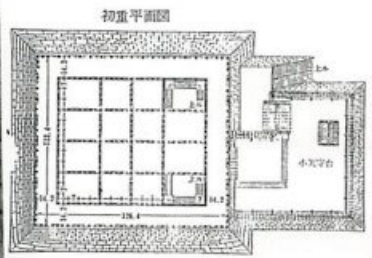
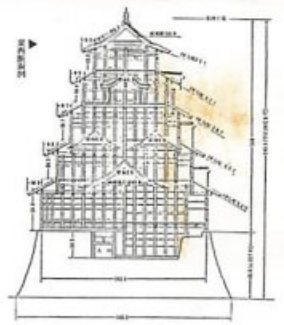
- 1 9) 富士見櫓 (一部現存材復元)
 - ① 明暦大火で天守閣焼失後の代理天守閣。歴代将軍はこの櫓に登って、富士山や江戸湾、両国の花火などを眺めた。
 - ② 江戸後期15櫓の1つ。最盛期は本丸だけで15、すべて30基もあった。
 - ③ 説明パネル写真は西の丸側櫓台下一般参賀のコースから。みえない裏側は御三階櫓のようだ。
 - ④ 慶長11年、石垣は加藤清正構築。3重櫓。維新後も残ったが関東大震災で倒壊。
- 2 0) 松の大廊下跡
 - ① 元禄14年3月14日、浅野内匠頭が吉良上野介に刃傷した元禄赤穂浪士事件の発端の地。
 - ② 大広間と白書院を結ぶ廊下。畳敷2間半巾、濡縁付き。内側は庭園、外側は三家溜の間など。襖に松の絵を描いて廊下の名前に。
 - ③ 刃傷事件=合計4件。老中井上正就、大老堀田正俊、田沼意次の子意知、いずれも即死。浅野内匠頭だけが失敗、成功していれば義士の討入りもないことになる。
- 2 1) 富士見多間 (現存) 石室 (現存)
 - ① 富士見多間=年賀の一般参賀コースから見上げる多間櫓の反対側。本丸には多間櫓が連なった。多間=内部を武器庫にした堀。緊急時は庫内から弓鉄砲を射かける。
 - ② 石室=江戸城の抜穴ともいわれるが正しくは大奥の非常倉庫。このあたりに御台所の居室、御殿向けがあった。
- 2 2) 天守閣跡、天守台 (現存)
 - ① 江戸城のシンボル天守閣跡。慶長11年徳川家康の初代天守は豊臣秀吉の大坂城をしのいで、豊臣家に好意を寄せる諸大名に将軍家の権威をみせつけた。
 - ② 江戸城3つの天守閣ともう1つの天守台 (高さに諸説がある)
 - 初代天守閣 (慶長12年) 家康 (秀忠) = 天守台20m、総高さ80m。日本最大の天守閣
 - 2代〃 (元和8年) 秀忠 = 天守台13m、総高さ70m。本丸拡大で移築
 - 3代〃 (寛永15年) 家光 = 天守台13m、総高さ64m。華麗に作り替え、明暦大火で焼失
 - 4代天守台 (明暦4年) 家綱 = 天守台のみ、天守閣建造に至らず。現存
 - ③ 最後の天守閣=5重6階、小天守。銅瓦葺き入母屋屋根シャチ、飾り破風多数。明暦元年の明暦大火で焼失、以降再建されることはなかった。
 - ④ 現存天守台=白御影石高さ12.7m。加賀前田家が構築するが、将軍家後見職松平正之の反対で中止された。



↑ 刀松の大廊下

↑ 富士見櫓

↓ 天守台



天守閣図面

江戸城天守

23) 大奥跡

- ① 江戸城をテーマとしたテレビ、映画にかかせない将軍家ハーレム。時に幕閣、諸大名を巻き込んだ後継争いが繰替えされた。深慮策謀渦巻く女の戦いの舞台でもあった。
- ② 常時500人~2,000人。経費の3分の2を消費。幕府財政を圧迫した。
御殿向き=御台所(将軍正室)居室。上段の間、休息の間、切形の間などで生活。子女も。
長局向き=側室と大奥女中居住。側室に定員、1のお部屋様、2のお部屋様……
広敷向き=大奥役人(ここだけは男)の執務所
お鈴廊下=将軍専用通路。総触れ、奥入り、文字どおり将軍以外男子禁制
- ③ 11代将軍家斉=大奥での豪華な生活を享楽、16人の側室に54人の子女を産ませた。

24) 本丸展望台など自由見学 (集合時間厳守)

- ① 梅林坂、塩見坂
- ② 本丸休憩所、展望台から2の丸と丸の内方面を遠望

25) 北はね橋御門(一部現存材復元)周辺石垣(現存)

- ① 江戸城の守り最大の見どころ。高い石垣に深い濠底、思わず息を呑む迫力。堅固、壮大重厚、権力の象徴。担当者の刻印にも注目しよう。
- ② はね橋=高麗門に引き上げの滑車金具。通常は開かずの門、緊急時に橋を架けた。

26) 旧近衛師団司令部庁舎(東京国立近代美術館工芸館=国重要文化財)

- ① 明治43年建造の国指定重要文化財。レンガ造り、2階建て、スレート屋根、ゴシック風
関東大震災や東京大空襲にもあわない。明治の代表的レンガ造り。
- ② 現在「日本のアール・ヌーヴォー1900-1923」開催中。

27) 北の丸公園

- ① 江戸時代の中城の一部で、徳川御三卿の田安、清水家御殿跡。三卿は将軍家の万一に備えた予備血統で、残る一橋家から11代将軍家斉と15代将軍慶喜が、明治維新後の16代には田安家から家達を迎えられた。
- ② 明治~昭和戦前は皇室と皇居を守る近衛師団兵営
- ③ 昭和39年東京オリンピック柔道会場として日本武道館を竣工、昭和44年北の丸公園として開放

28) 時間あれば希望者で田安御門(国重要文化財=10分くらい)

- ① 清水御門とならぶ江戸城唯二の現存建造物。江戸はじめ寛永時代建造、明治4年渡櫓門を撤去したが保存されていた旧材で再建、扉釣具に「寛永十三丙子曆九月吉日」を刻む。
- ② 普段立ち入ることのない升形裏側から江戸城門を検証する。

29) 市原めざして帰路に

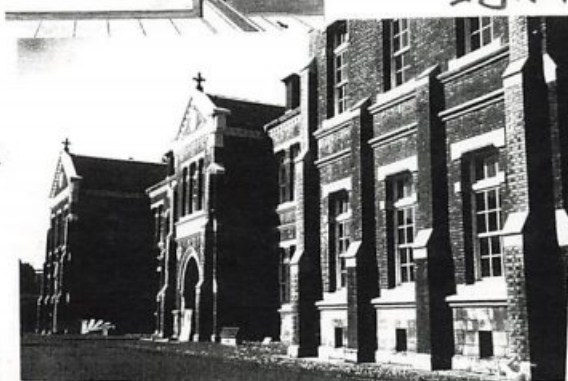
以上



北はね橋付近の守り



子女54人の子福将軍 11代家斉



旧近衛師団司令部



北の丸公園

平成 18 年度

女性セミナー

市原市立八幡公民館 (18.4.18)

1. 目的

「ゆとり」と「うるおい」のある女性としてのよりよい生活の向上を目指すとともに、新しい時代の生き方を考える。

2. 日程と内容及び講師

第1回	5月17日(水)	環境学習	(講師) 千葉県環境財団
第2回	6月21日(水)	工場見学	ライオン株式会社
第3回	7月19日(水)	時代と庭園	山岸弘明氏
第4回	9月14日(木)	笑いは宝	帝京平成大学
第5回	10月19日(木)	バス研修	山岸弘明氏
第6回	12月27日(水)	お正月の生け花	斉藤 恭子氏
第7回	1月17日(水)	気功	大野 桂子氏
第8回	3月 7日(水)	傾聴ボランティア講座	田邊昭雄氏

☆時間は、毎回午前9時30分から午前11時30分までの予定です。

バス研修は、午前8時40分から午後4時40分ごろまでの予定です。

バス研修の行き先については、後日お知らせします。

☆6月21日(水)は工場見学です。9時20分に第1会議室にお集まりください。

3. 参加費 教材費・バス研修時の見学費等は、実費を自己負担していただきます。

4. 募集 定員35名。 全日程に参加できる人。
申し込みは、窓口または電話で先着順とします。

<お願い>

やむを得ず欠席する場合は、なるべく早く当公民館 (Tel. 41-1984) へ必ずご連絡下さい。

平成18年度

女性セミナーバス研修

小石川後樂園散策

水戸黄門の心にあふれる

平成18年10月19日(木)

日程

八幡公民館(出欠確認)

集合8:40 出発8:45



北の丸第3駐車場

10:30

田安門見学

(徒歩10分) — 地下鉄2分 — (徒歩15分)

《地下鉄東西線九段下～飯田橋》

各自乗車券購入 160円



小石川後樂園(見学・昼食)

(徒歩15分) — 地下鉄2分 — (徒歩10分)

《地下鉄東西線飯田橋～九段下》

各自乗車券購入 160円



北の丸第3駐車場

15:20



八幡公民館着

16:45



八幡公民館「女性セミナー」北の丸田安御門と小石川後楽園

第1部（前編）＝江戸城と北の丸田安門

山岸弘明 平成18-7

*

- 1) はじめに（江戸のおこりと「江戸図」から）
- 2) 江戸幕府の首都・江戸城と世界最大都市江戸
- 3) 御三卿の居館、北の丸公園

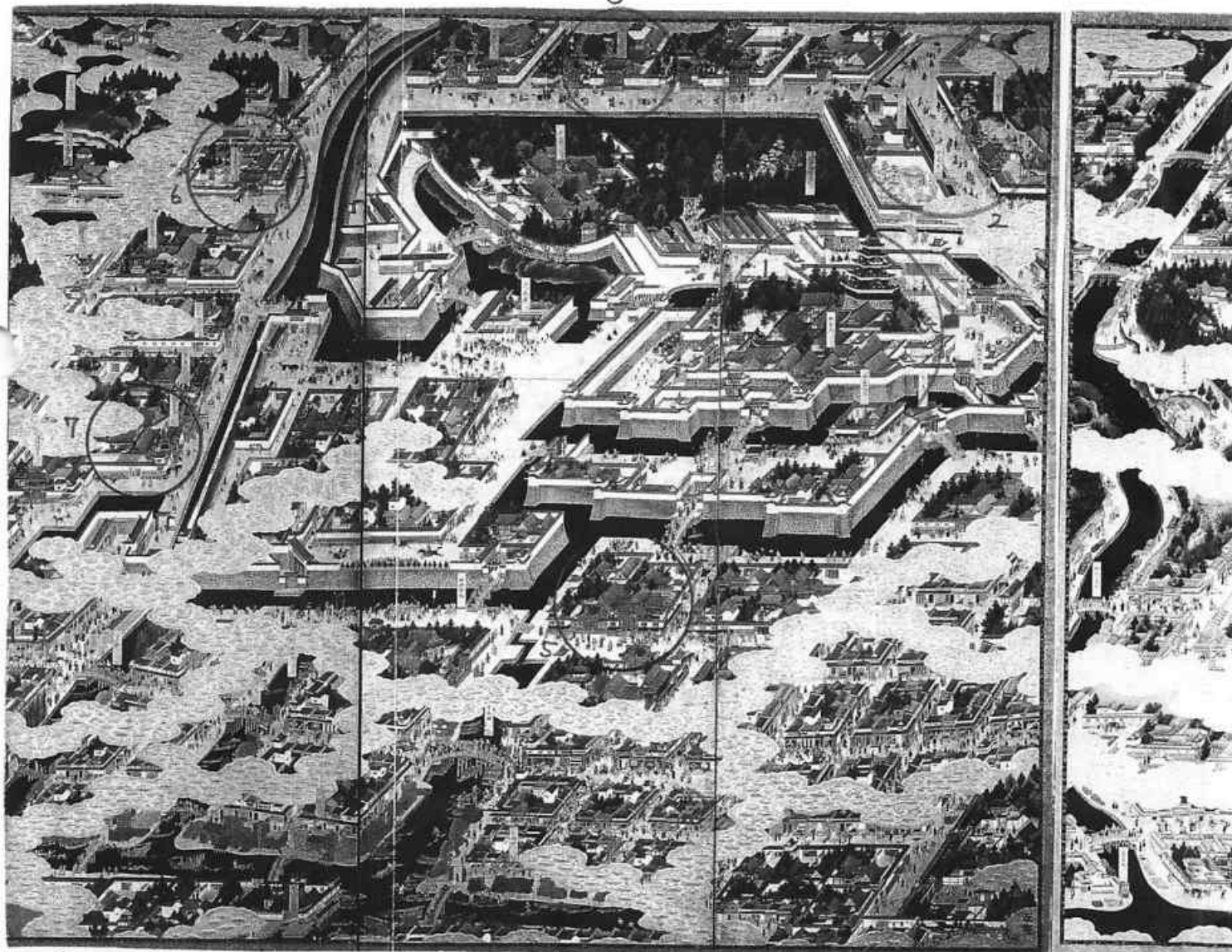
10月19日「バス研」の

第2部（後編）＝大名庭園と小石川後楽園

*

- 1) 「日本3名園」の不思議
- 2) 日本庭園の発達
- 3) 江戸大名屋敷庭園のおこり
- 4) 寛永年間の「江戸図屏風」にみる豪華絢爛の大名屋敷庭園
- 5) 水戸頼房が作り、将軍家光が支援した最初の小石川後楽園
- 6) 2代水戸黄門光圀が中国趣味に大改造
- 7) その後の後楽園と江戸後期の水戸藩江戸屋敷
- 8) 後楽園への誘い（見どころ）

3



左頁4~6曲

江戸図屏風（部分）

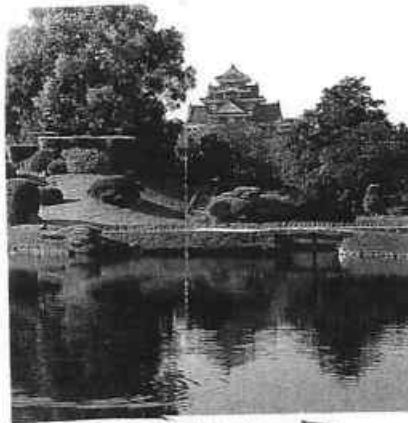
右頁1曲

19

予告編です



小石川後樂園



岡山後樂園



金沢兼六園



六義園



水戸偕楽園

- ①江戸城本丸
- ②北の丸、右が徳川忠長邸
- ③水戸頼房邸
- ④水戸頼房下屋敷（後樂園）
- ⑤松平忠昌（忠輝）邸
- ⑥加藤清正（井伊）邸
- ⑦伊達政宗邸

第1部 (前編) *江戸城と北の丸田安門

1) はじめに (江戸のおこりと「江戸図」から)

- ① 「江戸」の江は海、戸は入り口、隅田川 (旧利根川) が江戸湾にそそいだ地形をいっている。
- ② はじめ半農半漁の寒村、12世紀江戸重継が江戸館を、15世紀中ごろ太田道灌が江戸城を築いた。戦国時代は小田原後北条氏の支城となったが、天正18年 (1590) 徳川家康が入城、慶長5年 (1600) の関が原の合戦勝利で天下人となり8年江戸で幕府を開いた。
- ③ 江戸図屏風 (国宝) = 江戸前期寛永 (1630ころ) 3代家光時代、江戸城と大名屋敷がさん然と輝く。佐倉歴博蔵。金地著色 (極彩色)。6曲1双、左隻 (せき) に江戸城、北の丸、右隻1扇に後樂園。
- ④ 江戸図鑑網目 = 江戸がもっとも華やかだった元禄4年 (1691) 5代将軍綱吉時代の江戸図
江戸大絵図 = 文政11年 (1828) 江戸後期11代将軍家斉時代の江戸図

2) 江戸幕府の首都・江戸城と世界最大都市江戸

- ① 江戸城は江戸幕府の首都 (政庁所在地) で徳川将軍家居城 わが国の城郭建築の結晶、最大規模、ダントツ日本一の巨城
- ② 本丸、2の丸、3の丸 (現在の皇居東御苑) 9万坪 = 0.3km²
西の丸 (皇居) 7万坪 = 0.2km²
北の丸 (北の丸公園) 1.8万坪 = 0.6km²
西の丸下 (皇居外苑)、大手前郭 (大手町、一ツ橋1丁目)、丸の内郭 (丸の内、有楽町)、外郭 (上記を除く千代田区) } 千代田区合計 1.2 km²
総郭 (中央区全域) } 中央区合計 1.0 km²
- ③ 江戸後期人口100万人 (武士除く)、パリ、ロンドンをしのぐ世界第一の都市であった。

3) 御三卿の居館、北の丸公園

- ① 北の丸公園の前身は平将門を祭神とした田安明神社 (現築土明神) で田安台といった。家康入府直後、慶長12年工事で江戸城の一部となった。
- ② はじめ北ビクニ町で、2代将軍秀忠の長女で大坂落城の時奇跡的に救出された千姫、家康の側室のお勝 (英勝院)、薄幸の3代家光正室孝子、大奥創設者の春日局ら徳川家ゆかりの女性たち、家光弟で自害を命じられた駿河大納言忠長らが住んだ。
- ③ 後期は徳川御三卿10万石の田安家、清水家となる。8代将軍吉宗と9代家重の2男から始まる。将軍家の予備血統で、将軍家に血統が途絶えた時御三卿が継いだ。

4) 田安御門 (国重要文化財) とその周辺

- ① 太田道灌時代からの古橋、家康入城後の元和6年に木橋、寛永6年越前50万石の松平忠昌 (姉崎2万石をへて越前家へ) が升形門とした。明治はじめ撤去、保管した旧材で当時のまま復元。
- ② 豪壮な内内升形櫓門。現地ではツーしか知らないまる秘ルートでからめ手守りを解説。大御門門扉でみんなて「寛永十三年」銘を探す。
- ③ 田安門両側の田安堀、牛が淵を臨む。なだらかな土塁斜面と深い水濠、緑いっぱいのコントラストに九段会館 (旧軍人会館) のレンガ造りが映える。正面に靖国神社、堀脇の九段坂公園に品川弥二郎、大山巖銅像、明治の灯台などを横目に東京メトロ「九段坂下駅」へ。



徳川家康

九段の →
牛が淵と九段会館



← 北の丸公園
→ 田安御門



第2部(後編) *大名庭園と小石川後楽園

1) 「日本3名園」の不思議

- ① 金沢兼六園、水戸偕楽園、岡山後楽園を「日本(天下の)3名園」という。
 - (1)兼六園=加賀前田100万石、金沢城石川門に連続する高台に立地、ことじ燈籠と曲水、成巽閣など。
 - (2)偕楽園=水戸徳川35万石、外郭として作庭、3000本の梅園と好文亭、隣接する千波湖の景観が雄大。
 - (3)後楽園=岡山池田31万石、江戸時代の「御後園」を明治に改名、パノラマの池泉景観が圧倒する。
- ② 素朴な疑問=京都の名園がなくすべてが地方の大名庭園から選ばれている。
明治以降の呼称で由来や根拠もいまいち。「日本3景」をまねた3都市のPR作戦か。
- ③ 「3名園」同等あるいは同等以上の大名庭園は全国各地にある。

(1)全国の著名大名庭園

将軍家=京都二条城二の丸庭園、名古屋徳川家=二の丸庭園、彦根井伊家=玄宮(げんきゅう)園、紀伊徳川家=西の丸庭園、高松松平家=栗林(りつりん)公園、熊本細川家=水前寺成趣(じょうじゅ)園など

(2)東京の著名大名庭園

水戸徳川家=小石川後楽園、柳沢吉保=六義(りくぎ)園、将軍家=浜離宮恩賜庭園、小田原大久保家、紀伊徳川家=旧芝恩賜公園、ほかに新宿御苑、東大三四郎池、清澄公園など。

(3)「小石川後楽園」は歴史、見どころとも「3名園」に劣ることはない。

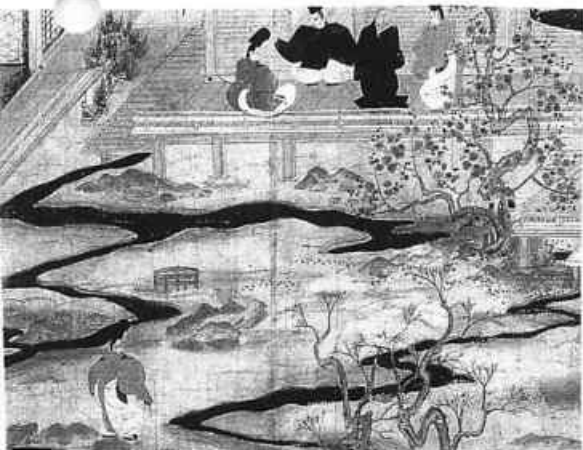
2) 日本庭園の発達

① 平安時代、京都雅びの世界で発達した庭園

- (1)庭園は住居や寺社の周囲に樹木を配し、人工的に造成された景観をいう。
- (2)飛鳥時代(7世紀)にはじまり、奈良時代(8世紀前半)に定着したとされる。当初は屋敷地に池を掘って岩を組み、白砂を敷きつめた程度であったが、8世紀中期には各地に離宮や山荘が築かれ次第に完成していく。
- (3)8世紀末、都を京都に移す平安時代が始まると寝殿造り建築様式が出現、庭園も一大飛躍を遂げる。中島や築山を築き、やり水を流し、石を立てて滝を落とす。貴族の雅びな遊びの舞台としての「大和絵風」庭園文化が一気に花開く。

② 禅宗文化が生んだ枯山水から華麗な大名庭園へ

- (1)鎌倉時代(12世紀~)、室町時代(14世紀~)にかけて武士の時代が始まり、貴族文化が崩壊すると庭園もまた大きく変革する。剛健簡素の気風は枯淡な象徴的庭園を生み出し、禅宗寺院を中心とした枯山水が出現、庭は回遊式から座観へ。龍安寺石庭などの名園が続々と誕生している。
- (2)安土桃山時代と続く江戸時代(17世紀~)は禅宗庭園が後退、城郭建築の発達にともなった大名庭園は豪華絢爛、その特徴は池泉回遊式と茶庭の混合加味にある。桂離宮もこの時代に生まれた。
- (3)庭園史上は室町期を最盛期に江戸時代の大名庭園を質の低下とする。専門的評価はともあれ今日残された大名庭園の華麗さを見る者を感動させずにはおかない。



龍安寺石庭



3) 江戸大名屋敷庭園のおこり

① 徳川家康の江戸入り

(1)天正18年8月1日、豊臣秀吉の転封命令で徳川家康が江戸城に入城。

家康が未開発の江戸を選んだことには諸説あるが、後背地に武蔵野の原野を抱えた立地が後の巨大都市・江戸の発展、広大な大名屋敷誕生の基盤となる。

(2)その第1は京都や鎌倉では不可能であったスケールの大きな土地が与えられたこと、

第2は江戸が山坂の多い自然景観に恵まれたこと、

第3は水なし、石なしの不利が海水取り入れという新しい庭園技術を生んだことなどである。

② 参勤交代と江戸屋敷

(1)慶長5年(1600)関が原の合戦で家康が勝利すると、諸大名は二心のないことを証明するため競って人質(証人)を差し出し、幕府は屋敷地を与えて江戸屋敷が建設されるようになる。

(2)人質と江戸屋敷の第1号は加賀前田利家の妻、2代利長の生母お松。関が原合戦直前、江戸屋敷は千代田区大手町の大手町ファーストスクエア一角であった。

(3)3代将軍家光の寛永12年(1635)参勤交代が制度化され、大名は妻子を江戸に残し、原則として1年ごと(関東は半年ごと)に江戸と国元を往復することになった。

(4)大名屋敷は当初1か所、明暦大火後の市街拡大で後期は3か所以上になった。

上屋敷=江戸城に近い公式屋敷で幕府や諸藩との外交窓口。藩主と人質の正室が居住。

中屋敷=少し離れた予備屋敷。通常隠居屋敷または嫡子住居だが上屋敷万一の時代行した。

下屋敷=やや郊外の別荘。広大な庭園を作った。

蔵屋敷=江戸湾または隅田川近くの蔵地。国元から運ばれる米や物産などを収納した。

(5)拝領は名ばかり。幕府は屋敷地を与え、建物は拝領された大名が作ったが頻繁に入り替えされた。それぞれ庭園を作り総数は1000以上にも達した。

4) 寛永年間の「江戸図屏風」にみる豪華絢爛の大名屋敷庭園

① 天下城江戸城本丸御殿、5重の天守閣そびえる。残念ながら明暦大火で焼失

(1)伊達政宗、加藤清正、黒田長政、上杉景勝、毛利輝元ら名だたる外様大名邸が続く。

御三家尾張義直、紀伊頼宣、水戸頼房邸、徳川一門の松平忠輝(松平忠昌)邸が並ぶ。

(2)黄金に輝く御成り門=屋根切妻造り、軒唐破風、檜皮(ひわだ)葺き

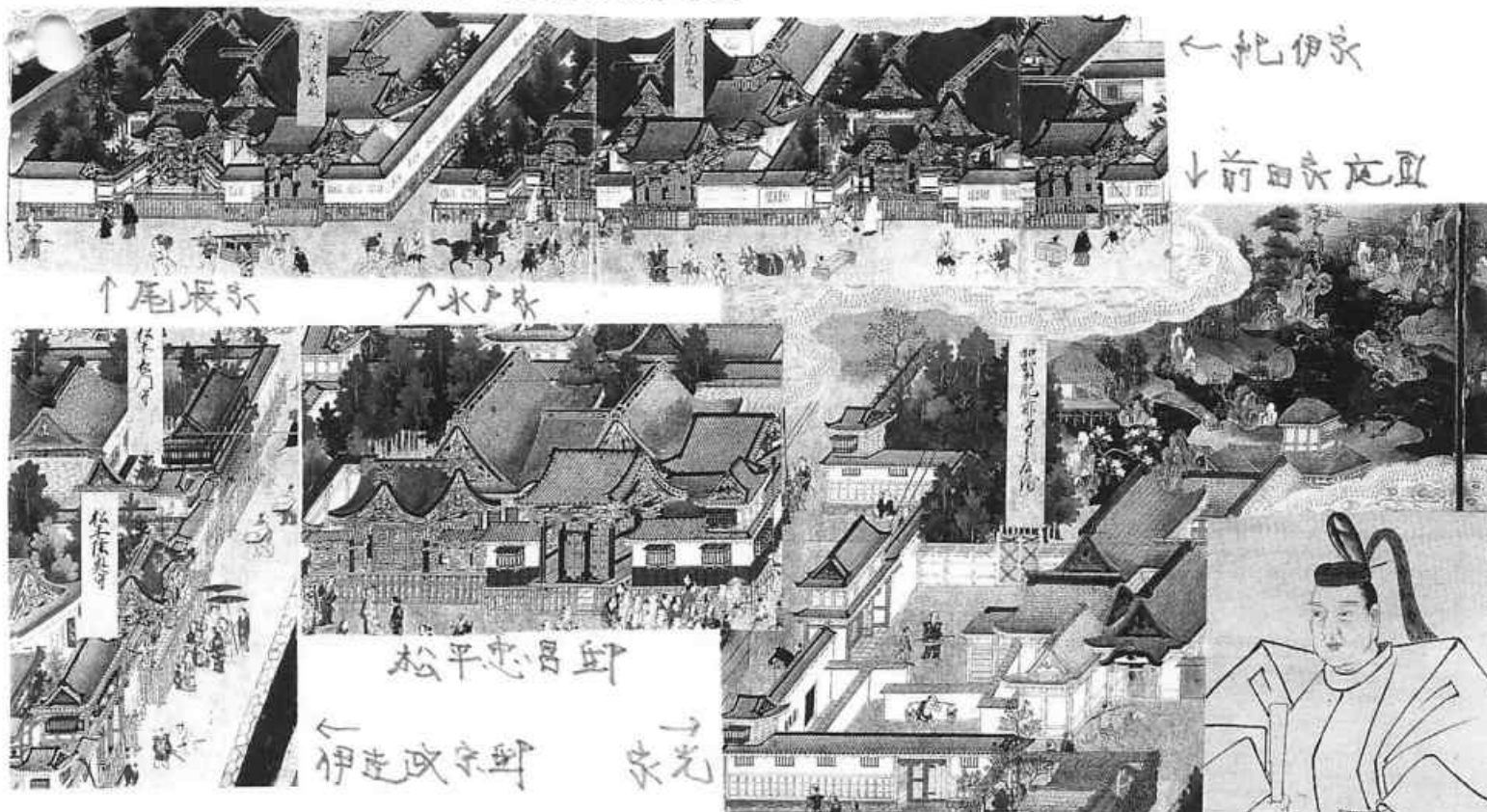
豪壮な表門=外様大名は瓦葺き櫓門、御三家は大棟門(四脚門)

檜皮葺きの玄関、遠侍、広間は大工技術の粋を尽くした華麗な彫刻が飾る。

(3)屋敷周囲を石垣+白壁塀(長屋)で囲み、四隅に角櫓を乗せる。一国一城の主を意識した城造り。

② 遊楽の下屋敷をみると

(1)水戸下屋敷(後の小石川後楽園)=初代頼房作庭当時の様子を伝える。仲が良かった将軍家光好みとされる。大きな池泉を中心に奇岩、滝や反橋も見える。家光の御成りが繰り返され檜皮葺き2階造り数寄屋から庭と池を一望したことだろう。



- (2)加賀前田100石下屋敷（後の上屋敷）＝赤門で有名な東大の前身。慶長年間拝領、寛永6年の将軍家光御成りに備えて3年間かけて整備されたという。池（三四郎池）を中心に奇岩や滝、ここにも数寄屋や亭（ちん）が幽玄の世界を造り出している。いまでも当時の雰囲気が残っている。
- (3)明暦3年（1657）の大火は江戸城と周辺屋敷、市中の半分以上を焼失、死者は10万人を数える。被害に懲りた幕府は江戸市街を拡大して大名家に広大な下屋敷を与える。豪華御殿の建設は禁止されるが江戸庭園文化が花開くことになる。

5) 水戸頼房が作り、将軍家光が支援した最初の小石川後楽園

① 御三家水戸徳川家の初代は家康の11男頼房

(1)頼房は慶長8年家康の側室お万を母に伏見城で誕生、6才で水戸城主20万石となり、のち30万石。本人は江戸に常住して藩政を国元の家老や奉行に任せ、代々藩主もこれにならったので「天下の副将軍」とも。寛文元年没59才。水戸城近くの瑞竜山代々墓地に眠る。

(2)実母お万の方は大多喜城主正木家の娘。家康側室となり紀伊頼宣と頼房を産む。池上本門寺葬。
 (3)養母は同じ家康側室のお勝、太田道灌の子孫で勝浦城「布たらし」伝説の持ち主。家康の信頼が絶大、大坂の陣では大坂方と和議交渉にあたった。鎌倉で英勝寺を創建、絢爛たる御霊屋がある。

② 元和4年（1618）兄の将軍秀忠から吹上御庭屋敷（前出）およそ3千坪を拝領。明暦3年大火まで。

③ 寛永6年（1629）、加えて小石川に下屋敷地（現在地）7万6千坪を拝領

(1)頼房は山水や庭園に関心が深く、自然立地に恵まれた本妙寺、吉祥寺一帯を所望、家光はこの2寺を丸山と駒込に移転した。

(2)頼房と家光は同年代で親しく、庭園造りに精通した家光が援助した。

大猷公（家光）伊豆その他海国より巨石を運んで補助したまう（水戸紀年）

家光は工事中にも現地を視察、完成後に御成りを繰り返したとされる。

(3)造園は京都の公卿で庭造り第一人者・徳大寺左兵衛。変化に富んだ自然地形を最大限に活用、神田上水道を関口から分水して庭内を迂回させた。家光の力がなければ実現できない芸当であった。

6) 2代水戸黄門光圀が中国趣味に大改造

① 水戸徳川光圀＝寛永5年頼房3男に誕生。生母は側室久子。将軍家光の1字を貰ってははじめ光国。6才の時兄頼重を差し置いて世子、寛文元年から30年在位、元禄3年家督を兄頼重の子、綱条（つなえだ）に譲って太田の西山に隠居。元禄13年没、73才、おくり名義公。

② 「大日本史」を編纂、全国から学者を招聘した。後陽成天皇の孫を妻に迎えたこともあって朝廷尊崇の念が厚く、領内視察に力を注いだことが「水戸黄門漫遊記」になった。

③ 漫遊記のほぼすべてがフィクションだが、延宝2年（1674）大日本史編纂資料収集の途次、八幡宿に来訪。村田川を舟橋で渡り、飯香岡八幡宮を参拝して梅林に記念植樹、梅園いまはない。

④ 光圀は中国趣味が強く、明から亡命した朱舜水を招いて後楽園を中国風に改める。円月橋を架け、中国文人たちの憧れの景勝地・西湖の堤を写し、「土はまさに天下の憂いに先だって憂い、天下の楽しみに遅れて楽しむ」を『岳陽楼記』から引用して後楽園とした。

⑤ 光圀の中国趣味庭園は他の藩主の人気を呼び、新しい手法として定着することになった。



頼房当時、後楽園

↑ 後期、屋敷図

← 水戸光圀

7) その後の後楽園と江戸後期の水戸藩江戸屋敷

① 5代将軍綱吉生母桂昌院の往訪に備えて大改造

- (1)元禄15年(1702)来園。桂昌院は将軍家光の側室お玉といい、八百屋の娘から従一位、日本一の出世女性として知られる。
- (2)76才の高齢を気づかう柳沢吉保のアドバイスで歩行に支障ありそうな大岩と奇岩をことごとく撤去。

② 享保年間にも眺望のじゃまとして大木700本を伐採、大泉水の石組みを崩した。

- (3) 水戸徳川家は10代慶篤、11代昭武のとき明治維新。明治2年(1869)新政府が没収、兵部省所管とする。兵器製造所として取り壊しが検討されたが名園を惜しむ陸軍卿山県有朋が反対、園を整備して明治天皇の行幸の休憩所とした。以後外国要人の迎賓施設として活用、大正12年史跡名勝指定、昭和13年市民公園として一般公開された。

④ 幕末期の水戸藩江戸屋敷

- (1)上屋敷101,891坪＝文京区後楽1、春日1、2丁目、後楽園、東京ドーム、遊園地、中央大学
- (2)中屋敷54,200坪＝文京区弥生1、2丁目、東京大学の一部
- (3)蔵屋敷23,110坪＝墨田区向島1丁目、隅田公園
石揚場＝2,000坪＝墨田区千歳1丁目、1の橋際
抱え屋敷＝12,704坪+4,749坪＝新宿区西早稲田1丁目、早稲田大学裏
- (4)上屋敷が広大で庭園を広くとれたので下屋敷は作らなかった。

8) 後楽園への誘い(見どころ)

- ① 中国や日本の名勝を随所に取り入れた池泉回遊式大名庭園
池泉回遊庭園＝中央に作られた大泉水を回りながら移り変わる水辺の景色を楽しむ
- ② その構成は海、川、山、野の4景から成る。*印＝とくにすばらしい景観ポイント
 - (1)川の景(西門左側の河川の景色)＝
西湖の堤* (中国景勝地)、渡月橋と大堰川* (京都嵐山、沢渡り*)、音羽滝
 - (2)山の景(河の景に続く山中の景色)＝小廬山* (中国)、円月橋* (水面で円に写る)
 - (3)野の景(山の景に続く東北側の田園風景)
 - (4)海の景(中島を中心とした大泉水周辺の景色、池は海を表す)＝池泉*を巡る。
白糸の滝*、溪流の沢渡り*、木曾山、紅葉林からの蓬萊島*、徳大寺石*の景観
- ③ 隣接する内庭*は藩主居室(寝室、書院など)の庭、本来はここから唐門を通してプロローグの木曾山に入った。
- ④ 詳しくは10月の本番で現地解説します。お楽しみにどうぞ。

以上



白糸の滝



沢渡り



大泉水

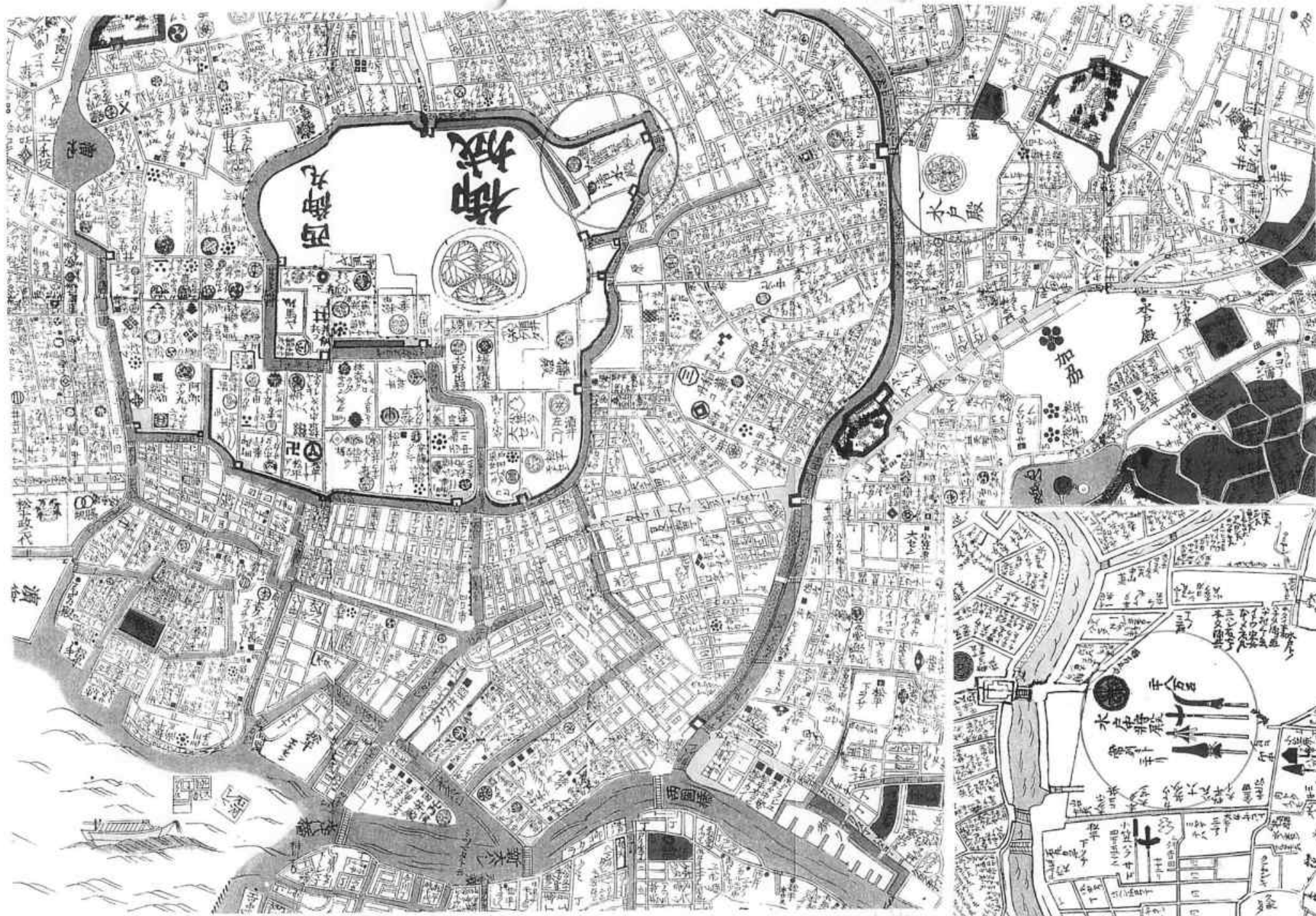


→ 円月橋

後楽園案内図

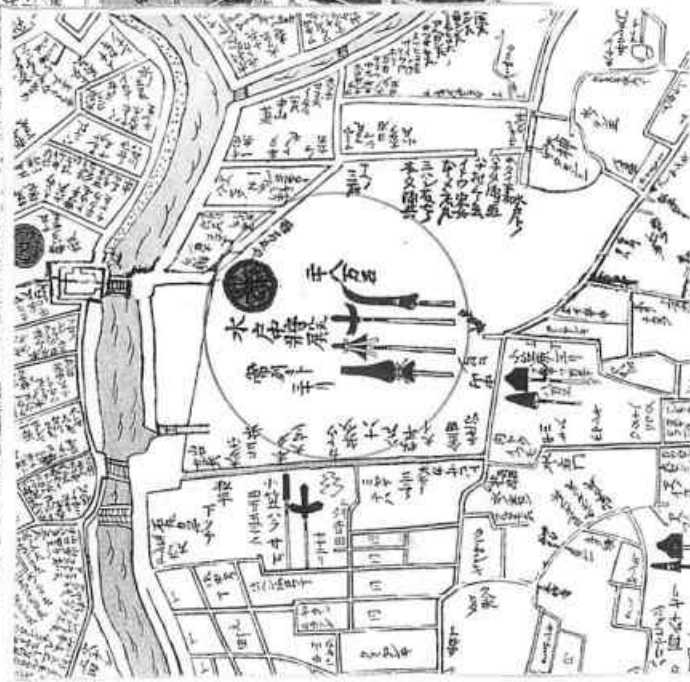


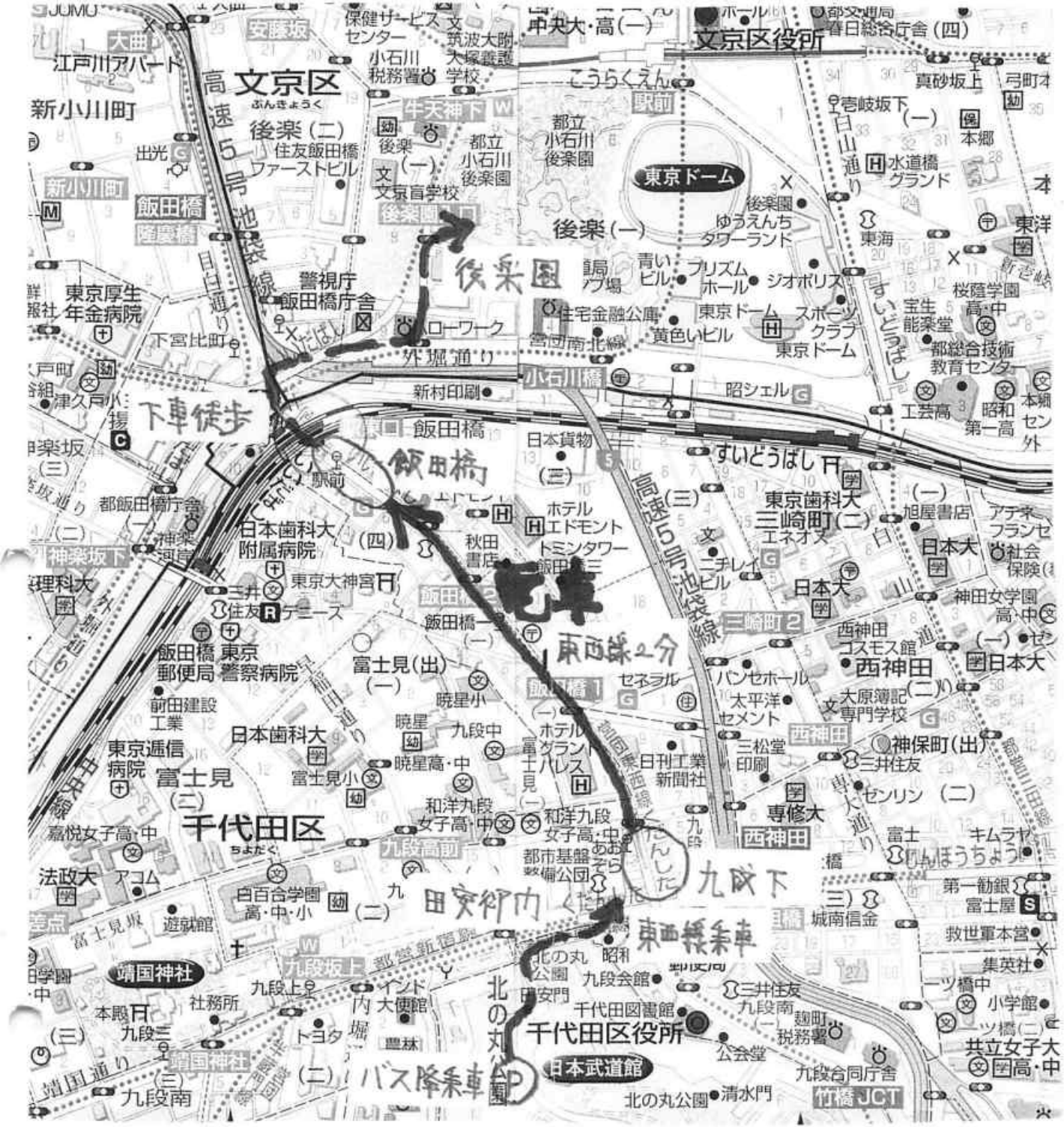
内庭 →



↑ 文化8年(1811)の江戸図

元禄6年(1693)の水戸野





江戸城田安河内



小石川後楽園

平成17年度

〔女性セミナー〕バス研修のご案内

江戸時代にタイムスリップ

日時 平成17年11月16日(水)
(午前8時40分～午後4時45分)

場所 皇居東御苑と皇居周辺

日程 八幡公民館集合 8:40

出欠確認 健康観察

出発 8:50



皇居前着 (10:30)



見学

10:30～15:20 外濠川
講師による説明(昼食時間をとります。)

北の丸第3駐車場発 (15:20)



八幡公民館着 (16:45)

※皇居東御苑と皇居周辺の見学コースについては、講師と検討中です。お知らせは、当日のバスの中で行います。

※天候により見学場所の変更もあります。(東京国立近代美術館他)

この場合、入館料が必要になります。

講師 山岸 弘明氏

交通機関 市原市役所研修用大型バス 1台

持ち物 弁当(飲み物) 天候により雨具

申し込み 10月19日(水)の女性セミナー講座終了以降、申込書に記入しお申し込みください。参加できない方もそのむねお知らせください。(41-1984)
締切日 平成17年10月27日(木)

◎受講生の参加人数により受講生以外の方も参加できます。申込書に記入しお申し込みください。先着順で、締切日は上記です。参加できるかどうかは、11月2日までに連絡します。

15-

八幡公民館「女性セミナー」

バス研修会＝「江戸城田安御門と小石川後樂園を歩く」ご案内資料

山岸弘明 平成18-10-19 (木曜日)

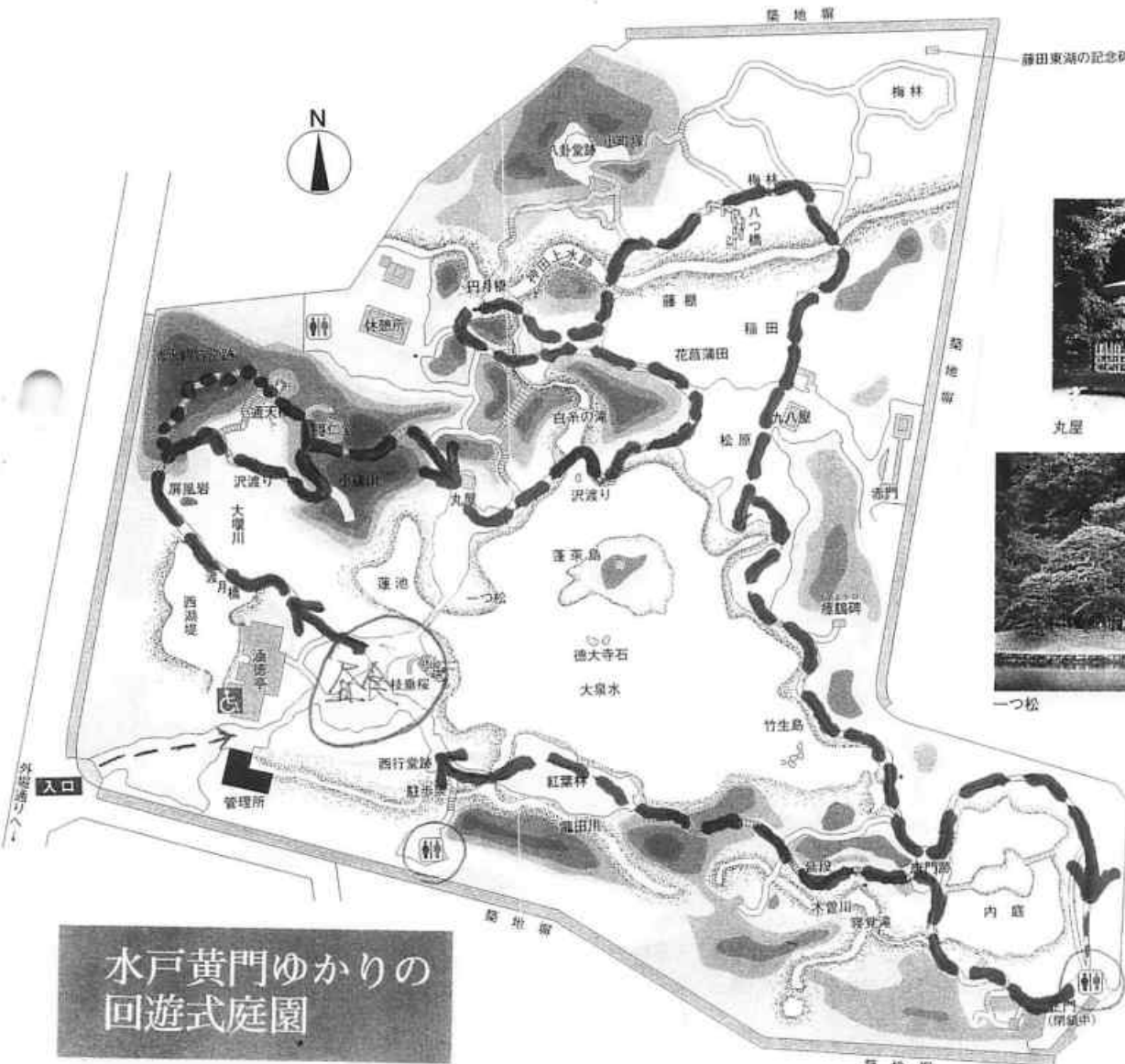
きょうのキーポイント

江戸城田安御門（江戸城門）

- ① 升形＝石垣や土塁で囲んだ防御のための四角い空間
 - ② 右折れ＝攻撃しにくいよう升形で右折させる
 - ③ 渡櫓門＝両脇の石垣に渡櫓を架けた2階建ての門
- 小石川後樂園（大名庭園）
- ① 池泉回遊＝中心の池を回り移り変わる景観を楽しむ
 - ② 写し＝日本や中国の名勝を採り入れる
 - ③ 中島＝池に変化をつけるために作られた小島
 - ④ 沢渡り＝溪谷や磯瀬をとび石を伝って渡る
 - ⑤ 枯山水＝水を使わず石で滝や流れを表現した庭



- 所在地 〒112-0004 文京区後楽1-6-6
- 問合せ先 ☎3811-3015 小石川後楽園管理所
- 交通 都営地下鉄大江戸線飯田橋駅下車 徒歩2分
JR総武線 飯田橋駅下車 徒歩約8分
地下鉄東西線・有楽町線・南北線 飯田橋駅下車 徒歩約8分
地下鉄丸の内線・南北線 後楽園駅下車 徒歩約8分



丸屋



一つ松

水戸黄門ゆかりの
回遊式庭園

八幡公民館「女性セミナー」バス研修会ご案内資料

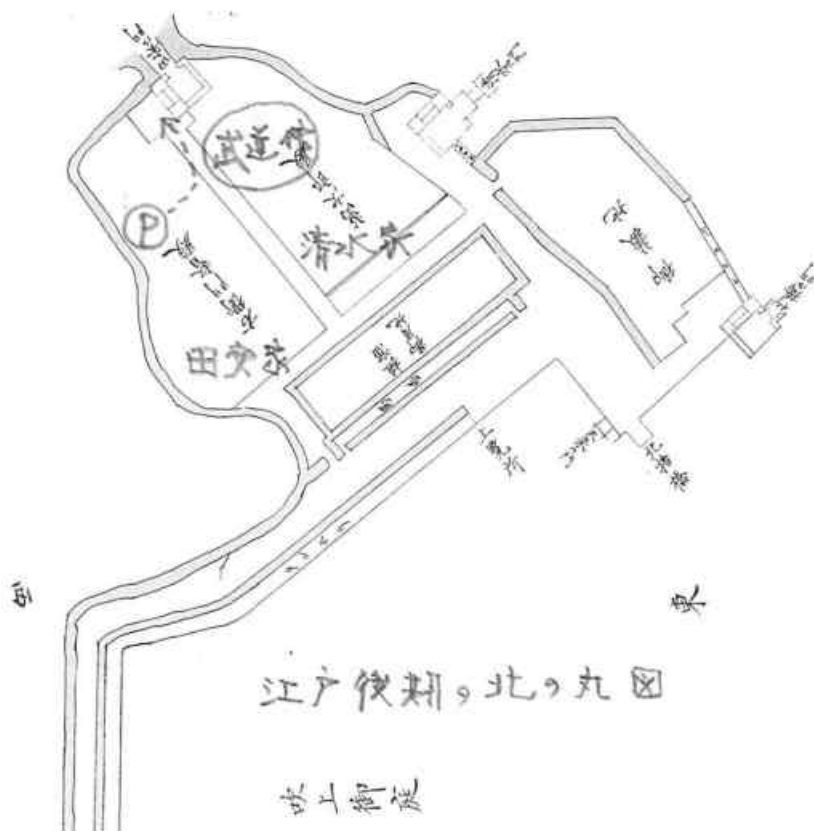
江戸城田安御門

1) 北の丸公園で下車、江戸城御三卿邸いま武道館

- ① 北の丸は江戸幕府政庁・江戸城内郭の1つで本丸の北側に位置する。
- ② 天正18年(1590)徳川家康江戸入り、江戸開府直後、慶長12年(1607)の第1期築城工事で、九段との間にあった小川を堀下げ、土塁と石垣を築いて江戸城に組み入れた。
- ③ 御三卿田安家10万石上屋敷(北の丸の西半分=13,841坪)
8代将軍吉宗、紀伊時代の2男宗武を初代とする。享保元年父吉宗の将軍就任にしたがって江戸城に入る。普通長男以外は養子だが、将軍を継いだ兄家重が病弱、心配した吉宗が補佐役として御三卿を作り、御三家をさしおいて将軍家が途切れた時の予備血統とした。右衛門督、権中将。2代に子なく将軍一族からの養子が続く。幕末の慶頼は13代将軍家定、14代家茂を後見、明治維新期の当主家達が鳥羽伏見の戦いに敗れた15代将軍慶喜を継いで静岡70万石となった。
- ④ 北の丸屋敷は享保18年宗武が拝領。明治元年まで。幕末文久3年、江戸城本丸を焼失、たまたま西の丸、2の丸、3の丸もなく、将軍家茂が仮本丸とした。
田安家下屋敷は箱崎13,076坪、四谷大木戸9,253+X、下戸塚7,507坪、蔵屋敷深川高橋8,496坪
- ⑤ 御三卿清水家10万石上屋敷(北の丸の東半分=12,987坪)
9代家重2男重好からはじまる。最後は将軍慶喜の実弟昭武、明治維新、江戸城開城の時、先代将軍家茂御台所の皇女和宮が大奥から移って仮住まいした。
下屋敷は下戸塚7,000坪+X、蔵屋敷は蠣殻町4,000坪
- ⑥ 明治維新後、天皇の親衛隊=近衛師団に。昭和20年終戦前夜、徹底抗戦を主張する青年将校らがNHKを襲撃して天皇の玉音盤奪還を企てるが果たせず、翌8月15日「終戦宣言」が全国に流れた。
- ⑦ 昭和39年東京オリンピック開催。柔道会場として法隆寺夢殿をイメージした武道館を立てる。
猪熊、岡野らが金メダル。しかしエース神永はオランダ・ヘーシングに敗れた。

2) 重要文化財=田安御門で江戸城の堅固さをまのあたりに

- ① 田安御門は江戸城北の丸御三卿田安家正門。清水門(清水家正門)とともに国指定重文。
- ② 創建不詳、寛永6年升形門に。明治維新後の関東大震災で大破、渡櫓を焼失、昭和38年復元。
- ③ ま正面に渡櫓門(1の門)、豪壮建築が圧倒。屋根大入母屋造り、本瓦葺き、シャチ瓦が乗る。両脇石垣に注目。巨石は伊豆東海岸から石船で。打ち込みハギ、コーナーは算木積み。石垣をまたいで渡櫓。2階は緊急時の射場、武者(格子)窓が開く。1階は通路、大御門、くぐり。見どころは飾り金具、太い主柱と梁。



- ④ 石垣上の弥生神社（警視庁関係殉職者）へ。
田安御門を俯瞰、牛が淵、土塁、石垣、大いちょう。厳しい江戸城の守りを体感。
- ⑤ 升形＝周囲を石垣で囲まれた空間。攻め入れれば周囲から弓、鉄砲の嵐が。
- ⑥ がんぎ坂＝緊急時に守備兵士が駆け上がる。狭間（ざま）と銃座が並ぶ。
- ⑦ 高麗門（2の門）＝明暦大火も免れた江戸城最古の現存建造物。
扉釣具銘＝寛永十三丙子暦九月吉日、九州豊後国住人、御石火矢大工、渡辺石見守康直
石火矢大工は大砲職人、泰平の世にその技術を買われたものだろうか。

3) お花見で有名な千鳥が淵

- ① 田安門西側の水濠を千鳥が淵という。千鳥が羽を広げた形をしている。
水源はかつて地下湧き水、近年都市のコンクリート化で枯渇、循環水＋。
- ② 千鳥が淵戦没者墓苑、周辺はお花見名所、水濠沿いの散策コースでもある。
- ③ 深い水濠と高い土塁。右にのびる白壁塀も国指定重要文化財。
はちまき土居（上に石垣）、水面下は水叩きで石垣といわない。

4) 東京を代表する名坂＝九段坂と靖国神社

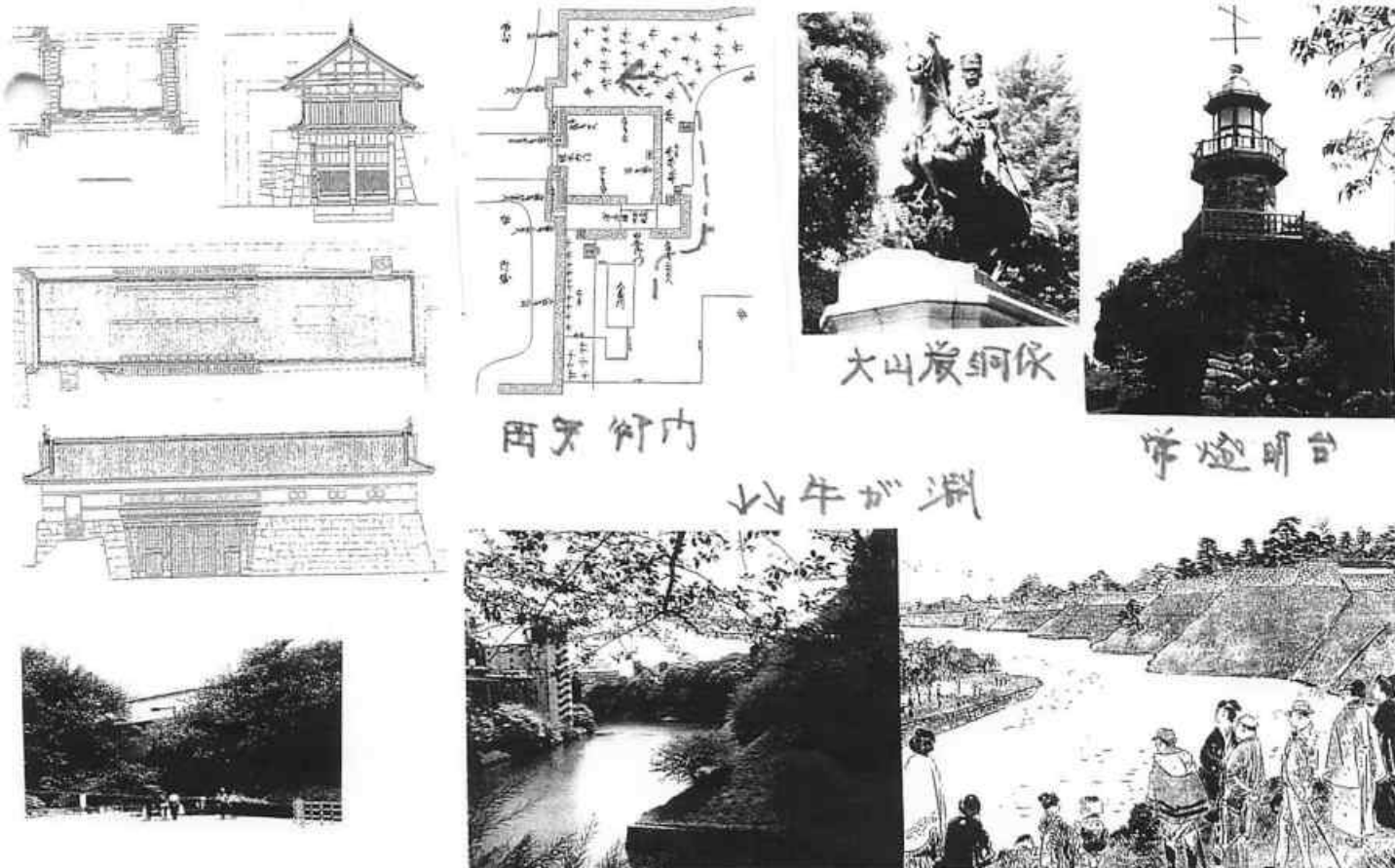
- ① 九段坂＝九段2丁目、靖国神社の大鳥居から坂下まないた橋までの400mの坂。
江戸は山坂ばかり、三宅坂とならぶ江戸東京の名坂。
- ② 正面が靖国神社。明治2年鳥羽伏見から函館戦争までの戦没者慰霊のため創建、以後国事ででなくなった兵士に広げた。太平洋戦争のA級戦犯も合祀、歴代首相の参拝で物議をかます。桜の名所、東京の「開花基準樹」でも知られる。
- ③ 小公園に大山巖元帥騎馬像。明治元勳の一人で初代陸軍大臣。薩摩藩出身。日清、日露戦争に勝利。
- ④ 品川弥二郎銅像。長州出身の維新功臣。薩長連合と倒幕に奔走、新政府で内務大臣などを勤めた。
- ⑤ 明治4年建造の常灯明台。靖国神社の灯明台だが品川や房総の船が灯台代わりに。

5) 九段会館の赤レンガと緑、牛が淵の景観にみとれる

- ① 田安門から清水門までの水濠を牛が淵という。むかし銭荷を引いた牛が落ちたことに由来する。
- ② 赤いれんが造りは九段会館で、戦中の軍人会館。緑いっぱい土塁とのコントラストが絶妙。
- ③ 隣の「昭和館」は昭和の歴史を伝える。有料。今回は立ち寄らない。
ここは「蕃所調所」跡で、江戸後期の林請西藩上屋敷跡でも。

6) はぐれたら大変。「九段下駅」（160円）から営団東西線で「飯田橋駅」へ移動

- ① 「九段下駅」②番口から地下ホームへ。先頭車両乗車。はぐれないよう友だちとのおしゃべりも控えめ、わずか2分、次の「飯田橋駅」下車。JR飯田橋駅から地上へ。
- ② JR線は江戸城外堀、線路から南側が江戸城内で北側は城外。外側を徒歩10分、後樂園をめざす。



小石川後楽園

- 7) 西門から団体入園 (65才以上120円、未満240円)、まずはお弁当から
- ① 入り口広場で昼食解散。45分間。この広場が正面大泉水左端の石橋を渡った一つ松、丸屋周辺で。弁当持参しなかった方は売店で販売 (600円)。しかし数わずか、ご注意ください。
 - ② 集合はトイレをすまして時間厳守。
- 8) 国の特別史跡、特別名勝＝小石川後楽園へようこそ (ひとことPR)
- ① 3代将軍家光と水戸光圀ゆかり。江戸大名庭園を代表する御三家＝水戸徳川家江戸上屋敷庭園。「日本 (天下の) 3名園」水戸偕楽園と入れ替えたいような名園。東京によくぞ残った深山幽谷、四季折々の景観、紅葉と桜の季節がもっとも華やか。
 - ② 大泉水を中心にした池泉回遊式庭園 (築山泉水庭とも)。光圀の中国趣味を反映、随所に中国の風物を探り入れる。江戸大名庭園で流行。
 - ③ 園名は「天下の憂いに先だって憂い、天下の楽しみに遅れて楽しむ」から (中国書はんちゅうえん)
 - ④ 園は「海」「河」「山」「野」の4つの景色で構成されている。
 - ⑤ 正面「小廬 (しょうろ) 山」中国の景勝地ろ山の写し、大名庭園は写しのオンパレード。正確な復元でなくイメージ。ろ山は江西省の北端にそびえる世界遺産。奇岩秀峰が林立し、山麓に湖水が広がる古くからの名勝。ここではおかめ笹が覆う明るくておおらかな山景になっている。横目に第1ステージ「河の景」へ。
- 9) 「河の景」からスタート。みどころは「西湖の堤」、楽しい「大い川の沢渡り」
- ① 最初に「大堰 (おおい) 川と渡月 (とげつ) 橋」。古くから紅葉と桜の名勝として知られる京都嵐山々麓の清流・大い川と渡月橋の写し。橋名は月が渡るさまに似ているところから亀山天皇が命名した。
 - ② 「西湖の堤」、中国の代表的名勝。「天に極楽あり、地に杭州あり」と称えられた風光明媚な西湖の美しさは何ものにも代えがたいという。面積6km²、対岸へ3km、堤と橋が繋ぐ。ここでは切石積みみの石堤、中央にそり橋。川景に巧みに溶け込んでみごと。芝離宮庭園にもある。
 - ③ 「屏風岩と玉石の州浜」護岸の変化もポイント。
 - ④ 奥の「音羽の滝」の水音に耳を傾けながら「大い川の沢渡り」、人気スポット。この先「山の景」けやきやかえでがうっそう。幽谷の雰囲気漂う。安全第一、あわてて落ちこちないように一步一步足元しっかりと。



水戸光圀



朱後水



昼食のツ松周辺



得仁堂



本物の西湖

↓ 沢渡りを楽しむ

中国3山の写し小石川



西湖の堤 ↓



10) 「山の景」は深山幽谷の世界。半円が水に写って「円月橋」に

- ① 「山の景」は登ったり下ったり、若干の山坂がある。76才の桂昌院も通ったコース、距離は短い元気にチャレンジしよう。
- ② スタートはおかめ笹の小道。正面をみた「小ろ山」の反対側、山裾を進む。
- ③ 山上に水戸光圀ゆかりの「得仁堂」。昭和20年の東京大空襲も免れた後楽園最古の建物。屋根方形造り、ひわだ葺き、堂内には光圀が心服した「伯夷しゅく齋像」を安置する。
- ④ 「通天橋」はまっかなそり橋。紅葉のころ周辺がまっかに色づく。
- ⑤ いったん山から平地へ。再び大泉水回り「丸屋」、わびた田舎の茶屋のたたずまいだ。
- ⑥ 「白糸の滝」と「沢渡り」は後楽園最大の景観ポイント。千条の白糸が流れるようにみえることから。こちらは角ばった自然石を配している。微妙な変化が新鮮。滝前の景色をみながらゆっくり。
- ⑦ 「円月橋」。見どころの1つ。半円に作った橋の形が水に映ると円形に見えるという技法。8代將軍吉宗の御成りで、江戸城にも作らせようとしたが真円にならなかったというエピソードも。

11) 神田上水の流れもさわやかな「野の景」

- ① 神田上水跡＝後楽園大泉水の水源。水戸頼房作庭の時、將軍家光がわざわざ神田上水を関口で分水して庭水を引かせた。いまは水道水の循環という。
- ② やつ橋＝八枚の板を組み合わせて作った木橋。
- ③ 周辺は花しょうぶ、梅林、かたつばきなど。はたして10月は？
- ④ 田端（たんぼ）＝光圀が養子綱条の夫人に農民の苦労もわかるよう稲の作り方を実習させた。
- ⑤ 「九八屋」は酒亭。「昼は九分、夜は八分にすべし」から。

12) 大名庭園の中心は池泉、「海の景」を演出する

- ① 再び池泉（大泉水）に出る。ここは海に見立てられている。池泉回遊式庭園は中心にすえられた池泉をめぐるながら移り変わる景色を楽しむ。池には中島や岩島を築き、入り江や護岸に変化をこらし、灯籠や自然石を置いて樹木や花を植える。
- ② 中島は「蓬萊島」といい中国伝説の島。仙人が住み不老不死の霊草が生える。蓬萊島は島と先端の岩山からなり、石橋で繋いでいる。岸辺、護岸の変化、雪見灯籠がみえる。
- ③ 舟着き場がある。いまの庭園は鑑賞用だが本来は遊び場。歴代藩主は親しい友だちを招き、側室たちと舟遊びに興じた。
- ④ 進んで岩島の「竹生島」、琵琶湖北部の名勝の写し。
- ⑤ 大泉水をおよそ半周して「内庭」に出る。



白糸の滝



円月橋

↓九八屋



大い川



通天橋



←梅園

1 3) 「内庭」は後楽園とひと味違ったムードの独立した大名庭園だ

- ① 「小石川後楽園」はかつての徳川水戸藩邸のおよそ8分の1程度にすぎない。「内庭」の築地塀から先に藩主が居住した豪壮な御殿群が連なっている。「内庭」はその一部、玄関からほど近い藩主私邸部分、上屋敷書院の庭園で後楽園と違う独立した大名庭園にとらえた方がわかりやすい。その特徴は後楽園にくらべ明るく解放感があふれる。このことが後楽園のプロローグにあたる「木曾路」を引き立たせる役割を兼ねている。
- ② 中央に大きな池泉、中島に両側から石の「そり橋」がかかる。いろどりに枝ぶりの松。
- ③ 大正時代まで「後楽園」を隔てた唐門跡。焼失前を掲出の古写真で偲ぶ。本来はここがスタート点。思い直して「木曾路」へと第1歩。

1 4) プロローグはうっそうとした「木曾路」からはじまる

- ① まずは深山に「ねざめの滝」音。内庭をオーバーフローした池水を「木曾川」に落とす。
- ② 左手に樹木の生い茂る「木曾山」、右手の「木曾川」溪流のせせらぎが心地よい。
- ③ 細い石で舗装されたのべ段(石たたみ)を進む。「小石川後楽園パンフレット」表紙の風景。

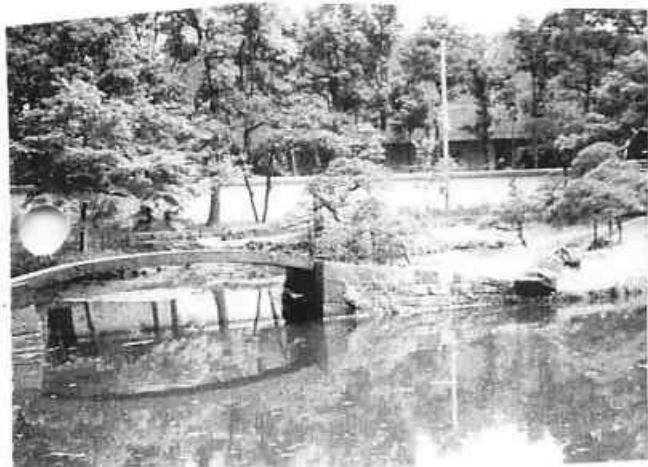
1 5) 一番の見どころ「徳大寺石」、紅葉はさらによし

- ① 景石(けいせき)＝景色が切り替わる境の石をいう。うっそうとしたプロローグの空間から、一瞬広びろとした「大泉水」が飛び込む。目をみはる景観の変化が庭園散策の醍醐味といえる。
- ② 改めて「蓬萊島」を望む。島全体が亀の形で先端の大きな鏡石が頭。この庭を作った徳大寺左兵衛の名をとって「徳大寺石」という。
- ③ あたり一帯はもみじ林、紅葉の季節さらによし、後楽園最大の見どころとされる。
- ④ しばらく小休止解散。集合はトイレをすまして時間厳守。

1 6) 北の丸駐車場へUターン

- ① 往路を逆走、東西線「飯田橋」から(1駅160円)「九段下」へ。九段下駅の出口は⑥番、往路(②番)と少し違う所に出る。5分ほどで朝降車した北の丸公園のバス駐車場へ、一路八幡公民館をめざす。
- ② はぐれるとみんなが迷惑します。自分勝手な行動は控えましょう。また、進行にご協力をお願いします。
- ③ きょうのバス研修会はいかがでしたか。またお会いできる日を楽しみにしています。

以上



内庭



唐門跡写真

大泉水↓

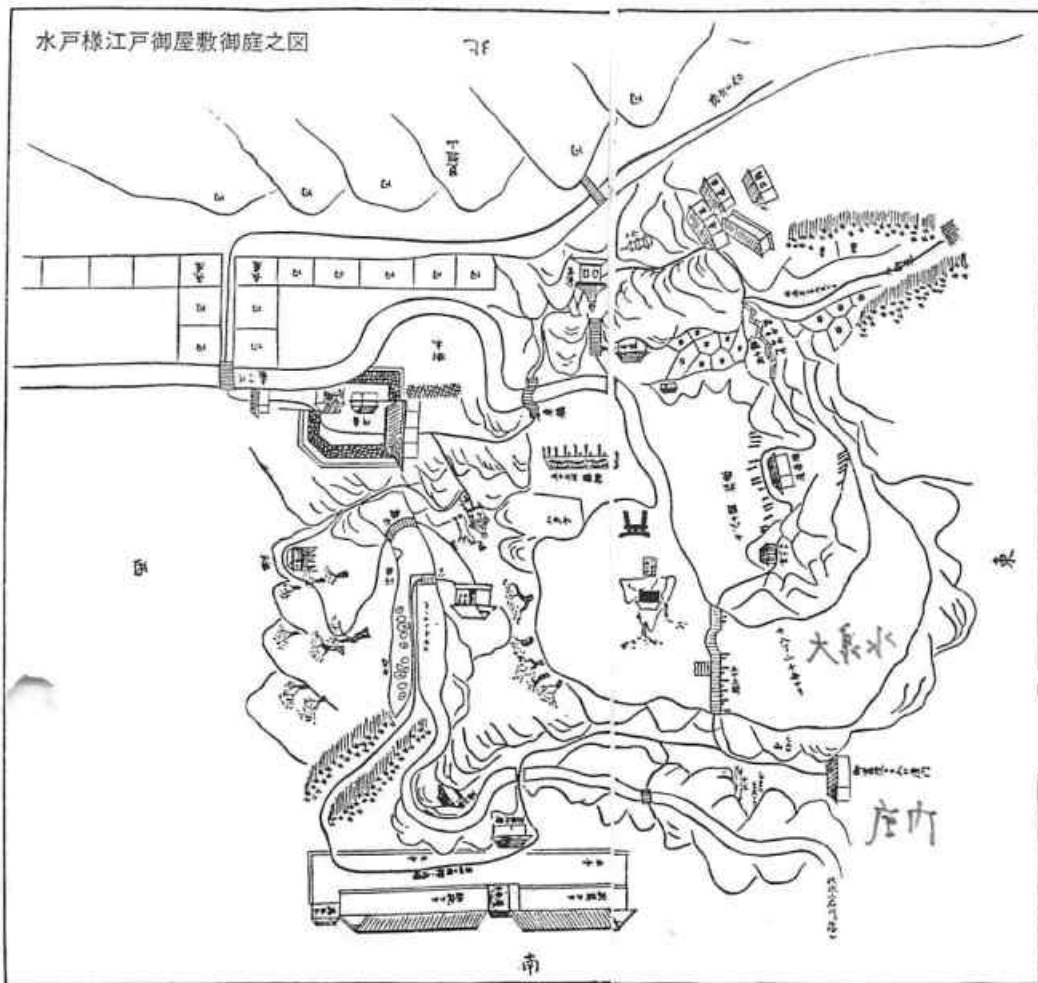
蓬萊島と徳大寺石↓



花いばいの野々系



水戸様江戸御屋敷御庭之図

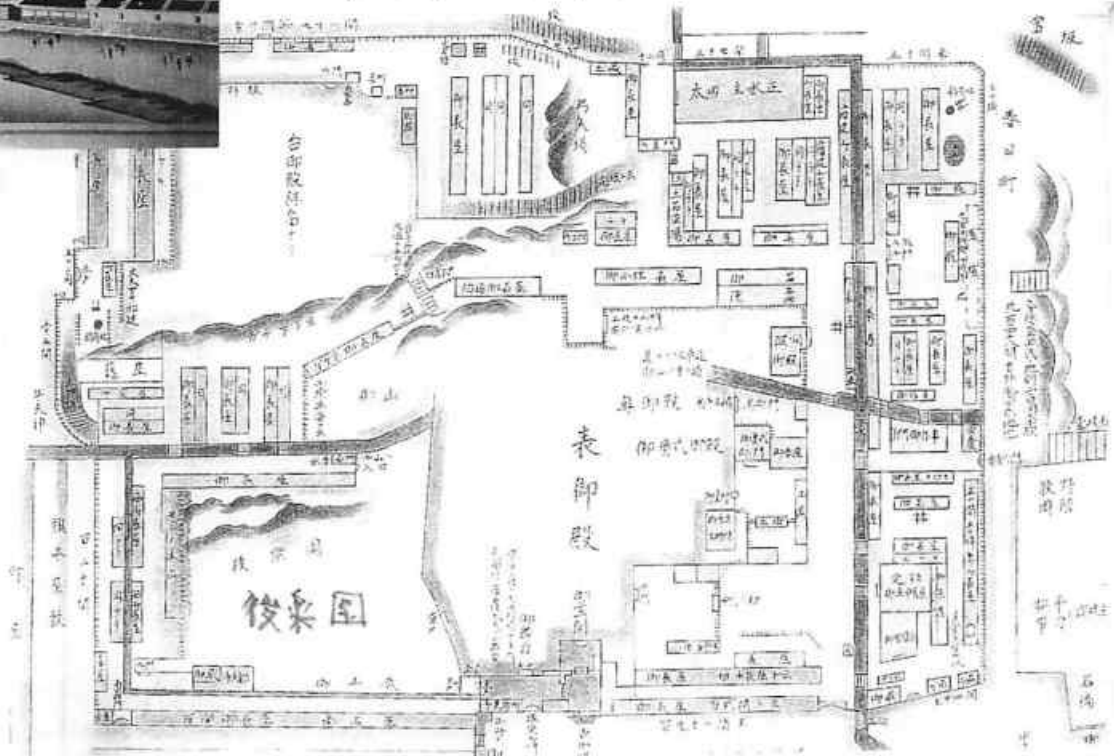


光圀時代、後園、表園、後園



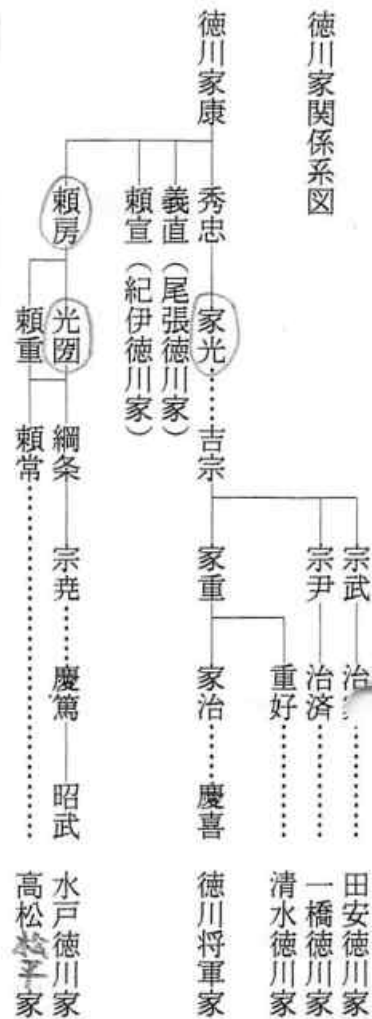
表内図

↓水戸徳川家上屋敷後園



表内

徳川家関係系図



田安德川家
一橋徳川家
清水徳川家
徳川將軍家

水戸徳川家
高松徳川家

情報発信基地・朝日新聞社と築地界限散策

研修日 平成17年6月16日(木)

日程 八幡公民館集合(出席確認) 8:40
 八幡公民館発 8:50
 ↓自由時間の過ごし方についてとりまとめ(名簿に記入)
 湾岸市川パーキング(WC) 9:30~9:40
 ↓浜離宮恩賜庭園の見どころについて
 築地本願寺(時間があれば) 10:30~10:40
 ↓ 10:50
 朝日新聞社(03-5540-7724) 11:00~12:30

バス

昼食 ①場外市場 ②浜離宮 ③朝日新聞社わきの小公園
 ④聖路加タワー内・テラス ⑤隅田川ぞい遊歩道
 ⑥浜離宮内花木園
 下線場所は屋根あり

昼食後 自由時間
 浜離宮見学希望者 13:30に浜離宮正門に集合
 入園料・一般300円(団割240円) 65歳以上150円(120円)

浜離宮駐車場集合 15:15
 (バスは、駐車場には長く駐車できません。遅れないように)
 浜離宮発 15:20
 ↓
 八幡公民館着 16:45

八幡公民館 電話(41-1984)



特別名勝及び特別史跡
浜離宮恩賜庭園

朝日新聞社

あゆみ

明治

- | | |
|-------------|---------------------------------|
| 1879. 1. 25 | 朝日新聞第1号。大阪で創刊 |
| 1888. 7. 10 | 東京朝日新聞（東朝）創刊 |
| 1899. 2. 1 | 東京・大阪間電話開通。東朝から大阪朝日（大朝）に初めて電話送稿 |
| 1904. 9. 30 | 日露戦争の戦地写真を東朝に掲載。朝日新聞に登場した最初の写真 |
| 1907. 4. 1 | 夏目漱石が入社 |
| 1909. 3. 1 | 石川啄木が入社 |

大正

- | | |
|--------------|--|
| 1915. 8. 18 | 朝日新聞社主催全国中学校優勝野球大会を開催。最初の大会は、豊中グラウンド。その後会場は、鳴尾運動場から現在の甲子園に |
| 1915. 10. 10 | 大阪朝日が夕刊を発行 |
| 1916. 3. 29 | 東朝の社会面に「青鉛筆」が登場 |
| 1921. 2. 1 | 東朝が夕刊を発行 「今日の問題」欄ができる |
| 1923. 9. 1 | 関東大震災で東朝の社屋全焼。帝国ホテルに仮事務所
震災から11日後の9月11日 4ページの朝刊を発行 |

昭和

- | | |
|--------------|--|
| 1935. 2. 11 | 九州 支社で夕刊の発行開始 |
| 1935. 11. 25 | 名古屋支社、朝夕刊発行 |
| 1936. 2. 26 | 2.26事件。反乱軍が東朝社屋を襲撃。2階文選工場の活字ケースをたおす |
| 1940. 9. 1 | 大阪朝日新聞・東京朝日新聞を朝日新聞に統一 |
| 1979. 1. 25 | 創刊100周年 |
| 1980. 9. 24 | 東京本社社屋を築地に移転。コンピューターによる新聞製作に移行 |
| 1986. 1. 1 | ロンドンで国際衛星版発行。その後オランダ、ニューヨーク、ロサンゼルス シンガポール、香港でも発行。日本と同じ日に同じ日付の新聞を国際衛星版として発行している |
| 1988. 7. 10 | 東京本社100周年。元日部数834万部。 |
| 1991. 2. 12 | 1段12字。文字を拡大 |
| 2001. 4. 1 | 1段11字。 |
| 2002. 4. 5 | 週末新聞「be」創刊 |
| 2004. 1. 1 | 南極支局開設（～2005. 2） |

築地本願寺

築地本願寺は、正式には「浄土真宗本願寺派本願寺築地別院」といい京都・西本願寺の別院。もとは浅草の近くにあったが、1657年（明暦7年）の振そで火事で焼失、現在地に移ってきた。当時は海辺だったこの地をうめ立てて、土地を築いたことから「築地御坊」の名が付き、以後、一帯を築地と呼ぶようになったという。古代インド洋式の本堂は、豪華で異国情緒に満ちた美しさをたたえている。本堂内は、従来通りの桃山様式を取り入れた荘厳なたたずまいとなっている。

仏教音楽を奏でるパイプオルガンが本堂に設置されており、パイプの大きさは、大きいものは3メートルから小さいものは1センチにも満たないものもあり、合計2000の管で構成されている。



勝鬨橋

晴海通りを月島方面に進むと、隅田川にかかる全長246メートルの勝鬨橋。中央部80メートルが跳ね上がるようになっているが、現在は、交通量の増加などで開閉はおこなっていない。橋の上からは佃島のウォーターフロント開発で登場した高層ビル群も眺められ、隅田川の大パノラマを觀賞出来る。



聖路加ガーデン

地上47階からの眺めは抜群。(晴れていれば)新宿ビル群 富士山はもちろん、浦安の大観覧車、そして房総半島も。夜景もすばらしい。無料なのがまたいい。ただし、47階からは北の方角は望めない。眼下には、朝日新聞社・築地市場・浜離宮恩賜庭園そしてレインボーブリッジが。

市場の近くに波除神社 お魚資料館がある。ちょっとよってみては？

隅田川河畔をゆっくり散歩

川を行きかう船や、対岸の高層ビルを眺めながら歩くのも「いきいき講座」の旅ならでは。

晴れた日もよいが、霧雨に煙る川面もまた風情があるかも。

浜離宮恩賜庭園

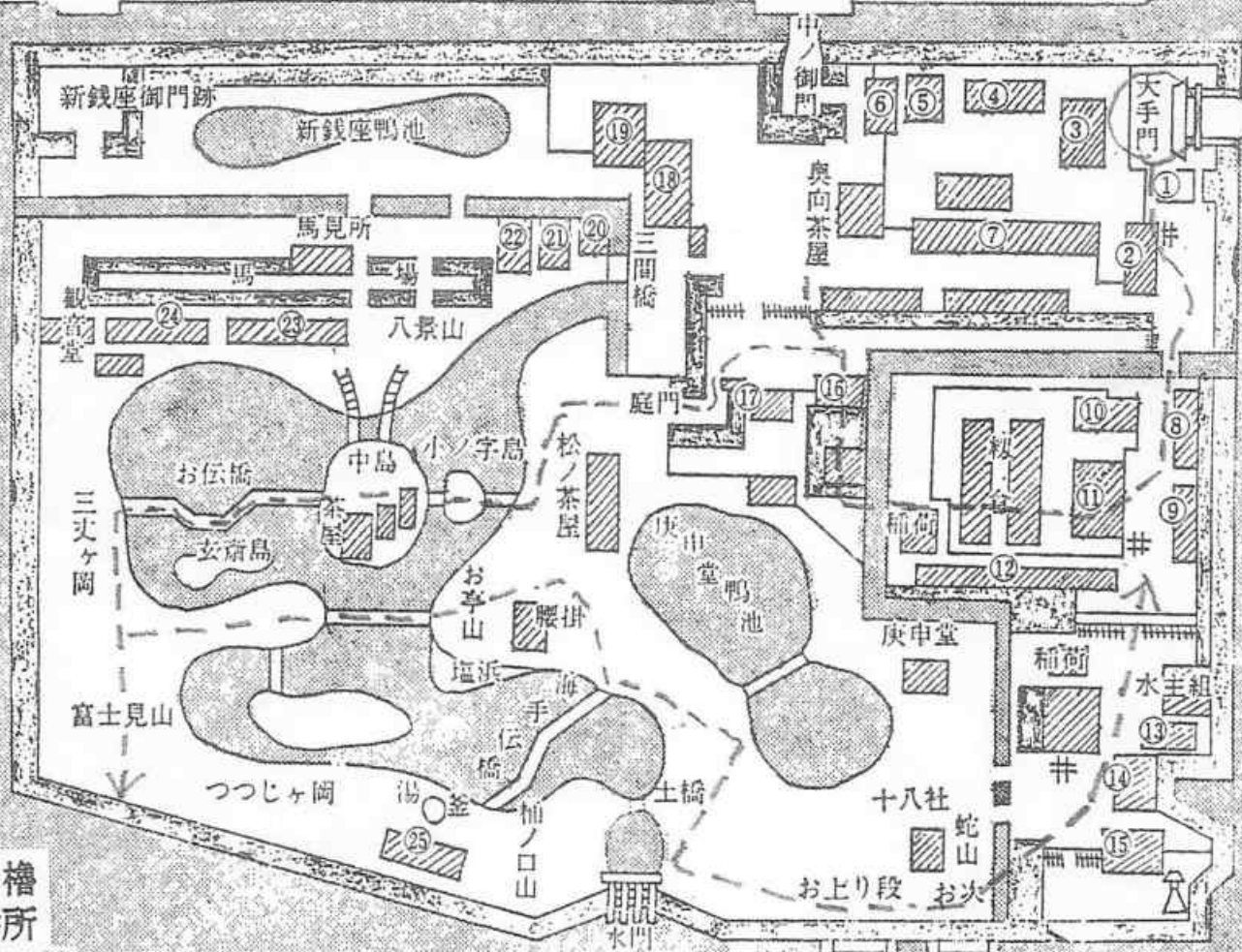


キーワード

- ①離宮恩賜庭園＝離宮は皇居以外の宮殿をいう。明治3年～離宮、迎賓館
昭和20年東京都に下賜
- ②潮入り池泉回遊式庭園＝海水を採り入れ、干満の水位変化で変わる景観を楽しむ
中心に据えた池泉を回遊する
- ③江戸城外郭、将軍家庭園＝水濠、石垣を巡らせた城郭、江戸湾海防砲台
⑩代将軍家斉が大勢の大奥女性を従えて遊ぶ

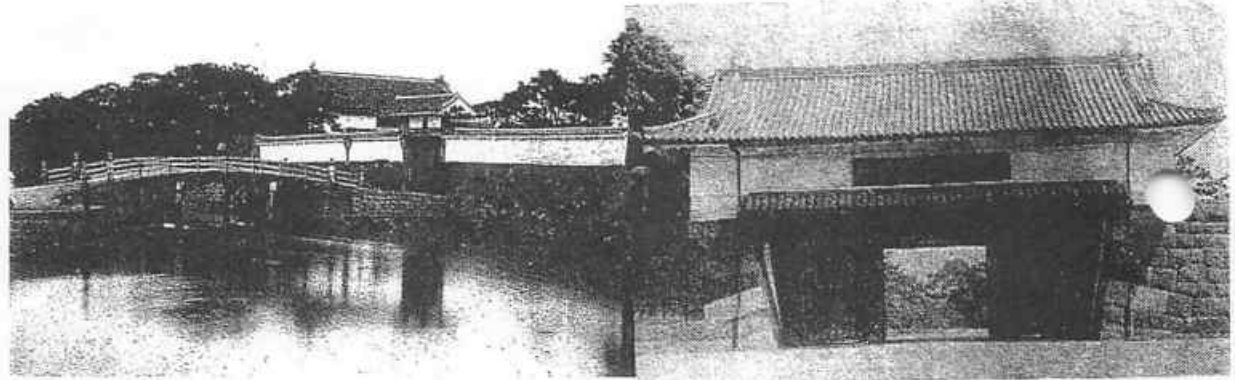
みどころいっぱい＝詳しく現地解説します

- ①掘割、石垣、渡櫓門升形＝厳めしい大手虎口の守り
- ②井戸跡＝飲料水の少ない江戸の上水道
- ③300年の松＝浜御殿、浜離宮の300年を見守る
- ④蔵屋敷跡＝水門、内堀、荷揚げ場が現存
- ⑤お花畑＝残念ながら菜の花→コスモス植替え中、バラ園は？
- ⑥将軍家御殿跡、延遊館跡＝賓客を迎えた内庭に花菖蒲咲き乱れる
- ⑦潮入りの池とお伝橋＝池泉のぞむ浜離宮最大のみどころ
- ⑧中島の茶屋＝家斉が入り浸った接待休憩所、見飽きぬ眺望を堪能
- ⑨岸壁＝江戸湾も防波堤と埋め立てで一変。幕末期は砲列を布く
- ⑩鴨場＝鴨を池におびき寄せて網ですくい取る。大名、貴族の遊び
- ⑪水門＝海水の取り入れ口。水の出入りを調整する
- ⑫将軍上り場＝⑭家茂は棺で、⑮慶喜は鳥羽伏見で敗れ消沈の帰還

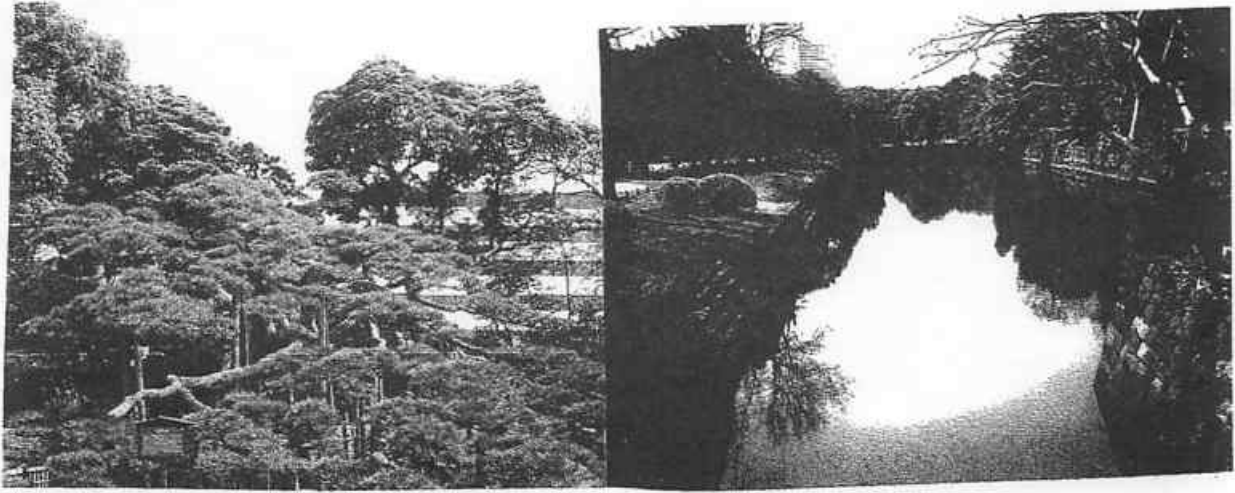


- ① 渡り櫓
- ② 大番所
- ③ 総御同勢
- ④ 御供溜り
- ⑤ 御畳方
- ⑥ 仮番所
- ⑦ 御掃除者長屋
- ⑧ 東御所
- ⑨ 北長屋
- ⑩ 小普請方
- ⑪ 小普請方役所
- ⑫ 御蔵代長屋
- ⑬ 番所
- ⑭ 御船蔵
- ⑮ 船番所
- ⑯ 馬見場
- ⑰ 御庭役所
- ⑱ 御殿奉行役宅
- ⑲ 南御長屋
- ⑳ 番所
- ㉑ 御鷹方
- ㉒ 御用所
- ㉓ 御膳所
- ㉔ 奥向休息所
- ㉕ 海手茶屋

⑪ 代持事
 京齊時代の遺跡



↑ 大手内高の内(左)と渡り櫓(右) ↓ 3月年、松 ↓ 内堀

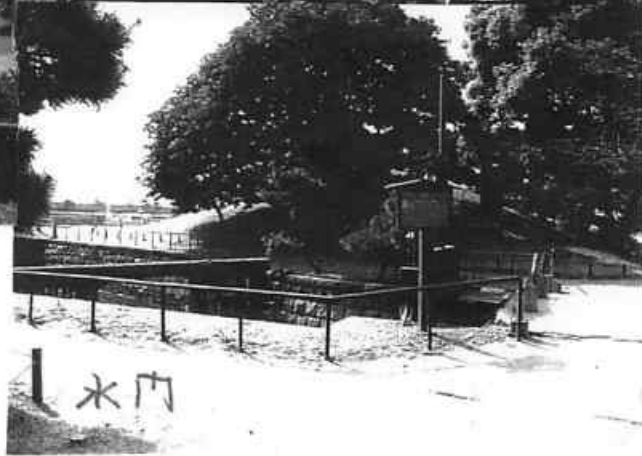


浜離宮恩賜庭園 現地ご案内資料

- ① 3代将軍家光の2男で4代家綱の弟、5代綱吉の兄・甲府宰相綱重が海浜蘆、葦しげる鷹場を下屋敷として拝領。嫡男でのちの6代将軍家宣が綱吉の御成りに備えて大改造、将軍家別荘、浜御殿とした。明治維新後、皇室の浜離宮とされたが、昭和20年東京都に下賜、一般開放された。
- ② 濠と石垣=江戸城の外郭。3面を濠(川)、1面を江戸湾(隅田川河口)に囲まれた要害
濠の石垣を観察。切込みハギ=精密に加工して積み上げる。寛永以降の石積技術
- ③ 大手門跡=城正門の意味。橋台、木橋、高麗門、内枳形左折れ、渡櫓門、番所、大番所
高麗門と渡櫓門は関東大震災で焼失、木橋はコンクリート橋に。井戸=水質悪く、上水道敷設?
- ④ 3百年の松=家宣の大改造時に植樹。都内最大級。太い幹が前方に張出し歴史の重みを感じる
- ⑤ お蔵道橋、船門、内堀(荷揚げ場)、蔵地=内堀の中は蔵地。下屋敷は蔵屋敷を兼ねること多い
- ⑥ 延遠館(迎賓館)跡=明治2年建築のわが国最初の洋式石造建築。本館433坪。米国グランド将軍、英国王子など賓客をもてなす。鹿鳴館の竣工で廃止、明治22年撤去
- ⑦ 御殿跡=綱吉を迎えた御成御殿が浜御殿に。享保9年焼失後再建なし。地形から推定できる
- ⑧ 中の御門、浜御殿奉行役宅跡=通用門。枳形石垣一部を残す。奉行は管理責任者200石高
- ⑨ 屋外卓広場=8代将軍吉宗は鍛冶、大砲所、製糖、製塩、サトウキビ、菓草園に
- ⑩ 回遊式潮入り築山泉庭園=潮入りは池に海水を引くこと。江戸湾、隅田川沿いの大名屋敷庭園に多い。唯一の現存。築山を強調。池泉回遊式庭園と微妙に異なる。ともに見所は池。潮の干満でおきる2mほどの水位変化が美しさ増大
- ⑪ 松の茶屋跡=茶屋は大名庭園園遊のための接待休憩所。茶屋礎石。ここからの池泉ながめ抜群
- ⑫ お伝い橋、小の字島=池周りとくに三間橋と周辺樹冠、中の橋などに注目
- ⑬ 中島の茶屋=宝永4年建造、復元。浜御殿中心の茶屋。将軍をはじめ多くの賓客を迎えた。御殿焼失後の代理御殿でも。門や飛石、垣根は京都雅びの雰囲気。最盛期11代将軍家斉は御成り20回。御台所篤姫も大勢の奥女中を引き連れて浜御殿に遊んだ(供の日記)。
- ⑭ 富士見山
- ⑮ 砲台跡=13代将軍家定時代。ペリー来航で内外が緊迫。江戸沿岸警備のため24斤カノン砲5門、ホウオイツル砲を設置、高松藩と幕府鉄砲方が部署を固める。慶応2年浜御殿を廃止、海軍所に
- ⑯ 横堀と中の橋、御亭(おちん)山
- ⑰ 庚申堂鴨場、のぞき=10代将軍家治が新銭座鴨場、家斉が庚申堂鴨場を構築。鷹に鴨を捕らせる簡易鷹狩。皇室の鴨漁は餌で誘って網で捕獲。大のぞき、小のぞきで雰囲気味わう
- ⑱ 横堀海手伝い橋
- ⑲ 水門=海水の取り入れ口。現在は増水しないよう調節
- ⑳ 新樋の口山=隅田川河口から東京湾を遠望。レインボーブリッジ、臨海副都心が美しい
- ㉑ 将軍上がり場=将軍の専用船着き場。政局混迷がつづく幕末、政治の舞台は江戸から京大阪へ。14代将軍家茂は3回上洛、慶応2年、第2次長州征伐、大阪城で急逝。棺の中無言の帰還
15代将軍慶喜は鳥羽伏見の戦いに敗れて、海路大阪を脱出。消沈の上陸。江戸無血開城へ
- ㉒ 燈台跡=11代将軍家斉が構築
- ㉓ 水上バス発着場=船たまり跡



浜離宮
お伝い橋↑
延遠館古写真

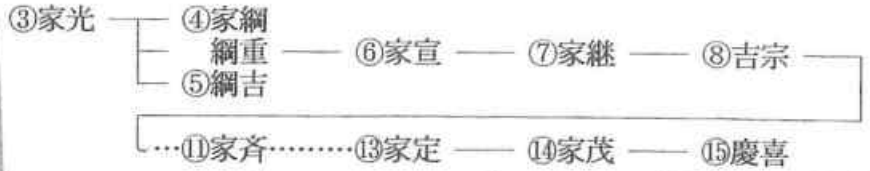


水内

歴代将軍にみる浜御殿の歴史



浜御殿の実質創設者⑥代将軍家宣



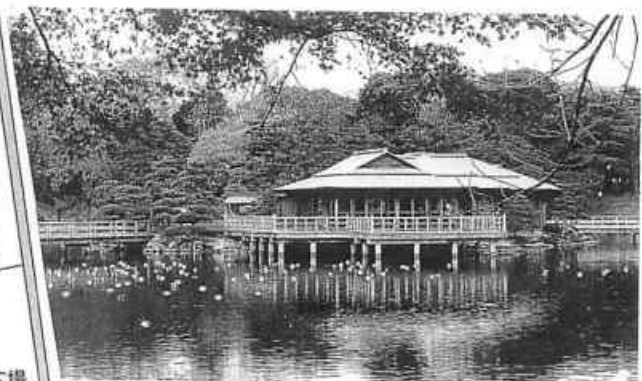
豪奢な消費生活を享受した⑩代将軍家齊



鳥羽伏見の戦いで敗れた⑮代将軍慶喜

- ③家光 = はじめに江戸湾ありき。寛永時代はアシ繁る御鷹場
承応3年、家光の2男、甲府綱重が下屋敷地として拝領、埋め立て
- ⑥家宣 (綱重の長男) = が大改修。綱吉養子、将軍就任で将軍家別荘に
- ⑧吉宗 = 享保の改革一貫として遊興から実用的利用へ転換
- ⑩家齊 = 浜御殿もっとも華やかな時代。将軍の来園40回、園内を整備
- ⑬家定 = 江戸湾海防のため沿岸砲台を設置、実射演習を上覧
- ⑭家茂 = 第2次長州征伐劣勢のうち大坂城で病死、涙誘う帰還
- ⑮慶喜 = 大坂城を密かに脱出、海路東帰、浜御殿へ上陸

○スージはP1と同じ



No. 089

特別名勝
特別史跡

都立

浜離宮恩賜庭園

65才以上150円、20人以上なら120円

希望者は13時30分駐車場集合

スタート・ゴール
集合

講座

八幡公民館いきいきくらぶ
平成17年度第2回(6月16日)
浜離宮ご案内=山岸弘明

希望者のみ

..... 昼食可能(ヤナマリ)